

目 次

告別の辞	神大水泳部部长	山田 幸男	1
古希の思い出	故古林喜楽先生	13	
故古林先生を偲ぶ			
古林先生を偲ぶ	大阪高商水泳部 O.B	近藤 悌治	21
若き日の喜楽さん	和歌山高商水泳部 O.B	山本 健二	21
50メートル平泳、古林選手対田口選手	田口 信教	23	
古林喜楽先生を思う	神戸大学名誉教授 家本秀太郎	24	
古林先生の思い出	学 1 小山賢之助	28	
水泳部長	学 1 草野 嘉一	30	
人生は意気である	学 1 山田 常雄	30	
古林喜楽先生を偲んで	学 3 宮本 伯夫	31	
古林先生と私	学 5 野村 弘	32	
古林先生の思い出	学 8 大内 義仁	33	
弥次喜多旅行	学 10 鈴木 啓介	34	
学問と運動と酒の恩師	学 11 平井 洋	34	
古林喜楽先生の御逝去を悼む	学 12 岡本 忠男	36	
古林先生を偲んで	学 22 石井 義章	39	
雑 感	新 3 田 潤 五郎	41	
ビールづくし	新 8 上村 久治	41	
台風下での三商大戦	新 10 萩原 武	43	
古林先生追悼	新 10 米田 啓祐	43	
古林先生追悼ピヤパーティ	幹事長 石井 義章	44	
稜雪クラブ報告文	新 11 平岡 昭朗	46	
会員からの御便り			48
現役部員寄稿			
我が愛する水泳部への提言	主 将 平石 康	57	
水泳コーチクリニック・レポート	四回生 酒井 正人	58	
限界への挑戦	四回生 村田 邦夫	60	
スキーは楽し	二回生 土井 祐二	61	
レポート「競技としての水泳について」	二回生 清水 万里	64	
関西ポロリーグ神京戦観戦	一女子部員	65	
一回生入部記		66	
「新入部員自由ノート」		68	
合 宿 記		70	
昭和五十一年度戦績		74	
現役部員ベスト記録一覧		85	
歴代十傑表		87	
昭和五十二年度凌泳会総会報告	幹事長 石井 義章	92	
昭和五十一年度決算報告		95	
昭和五十二年年度予算		96	
昭和五十二年度行事		97	
凌泳会会則		98	
凌泳会役員名簿		101	
凌泳会会員名簿		102	
「商神」 「応援歌」 「水泳部部歌」 楽譜・歌詩		124	
編 集 後 記		129	

告 別 の 辞

先生が総合大学・神戸大学第二代学長に就任されるとともに、先生と海道教授より水泳部長をやれと申し渡されたのは、たしか昭和二八年秋のことであつたと思う。いうまでもなく、先生は生れながらの泳ぎ手で、学長就任後も凌泳会長として月見の宴には必ずその勇姿一裸である一を出され、宴たけなわになるや六甲台プールにその自在な泳法をデモンストレイトされた。先輩・現役などのハラハラする中でビールとともに心ゆくまで泳がれた先生のお姿はいまだに私の心の中に鮮やかである。

先生は学長室にビールをおいておられたことは人の知るところである。さりながら、西欧の大学教授の研究室にもシェリーなどが謹厳な学究でも常置してあるし、ロンドン大学の教官食堂ではランチのときに、第一級のクラブならに各種の銘柄の品々が免税でサーヴされるのである。後年になって私は先生のビールは緊張した来客のストレス解消のためという効用を果していたことに気付いたのであつた。

古林亭喜楽という称号は、日本学術会議の席上で替え歌を披露されて以来のものであろう。憶えば二〇数年前のことである。天衣無縫といえはそのとおりであるが、先生のエンドレスの替え歌にストップをかけると、この勘定はお前払えと平然と続行されるのには閉口した。先生の念願とされていたプールの浄化装置も風呂場も完成している。

凌泳会での先生のご活躍振りについては、石井先輩をはじめ語られる方々が数多おられる。

古林喜楽先生は、プロフェッショナル・ドクトールであり、ディレクターであるばかりでなく、詩人ライターであられたのだということを知るのである。

多彩な先生のご活躍の一翼であつた水泳の分野の後輩として、ここに謹んで告別の辞を捧げるものである。

古林先生三千人ビア・パーティーを迎えつつ（昭和五二年五月二九日）

山 田 幸 男

（水泳部長・教授・法博）

歌い踊られる先生

昭和二十八年九月
エクランにて





昭和30年頃東京支部の会員と共に

後列左より 小池(学5) 北野(学20) ? 今枝(新1)

中列左より 中川(学20) 浜川(学22) 中平(学21)

前列左より 小山(学1) 古林先生 板野(学3)

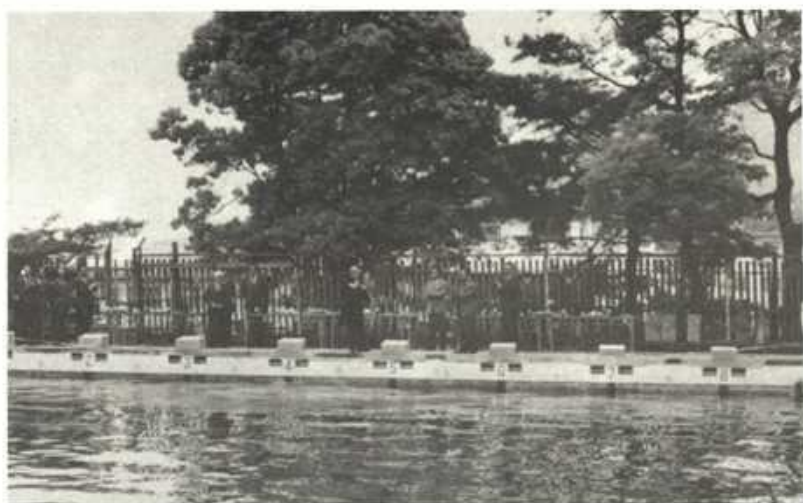
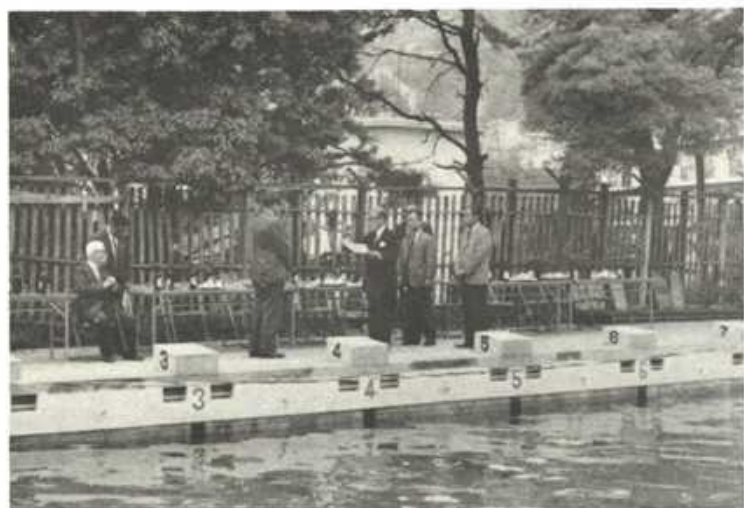
浄水装置寄贈式にて（四三年五月）

目録を読まれる先生

左より藤井正太郎氏

山田教授（水泳部長）

古林先生



改装なったプールにお浄めの
ビールを注がれる先生

浄水装置寄贈目録

神月大先生へ
の通り寄贈申
し上ります

目録

一 六甲台プール
浄化タンク 装置
一式

昭和四年五月二十二日

凌泳会
会長 古林正栄

神月大先生
八木弘毅

勲二等叙勲祝賀忘年会

昭和四十七年十二月十六日
(とけいや)にて





六甲台プールにて力泳
(44. 9. 13. 月見の宴にて)



熱弁か、将又、絶唱か？
(48. 9. 15. 月見の宴にて)



かるもプールにて初泳ぎ
(47. 1. 8)



平井洋氏提供



ミュンヘンオリンピック100米平泳、優勝
の田口選手に、プールサイドへ駆け寄り日章旗
を振られる先生（47年8月）



田口選手の応援に行くことを相談する為に
私の家において下さった（1972年7月）



ミュンヘン競技場にて
田口選手を応援するためこれから入場する処です
商大の教授 先生 私（鈴木）（1972年8月）



昭和五十年八月三日 神大——市大対抗戦（旧阪神高商戦）
—— 大会委員長を務める古林先生 —— 於六甲台プール



追悼パーティーにて

左より小山、山田、宮本各先輩
一人おいて長男博氏
光子夫人



先生の思出を語る
ミュンヘンの金メダリスト
田口選手

昭和五十二年度総会にて

左より鈴木、山田副会長、
小山会長、山田水泳部長
岡本前幹事長の各先輩



古稀の思い出

—— 古林先生隨筆集より ——

神戸から広島通い

ことし三月十五日に、岡山まで新幹線が開通して以来、私ほどの新幹線を利用したものはあるまい。とにかく三月十五日に初乗りして、美しい記念絵葉書をもらい、味をしめてそれから、毎週神戸から広島へ通勤しているのであるから、もう既に二十回近くも往復している。だから四十回ほど乗ったことになる。さてこうなると、乗리카タのコツが身につくとき、座席券が手に入らなくても、何とか結構座られるようになってしまふ。勿論すいた列車の穴場をねらうということもあり、立ち席で乗って、空いた席をさがしてもらふ素早さを、身につけたということもある。みどりの窓口は、いつもギリギリ時刻が迫ってから買いにゆくので、ないと断われることの方が多いのであるが、乗ってしまふと、一つ位はどこかに席があるものである。それに私は由来、座席券をもっていないも、あまり座席にすわらない悪いくせがある。家内と同行のときなどは、少し腰を落ち着けなさいと、しかられるのであるが、つい立ってしまうと、ピ

ユフェか食堂車の方へ足がむいてしまふ。あと何分という着駅の車内放送をきいたときには、もう降りることになってしまっていて、席をあたためる間もないというわけなのである。私にとっては、座わらない座席券を買うということになるので、どうも座席券を買うことには、そもそも初めから気乗りがしないのである。むかし大阪から東京への特急が七時間ぐらいかかったときのころ、ビュフェでジョッキを傾けていて、偶然知友とめぐりあい話しこんでいるうちに、すわらぬままの座席になってしまったことさえある。

さてこの頃、神戸と広島とを往き来していて、いささか気に障わることは、今大いにうけている森進一の「港町ブルース」や「波止場まち」のなかに、函館から鹿児島にかけて数々の港、あとの唄には横浜まで出てくるのに、天下の神戸港も、二つもある広島港も、一向にでてこないことである。そこでそれならそれで、こちらで作って織りこんでやろうと、車中つれづれなるままに、駄句をひねり出してみた。

—— 神戸 ——

丘にたたずみ 伏しみれば

内外の船が むれ動く

むせぶ汽笛に ネオンがまねく

港神戸メリケン 波止場まち

—— 広島 ——

思いおこせば あのころは

江田島海軍兵学校

御国のために 勇んで船出

港宇品軍港 呉みなと

森進一のうたう歌詞は、切ない港まち情緒をただよわせているのに、広島のは、いささか軍国調でそぐわないふしがなくてもないが、なにぶん広島には海軍兵学校出身のものがかなりいるので、何げなしにつくったこの私の唄も、案外うけているらしい。

かつて炭坑節が流行したとき、神戸にはじまって東京・静岡・京都・大阪とつくったが、広島にいと、また悪いくせが出てきて、広島のもつくってしまった。

あなた一体全体どこの人

みめ賑わしき宮島で

胸は音戸の瀬戸になる

心平和通り気は薬研堀

今の若者たちにとっては、八丁堀とか流れ川、新天地とかになるらしいが、古い広島人にとっては薬研堀ということになるらしい。片手落ちにならないように、旧作ではあるが事のついでに、神戸の

方も書き添えておこう。

あなた一体全体どこの人

姿舞子で目は垂水

足は長田で手は山手

心摩耶もや気は生田

広島へ帰るときには、何となく広島が懐しく、神戸へ帰るときにはその時で、神戸が何となく懐しく、岡山であたふたと新幹線に乗りかえる。車中では車中で、さまざまな人と、食堂でのみかわし、珍しい話をきく、広島通いじゃお疲れでしょうネと、人は心配してくれるのであるけれども、私にとっては、さほど苦痛でもない。何れ広島まで新幹線が開通し、神戸・広島間が二時間そこそこの通勤距離になってしまったら、時間の余裕がなくなってしまうって、早すぎるよと嘆くようなことにもなりかねない。これはあながち、白髪のお古来稀なるおじいちゃんの、負け悪しみではさらさらなく、いつわざる私のこの頃の実感なのである。

感激の金メダル

九月八日、ミュンヘンから久びさにわが家へ帰ってみたら、祝電やら祝い状が、山とつまれている。新聞の切りぬきが、方々から送

られてきている。家内がひどい目であったという。引つ切りなしにかかってくる電話で、息つく間もなかったという。

八月三十日、一〇〇メートルの平泳で、わが大学の田口君が優勝し、プールからあがってきた田口君と私が握手をし、大きな日の丸をふったのが、テレビに出たらしいのである。小旗の日の丸をふるものは、ほかにあった。しかし私ほど大きな国旗をもってきていたものは、外国人にもなかった。それがカメラマンの目にとまったのであろう。もちろん私は、故意にこんなことをやったのでは更々ない。ただ昔のように荒物屋で、簡単に日の丸が手に入らないので、わが家で大正以来愛用していた、色あせた日の丸を探り出して、携えていっただけのことなのである。家内はこんな汚れたものをといたが、色あせた桜ただ一つ、という歌もあるではないかとて、トランクにつめたんだ。

さてプールに入ってみてたまげた。恐ろしくデカイのである。前の方のスタンドの席から、うしろの席をみあげると、顔もろくにわからないし、手をふってもわからない。はるかかなたの天井裏からのぞいているように見える。小生はこれでも声の大きい方なのであるが、田口頭張れ、とどなっても、效のなくような声になってしまふ。これではならじと、ふと横の方をみると、下段への通路が、あたりまえのことながら、ガラ空きである。コレコレ！とばかりに、本番の直前、タタタタッと通路を駆け下りて最前列のところまでしゃがんだ。やがて音楽の吹奏とともに、選手が入ってくる。田口い

づくぞとさがしているうちに、顔がほてってきて、胸がドキドキ鼓動を打ちだした。本人より私の方が、あがってしまったらしい。

大学で田口君を送りだすとき、はなむけの言葉として、勝敗を忘れよ、日本を忘れよ、広島商科大学を忘れよ、ただひたすら、世界制覇にむかって一路まい進ばく進せよ、といった私の方が、このていたらくであった。

スタート台へ来たとき、彼はただ一人、うしろの飛び込み用プールへザンブとび込んだ。そしていよいよというとき、フライイングするものがある、やり直しとなったが、そのときも、またまた彼はうしろのプールへとびこんだ。あんなことをしているだろうかといふかったが、あとで考えてみると、彼もあがり気味の身体をひやしていたのであろう。

ビストルでないブザーの発音図では、どうかと気にかかっていたが、彼は見事にとびこんだ。よし！と思ったが一向にリードしそうもない。ハラハラしてみつめていると、五〇メートルのターンでぬかれている。しばし私のいきがとまった。田口頭張れ！あと三〇メートル、少し出てきた、それ頭張れ！グングン出てきた、やったぞと思った途端に、掲示板に赤々と、一着田口、タイム一分四秒九、世界新記録と出たのである。そのときの私の感激はシエクビア、ゲーテといえども、これを表現することはできないであろう。競技のすんだあと、同志の面々と勇みに勇んだ浮足で、ホーフア・ロイ・ハウスを追いこして、今世界一のピア・ホールになっている

マテーターへ乗りこみ、大ジョッキで祝盃をあげたときのビールのうちまかったこと！今思いおこしても胸がゾクゾクする。

先生と最もなじみの深いドイツで、先生のお好きなビールの本場ミュンヘンで、しかも三度のめしより好きだといわれていた水泳で、先生の大学の学生が、金メダルを獲得されたのですから、さぞ本望だったでしょう、という祝状が教え子からとどいた。

心労の多い大学の管理職で、三時間半かかる広島通いの折ふしには、何の因果で、私はこの年になってまで、苦勞しなければならぬのかと、沈んだ気持ちになったりしたこともあったが、あの輝かしい八月三十日には、一瞬にして何もかもすべてが吹きとんでしまった。ながらえは憂しとみしこの世でも、かくも素晴しく嬉しい目にあえることもあるのだなと、つくづく思いをあらたにしたのです。

水泳王国日本が凋落しはじめてから幾年ぞ！男子は十六年ぶり、女子は三十六年ぶりに、金メダルをせしめたのである。水泳王国日本の、まさに復活の年であり、それを成しとげてくれたのが、わが大学の田口君であるから、これを喜ばずして何をか喜ばんやである。

金メダル裏話

わが大学の愛する田口信教君が、十六年ぶりに水泳で、金メダルを獲得した。しかし、その裏には、筆舌につくせぬ忍苦精進のいば

らの道があった。私は、はなやかな金メダルそのものよりも、彼らたどってきたその苦難の体験に価値をみとめている。世界制覇を成しとげるためには、並々ならぬ努力の積み重ねと、強固な決意がいるのだということを、まざまざと見せつけられたからである。私自身顧みて襟を正したのである。恥ずかしながら、経営学を学び、研究はじめてから四十数年、いまだ私は世界制覇のできないことを反省している。勿論今となっては、既に手おくれであることぐらいはわきまえているが。田口君は平素から、身を持することきわめて厳、水・お茶・ジュースは絶対にのまない。のどが乾いたら、なにをのむのかと聞いたたら、牛乳だという。さて広島牛乳にBとCがどれほど入っているかと、案じたりしたこともあった。しかし、ドイツでは、牧草に農薬散布は禁じられているから、ドイツへいったら、うんとのとめといったこともある。禁酒禁煙は勿論のこと、麻雀・バチンコ・ボーリングなど、振りむきもしない。午前中に二時間、午後二時間、夜また一時間と、毎日かささず五時間泳いでいる。その現場へ行ってみると、あるときは両脚に片一方ずつバケツをしばりつけ、水をふくませて、前へ進めないようにして腕で必死に水をかいている。

私はかつてあるとき、ショランダーは三百六十五日、毎日五時間泳いで金メダルをかせいだ。少くとも毎日正月の元旦も五時間泳がなければといったこともある。彼がこれを実行しているということを知り、私は私なりに自信をつけていた。しかも彼は練習の寸暇

を利用し、大学へかけつけては、授業もちゃんとうけ、学業成績も悪くはない。まったく素晴らしい、いじらしいぐらいの好青年である。

私は思う。ゴルフで世界制覇をしようというつもりであるのならともかく、ウィーク・デーの昼間からゴルフにふけり、夜は夜でネオンの巷にさまよう、これではそれぞれのなりわいで、世界制覇はできっこないと。私も多少その気味があるので、あまり大きな口はきけないが。

七月五日の送り出し激励会で、私は彼にはなむけの言葉として、一つ勝敗を忘れよ、二つ日本を忘れよ、三つ広島商大を忘れよ、目指すは世界制覇ただ一つ、一路まい進ばく進せよ！ といった。私のあとに壇に立った同窓会長が、学長はあいつだったが、ときどきは広島商大を思いおこしてくれといって、万場をわかせた。

さていよいよ本番の前日、選手村へかけつけ、最後にもう一つ言葉をおくろうとした。ところが一切面会謝絶、立入禁止である。かくもあらんかとして、予め用意していたドイツ語の名刺を第一関門でわたしたところ、名刺と私の顔をジロジロながめかわす。恐らく本物かどうかをたしかめていたのであろう。ようやくよろしいといわれて入ったのであるが、第二関門では「ナイン」でせきとめられてしまった。

五月ごろ田口君に、見るな、聞くな、考えるなという言葉を書き紙に書いて贈ったことがある。案の定、八月上旬アメリカの水泳コー

チが、田口のレコードが一分六秒だときいて、そりゃ駄目だ、五秒台か最後は四秒だよと、鼻で軽くあしらったという記事が、日本の新聞に出た。日本側でも、水泳の金メダルは青木の一つだけだろうというのが、ほぼ一致した予測であったのである。私は心のなかで、田口君よ、見てくれるなよ、聞くなよ、と祈った。

ところがこのような浅薄な予想を裏切って、二つどころか、金と銅の二つで日の丸を二本高々とかけ、こちらの方が四秒台の世界新記録を頂いたのである。ザマー見ろである。

あの瞬間私は感激のあまり夢我夢中で日の丸を振ったのであったが、思いもよらず、この場面が世界中のテレビにうつり、新聞や週刊雑誌にのせられたらしく、帰ってきたら祝電が積まれてあり、会う人ごとに、おめでとう、おめでとうといわれる始末である。私じゃないんだ、金メダルは田口なんだよ、といってもみんなが私に、おめでとうといってくれるので、私の方がたまげている。

田口君には勿論素質はあった。また田口君をここまで育てた徳田コーチも大した男である。しかし三年前、ミュンヘンを見越して、あの立派なプールをつくられた藤田さんもえらいと思う。今まで日本の水泳の凋落を見て、体力の問題だと人はいっていた。私はただ一人、施設の問題だといっていた。三百六十五日、元旦も泳げるプールを日本国中至るところにつくれば、水泳王国日本は復活できるのだといっていた。田口君がそれを実証してくれたので、私はこの意味でも全く嬉しい。

オリンピック余話

今年のハイライトになるであろう、水泳の金メダルを連載してきたので、最後に、オリンピックこぼれ話として、この随想をおさめることにしよう。

わが大学の田口君が、百米平泳で金メダルをせしめてくれたころは、ミュンヘンはオリンピック・ムードで、湧きかえっていた。会期はまだ半ばだというのに、世界中から押しつけてきた観衆は、既に東京やメキシコのときの人数を突破し、このまま続けば四百数十万人に達するであろうといわれ、競技では世界新記録が次から次へと続出して、この数でもニュー・レコードをつくり、入場券の闇値までもが十一倍に暴騰して、三つの新記録が出たと、新聞は報じていた。

街は街で、二年前のミュンヘンとは、すっかり変わってしまった。駅前の本通りを見すごしたりした。店は店で、はなやかに飾りつけられ、一大お祭り騒ぎであった。素晴らしい地下鉄が出現して、方角を見うしなったりした。道行く人は人種の展覧会のように、ドイツでドイツ語が通じないことが、しばしばであった。外国のなかに外国ができたような感じがした。話しかけたらドイツ語が通じない。聞けばポルトガル人であった。英語ならわかるかと思つて話しかけたら、また通じない。今度はギリシヤ人であった。

タクシーの運ちゃんに、話しかけたら、英語で返事する。どこから来たのかと聞いたら、ドイツ人だという。ドイツ人なら、ドイツ語でしゃべったらどうなんだ。ドイツくんたりまで来て、英語なんかしゃべりたくないよといったら、ようよう母国語にもどった。

八月二十五日、ミュンヘンに着くなりタクシーに乗った。運ちゃんがおめでとうという。つい今ラジオで、日本の田口が百米平泳で世界レコードを出しましたよと。決勝前日の準決勝で既に世界レコードを破っていたらしい。その日は新聞を買いそねて、記録を見なかったのであるが、あとで田口君に聞くと、五分一秒という大記録であつたらしい。予選ではアメリカ勢の方が六分をちよびり切つたらしいのであるが、準決勝の田口君のタイムには、彼等もたまげてしまつて、田口には勝てないと思つたらしい。

平泳の二百米の方は、はじめから金は無理だと、とくに承知していたので、銅を獲得するだけでよかったと思つたのであるが、アメリカ勢の方は逆に、百米で驚異的な四秒台を出したのだから、これもまた田口君には勝てないと思つていたらしい。それで仕合のすんだあと、彼らは田口君に、なぜ君は全力を出さなかったのかと、いふかつて聞いたらしい。

オリンピック・ムードで、物価も暴騰した。一晚泊まるだけのモーターの宿賃が、なんと一万五千円であつた。ミュンヘンを離れてから、ポツムの一流のホテルへ泊ったら、三千円であつた。タクシーの運ちゃんが、ミュンヘンの物価は、価格の概念をこえている。

あんなのは無茶苦茶ですよ、ミュンヘンで買ひものなんかする者は、阿呆ですよと、囁んではい出すようにいった。価格の概念に入らないという表現は、ドイツ人らしいなアと思った。私はあまり買ひものをしなかったので、阿呆の程度もおかげで少なくてすんだらしい。ミュンヘンを去った翌日、センセイショナルな一大ハブニングが勃発して、またまたオリンピック・ニュー・レコードが出現した。田口君が金メダルをもらったときのあの笑顔は、天下一品の全く素晴らしいものであった。

ところでアラブゲリラにイスラエル選手団の人質が全員いけにえになったあとのことである。五十キロ競歩で優勝した西ドイツのカンネンベルクが金メダルをもらったときの顔はまさに正反対の、つらいというか苦しいというか、目の周辺がしわだらけで、嬉しさが見られない。彼はふるさとの祝賀行事をすべて辞退したという。明暗織りまぜたこんなオリンピックは、史上唯一一つのものになるのではなからうか。

これにめぐりあえた私の今年の運勢も、これまた強かったのかも知れない。

金メダルと勲章

ミュンヘン・オリンピックで、わが大学の田口信教君が、水泳では久々十六年ぶりに、金メダルを獲得してくれたときの感激が、い

まださめやらぬときであった。神戸大学から内報として、文化の日に勲二等旭日章がさがることになったが、受けてくれるかと電話がかかってきた。あとで聞くと戸田学長は、私が辞退しないかと案じてくれていたらしい。私のいまの本職は、広島商科大学であり、それならばこそ遙々ミュンヘンへまで、応援に出かけたのであるが、七年前に定年退職した神戸大学の方に内報があつて、本拠の方にはなんの音沙汰もないので、果て面妖なと思った。

どうしたことか今年、気味の悪いほどお芽出とうと、言われ通してあつた。五月二十六日には古稀の祝いをうけ、八月三十日の田口君の金メダルとなるや、祝電が山のように積まれて会う人ごとにお芽出とうと言われ、今また勲章で、見知らぬ人からまでお祝いの言葉をかけられる。大臣・知事・社長さんたちにはじまって、今まであまり昵懇でもなかつた人たちからまで、さまざまな祝意が表されてくる。今さらながら勲章の偉力におどろくとともに、なぜ急にこんなことになるのであろうかといぶかつてもいる。世の中というもの、こういうものだといふことが判ただけでも、辞退しなくてよかつたと思つてゐるのであるが、それよりも私が何よりも嬉しく思うことは、教え子たちが無性に喜んでくれたことである。人さまをかくまで喜ばせるのであれば、受けるのは功德ともなり、天のじゃく振りを発揮して、断わる手はないとつくづく思つた次第である。ただ私個人の気持ちとしては、私のようなものより、下積みの縁の下の力もちで、世のため人のために涙ぐましい奉仕をしていら

れる無名の人たちの方を表彰して頂きたかった思いには、今も変わりはない。

私はいま、今年になって三つまでおめでたが続いたので、もうこれ以上は年内に、祝いごとがないようにと祈っている。それにしても今年の私の運勢は一体どうなっているのかと、占いの本の八白土星のところをのぞいて見た。それによると、今年は衰運波瀾曲折の年とあり、五月は大きな痛手を蒙る月、八月は暗剣殺の凶悪の位置にあり、十一月はどん底まで蹴り落される月となっている。正に正反対のようなことになっている。しかしましてし、私が母のおなかに宿ったのは前の年である。そこで前年の九紫火星のところをめぐって見た。本年は明暗両途に呻吟する衰運の年とあるが、五月は俄然運氣を取りもどし、八月は成運の月船が希望の岬を横切る、十一月は運氣好転して盛運にむかうとなっていた。占い屋さんには、まことに相すまないが、占いなんてあんまりあてにならない実証のようなことになってしまった。

昨年以來、田口君にはいろいろアドバイスをした。毎日これを見てください、色紙に心がまえの文言も書いた。七月送り出すときには、全学挙げての壮行会で、型破りのはなむけの言葉を贈った。糸平画家にたのんで苦心の筆も揮ってもらい、教え子に豊川稲荷の第一号のお守りを、早朝の四時にもらってもらったりして、ひたすら世界制覇を祈ったのである。

私にとっては第二のふるさとの思いであるドイツ、私の好物のピ

ールの本場であるミュンヘンにおいて、しかも水をみたらどこでも飛びこみたくなるほど好きな水泳で、わが大学のいとしい学生である田口君が、日本にとっては十六年振りに、金メダルをとってくれたのであるから、その瞬間の私の感激が、いかばかりであったか察して頂けるであろう。これ以上の感激は、私にとってはもはや永劫あり得ないと思われる。

ゴールインして、掲示板の田口のところに真っさきに赤ランプがつき、驚異的な世界新記録がうつし出されたとき、私は無我夢中で、わが家の色あせた大きな日の丸を、これ見よとばかりに振った。田口君がかけよって来てくれて握手したとき、私は心の中で泣いていたのである。「よくやったぞ」それ以上言葉が出なかった。あとで田口君に聞くと、私が柵をとびこえて、プールにとび込みはしないかと、心配してかけよってきてくれたのだという。もう少し柵が低かったら、あるいはそのようなハップニングが、おこっていたのかも知れない。オーバーな表現と受けとられるかも知れないが、ときどき、もしあの時、私がそのまま蒸発してしまっていたら、私ほどしあわせな一生を送ったものはないのではないかとさえ思ったりしている。

あと一年半、私は世界一の男と同じ学びやで生活をともにする。彼に会うごとに私は襟を正す。世界制覇を成しとげるまでの、彼の日々の難行苦行をつぶさに知っているだけに、頭が下がるのである。そしてこのような目にあえる幸運を思うとき、今にして私は生甲斐を感じるのである。

故古林先生を偲ぶ

古林先生を偲ぶ

大阪市大水泳部OB

近 藤 健 治

大阪市大には、今、立派な五〇米プールがありますが、このプールが出来たのは、実は、古林先生のお蔭であると私は思っております。

昭和三十八年の旧三商大戦のあとのミーティングで、古林先生が『我々はプールを持たない大阪市大に勝っても、少しも面白くない。神戸も一橋も大阪がプールを建設することに協力してやろうじゃないか』と発言された。その席に居った私共大阪のOBは、これは何としても後輩のために、一日も早くプールを作ってやらねばと発奮したものです。古林先生は我々大阪のOBに『君達ほもっとしっかりせよ』と実にうまく間接的に叱咤激励されたのです。我々はこの一言にフアイトを燃やして、故市村会長を先頭に、大学当局や大阪市議会に、繰返し陳情し、執拗に運動を続けました。そして遂に昭和四十年五月、大阪市大後援会の第一号の事業としてプール建設が決定され、四十一年に待望のプールが竣工しました。その後三高大

戦に大阪が優勝した時、私は心の中で、先づ古林先生にお礼を申し上げます。

古林先生といえば、経営学者として、私共は夙にそのご高名を承っておりますが、ピールを片手にシャンソンを歌われる先生、我々大阪のOBにも、わけへだてなく『一寸一杯やりましょう』などと声をかけて下さって、含蓄のある話をして下さった先生は、そんな学がぶったところを見せない、本当に立派な人生の師でもあったと心から敬慕しています。

若き日の喜楽さん

和歌山高商六回生

山 本 健 二

古林先生……と呼ぶより以下喜楽さんと呼ばして頂きたい……：と私のつながりは、私が昭和三年四月、当時の和歌山高商に入学し、水泳部に入部したときにはじまった。

水泳部の新入生歓迎会が、新和歌浦の料亭でもたれ、それは芸者をあげて酒を飲み歌もうたう愉快な席であった。水泳部長の喜楽さんは、床柱を背に坐っておられたが、その時の喜楽さんは、後年の喜楽さんとうてい想像しえないような、酒も煙草ものまねば、歌も知らないような真面目な青年教授であった。（未だ独身で、キリスト教信者であったお母さんと二人暮らしで、その薫陶をうけられた

ようであった。

元氣一杯の水泳部の古参連が、喜楽さんに酒をすすめると、にこにこしながら、しぶしぶ杯をとりあげられていた姿を、いまでもまざまざと思い起こすことができる。

喜楽さんの研究室は、プールの近くで、研究室の窓から木立ち越しに、プールのようすが手にとるように見えるところであった。われわれ部員が集まって練習をはじめると、研究室の喜楽さんはじっとしておられらしく、すぐにプールサイドに姿をあらわし、われわれの練習ぶりをながめ、気が向くと水着姿になってプールに飛びこんでこられた。喜楽さんは泳ぐのが人一倍好きで、晩年まで機会さえあれば泳がれていたと聞いている。

当時の和歌山高商は、資本論の訳者であった宮川実、マルクス嫌いの山本勝市、経済政策の翹潮、会计学の木村和三郎、経営学の古林喜楽といずれも潑刺たる若手の勉強家揃いで、学問的ふん囲気も活き活きとしていたが、他方遊ぶ方でも学問に劣らず盛んなものがあった。

当時の和歌山市は、高商所在地の中都市として、学校に好意的であり、教授も学生も市民から暖かい眼をもって迎えられ、少々の脱線も大目に見られるような、のびのびとした学園生活であった。

このような環境で、書楽さんの和歌山時代は大きく変転飛躍したようである。喜楽さんは包擁力の大きい人であった。自分に近づいてくる者は誰でも拒まず、同じように温かい態度で迎えられたので、

われわれ水泳部員のみならず、秀才肌の勉強家も、遊んでばかりいたやんちゃ者も、皆一様に喜楽さんのお宅へよくおしかけた。

そして、いつのまにか、喜楽さんはお酒の手もあがり、酔えばとうとうと歌がとびだす酒席の雄へと変貌をとげていかれた。

そんな喜楽さんに一つの艶っぽいエピソードがある。(奥さんはさっぱりした方だから、こんなことを書いても、笑ってお許し頂けるだろう。)それは、地元一番の売れっ娘で、しかも評判の堅物で通っていた芸者が、喜楽さんにぞっこん惚れこんだのである。女性に惚れられて気持のよくない男性などあるわけもなく、喜楽さんも憎からず思われたのは当然である。しかし、はたの者がはらはらして心配するのをよそに、それ以上には進展しなかったと思うが、とにかく、このように喜楽さんは玄人の女性にも好かれるよい処があった。

われわれが卒業後も、同期生の集いには必ず喜楽さんに御案内を差しあげ、喜楽さんまでできるだけ出席して下さったが、それはお互いに和歌山時代の懐かしさがあったからであらう。

私の先輩で友人でもある、神戸商大時代の水泳部員であった山田常雄兄から、喜楽さん重態の知らせを貰って、昨年末、舞子の病床にお見舞したのが最後になった。

喜楽さんは、私のみならず、われわれの胸にいつまでも忘れ得ない人として残るであらう。

50メートル平泳、古林選手対田口選手

田 口 信 教

このレースの切っ掛けとなったのは、私がミュンヘンオリンピックから帰り、優勝祝賀パーティを広島県立室内プールで開いていた時でした。だれが話したかは定かではありませんが、「古林先生と田口選手が競争したらどのくらい差が出るか見たいものですね」、丁度プールもある事だし今から試合をやってみてはどうですか」と、チョットした酒の上での戯言が、先生を其気にさせてしまうことになり、百人を越える水泳関係者の見守る中で、正規のルールに則て、パーティの真最中に先生と私が50メートル平泳を競争する事とあいなつたわけであります。

私は直ぐに更衣室にいき服を水泳パンツにきがえてくると、古林先生は、私よりいち早くきかえられコース台の近くにいき皆の注目を浴びながら体操をしているではありませんか。後で聞いてみると先生は服の下に水泳パンツをはいてこのパーティにきていたとの事で、早いはずである。古林先生は常日頃から身近な所に常に水泳パンツとタオルはおいて置かれていたのはよく知っていましたが、パーティがプールサイドでおこなわれるというだけで、パーティに水泳パンツをはいてこられるとは思ってもよらなかった、さすが古林先生。

いよいよ、ヨイ、ドンで百人を越える水泳関係者が見守る中で

50メートル泳ぐわけですが、先生がこのパーティで、先生の好きなビールが出ていのに飲まないわけはなく、顔が少し赤くなっており結構飲んでいるようであった。それを見た審判長がドクビイングのクレームをつけて、先生、お歳もお歳ですのでお辞めになってはと声がかかる、アルコールはドクビイングには引つ掛からないと、ガーンとして聞かない。15分ほど採めた末、本多選手（100M背泳日本新記録保持者）に古林先生の直ぐ後を泳がせ、先生に、もしもの事があつた場合直ぐに助けだせるよし、プールの両サイドに10M間隔で審判員を立て、そして、プールサイドにタンカーと酸素マスクを置き、万全に備なえる事で落ち着いた。

いよいよスタートである。ヨイ——両選手力みすぎか呼吸が合わずフライイング、「先生のスタートの型は今国際的に流行っているクラブスタートで、さすが古林先生」2回目のスタート。ヨイ、ドン これから先きは見ていた関係者の話し、浮き上つた所で身体、一身長の差、25メートルで10Mの差、「先生の泳ぎは我流にしては基本が確りしており、長年のキャリアが物を言う、感じである」後半30Mあたりの所から歳のせいか、はたまた、ビールのせいか、スピーイドがガクと落、20メートルの差、残り20メートル「この時すでに私はゴールインしていた。」全員先生を注目し見守る。沈黙が約20秒間ほど続いた。古林先生がゴールすると同時に割れんばかりの拍手がおこった。先生は、さすがに全力投球で泳いだと見、直ぐにはプールサイドに上がれず、大きな呼吸をなん回もな

ん回もしていた。だがその顔には苦しさはなく、好きなビールを飲んで
いる時の顔となんら変る所なく満足そうであった。

結果がスピーカーで大きく発表された。私の記録は30秒5で日本
新記録にあと少しといった所であった。そして古林先生の記録は55
秒7で私との差は約20Mであった。この後またエピソードは続くが
省略する。

このブルサイドの祝賀パーティのエピソードは古林先生がこれ
までに作られたエピソードのほんのひとコマにすぎない。先生と私
とだけのエピソードを数えても、10本の指ではたらないくらいある。
古林先生は私の知る限りでは、これまでどんな所にかかれても人々
の注目を集め、人々を楽しませ、話題を残し、一般の人にはない人
を引き付ける魅力を持っていた人であった。

古林喜楽先生を思う

神戸大学名誉教授

家本 秀太郎

古林喜楽先生を語るにふさわしい人は数十人を下らないだろう。

先生はそれほど多方面の人々と親交があったし、それほどどの方面
でも人に慕われ人に功徳を施し、そして神戸大学の永い発展のため
にいくつもの残る大きい仕事をされた。さらに日本の経営学界に対
して新しい社会主義的刷新の新风を大胆に吹き込まれた。

わたくし自身、とても先生を語る資格など全くない。ただ、先生

が神戸大学長時代、学長という孤独の日々を黙々として学長室に耐
えられながら、「俺はやる」の闘志に燃えて、いまま輝く礎を大学
のために建設して下さった謝恩の示しとして、拙いわたくしの思い
出を記してみたい。先生わらって下さい。

古林先生を語る人の多くはあの豪放しゃ落・縦横かつ達の酒豪の
先生をまず思い浮べるだろう。それほど先生のこのトレード・マー
クはほぼ定着していたように思う。しかしわたくしは、先生の真面
目は酒や豪語ではなくして、まさに先生が神戸大学のために心血を
注がれた二つの大きい事業——神戸大学学舎統合と財団法人六甲台
後援会基金の募金——にあったと思う。先生のあの心温まる学生・
知人との対話や興ずればたちどころに湧き出る即興の妙歌や神戸三
宮方面での午後五時以後のご活躍、そして大学紛争時の藤のご尽力
など、先生の人格・思想・人間幅・人類愛・学究熱を表象する人間
像については、それこそ幾十人の方々からやがては繰返し語り尽さ
れることだろうから、わたくしはここでは、わたくしに与えられた
紙面を、この二つの事業を中心として書きつらねてみたいと思う。

神戸大学学舎統合問題、平たくいえば蛸足大学解消の問題。それ
は府県単位で学舎統合の宿題を課せられたいわゆる地方大学の宿命
ともいえるものであって、新制大学発足の昭和二四年春から起った
全国国立大学の一つの共通の難題であった。神戸大学にとって具体
的には、まず教養部姫路分校・御影分校と神戸市須磨区西代の工学
部との六甲台移転であり、同時に目前に迫っている文学部・理学部

の敷地設定であり、そしてその後新設された農学部と最後になって移転編入された教育学部の拡大敷地の確保の問題であった。教養部を除いて九学部・一付置研を擁する今日の神戸大学が当時六甲台三学部敷地しか手にしていなかったことを思うと、この学舎統合問題が当時いかに緊急な問題であり、また同時にこの問題の解決によっていかに大きい建設上の礎が神戸大学のために布かれたかを知ることができると思う。

昭和二年五月、米國占領軍神戸ベースは神戸大学六甲台学舎の全面接収を突如申し出てきた。教授連は一丸となって火だるまの闘争を開始し、苦戦半年の後にはGHQにおける「米軍は日本の一切の教育施設を接収せず」との決定によって神戸大学はその接収を免れ、文部省からはその努力を感謝された。しかし六甲ハイッにはやがて一面に米軍家族寮が立ち並び、兵庫県がその管理の責に任ぜられた。この間古林先生のけい眼は、「もしこの六甲ハイッ全域がわれわれ神戸大学の手収められるならば、神戸大学の増加分散の悩みは一挙に解消するだろう」との大きい夢の実現を見逃しはしなかった。一どは尼崎市武庫川東岸の広い一面を工学部のために尼崎市から無償提供の約束を受けていたのも発展解消して、先生はかねがね思想的にもまた酒興の上でも、着想・峻敏の判断力・決断力の上でも瓜二つだった兵庫県知事、阪本勝氏に直接話かけ、全六甲ハイッの国有移管に神戸大学移管への準備に万遺漏なき交渉をひそかに続けていかれたのである。姫路分校・西代学舎の旧敷地建物の県

移管を含めて話がほぼまとまろうとしていた頃、気の早い教授たちの間には、「僕の家はあの格好いい家がいいね。」「いや僕はこちらの方がいいよ」などと正気で取らぬ狸話がささやかれるハブニングもあった。阪本知事と古林学長との個人的な強い結びつきが神戸大学百年の計へのお二人の深い認識の裏づけとなって、六甲ハイッは、米進駐軍の神戸撤退とともに、みごとに兵庫県から神戸大学への主管者移籍が実現したのである。そして局所的な問題ながら、六甲ハイッ東南端の一部民有地の国有移管については最後まで折合いがつかなかったが、これもあたかも大学本部の新築とともに文部省よりの特別購入資金によってその買上げが幾年か振りに実現し、ここに今日みる如き本部および文・理・工・農四学部の共同敷地として、完全に神戸大学全域の前面区画を形づけることになったのである。なおこの六甲ハイッについては、ひもとけば一つの思い出がある。すなわち、六甲台三学部の前身神戸商業大学が昭和九年に神戸市葦合区の旧神戸高等商業学校校舎（現神戸市立葦合高校）から、前にちぬの海を臨みうしろに六甲連山を負う中腹の由緒の地赤松城跡に移転しようとしたとき、（六甲台正門を入ったところの御影石石段と左桜道は旧校舎の風情を再現したもの）その海と山を一望する海外にも珍らしい最も美観の地として、今日の六甲ハイッの地をわが第一候補地と定めて計画を進めたのであるが、いかんせん、その土地所有の第三国人がわれわれの計画を先取りして、坪当り五円を値上げして坪二五円と提示したため、大学はやむなく涙を呑んで

現在の三学部敷地に舞い上らざるをえなかった。三学部本館（現在の経済学部・経営学部）の建築費が、施工者大林組の犠牲的建築だったとはいえ、僅か三六万円の時代だったのである。思えば神戸商業大学の赤松城跡への移転は今日の神戸大学十一万坪全キャンパスの先鞭着地であり、一時は手離した六甲ハイットも阪本勝川古林喜楽両巨頭の温い努力の賜によって最後には神戸大学の手に収められたことは、大事業の蔭には厚い人間関係の結びつきが常に秘められていることを思うのである。序ながらいま一つ述べたいことは、われわれが神戸大学の近き将来の発展のために是非一つの新しい広大な敷地を確保する必要を痛感し現に一、二の候補地を見出していたのであるが、偶々神戸市の内々の好意によって、市が既にその住宅供給公社住宅予定地として備えてあった三田市近郊の清閑な丘陵水辺の数万坪を神戸大学に譲り渡してもよいとの内諾をうることができた。本部では当時の八木弘学長・丹波康太郎教授（故人）と凌霜会幹部との連日の協議がつづけられ、大学側としては、神戸市および地元村民の教育施設への熱意に感謝しつつ、資金・整地等の諸準備をほとんど終えていた。時あたかも全国大学は激しい大学紛争の渦中であり、神戸大学またこれの例外ではなかった。産学協同に対する一部運動学生の激しい反対は、大学紛争争点の一環として苛烈な課題であった。そして時経つにつれて、この神戸大学新敷地の夢が到底表面に現われることを許す情勢ではないことが感ぜられ、大学・凌霜会は遂にこの敷地設計計画のすべてを白紙に戻さざるをえなかつたのである。

古林喜楽学長のひっ生の第二の仕事は、財団法人神戸大学六甲台後援会基金の募集のために、学長として凌霜会諸幹部と一体となつて粉身東奔西走されたこと。そしてこの募金事業は、三カ年限りの法定限度一杯を利用して、昭和三十年代半ばとしては巨額の三億円を募金をみごとに完遂されたことである。凌霜会個人には卒業期ごとにそれぞれ相応の分担金を割当てるとともに、殊に大企業については、役員中に凌霜会員のある同種・同規模企業には一律同額の拠出金を懇請するといういわば一列横隊方式によって、計画はかなり有効迅速に進捗したと伺っている。ところでこの財団の趣意書には、おおむね次の基本原則がうたわれている。すなわち、一、基金は六甲台三学部と経済経営研究所の研究活動を援助するために用いられる（寄付者による利用機関指定）。二、基金は原則として、元本は維持し利殖によって目的を遂行する（元本の保全）。三、使途は年一回、理事会・評議員会を通してその予算の設定と決算の報告を行う、などであるが、さて実際にこの基金が十数年にわたって活用された実績をみると、それはもっぱら右の四部署に属する全教官の海外留学費を軸として、研究発表のための印刷出版費あるいは国立大学なるが故に原則として現金を以ては支出されない諸物件費の支弁などの、全体として、文部省負担の経費を直接補填することに よって極めて有効に本来の研究目的を達成しようような使途に用いられたということができると思う。殊に全教官に対する海外研究費

(第一巡は一年間、第二巡は三カ月間)の財団による支出は文部省の一般海外研究費割当てとは全く別個の神戸大学六甲台全教官に就いての特典ともいうべきものであったから、これによって六甲台全教官が享受した海外学術および文化の吸収と思考培養は測りえぬほど大きかったと思う。財団の運営者が固く元本の削減をつつしみつ、物(建築)への投資はすべて文部省負担に任せしかも着々と神戸大学施設の整備を実現して行ったかたわら、人(海外研究)への投資は財団資金支出の中心をこれに置くことによつて、他大学には余りみられない直接の教育投資を実現したことは、まことに時宜の財団基金の設定であり合理的な資金運営であったといわねばならない。現にこの海外研究計画が、六甲台全教官についてその大半は第一・二巡を終了し、残るところはただここ数年以内に新着任した少数教官への支出だけであることは、喜ばしい。

わたくしはいまこの古林喜楽先生の尽された二つの先生ひっ生の事業——六甲台への学舎統合と財団法人六甲台後援会基金の募金の創設の重みを、十数年後の今日の時点において改めて思うものである。この二つの、キャンブと教育投資についての基礎づけが神戸大学の過去・現在・将来に与えた寄与は、一見空気や水の如く日々歩みには知覚にも上らぬ風のようなものであつても、われわれは古林喜楽先生のあのがむしゃらともみえる頑張りを永く忘れてはならないと思う。そしてわたくしひとりは今もなお、もしもあの昭和四三—五年における神戸大学紛争に先立って大学新敷地(三田

市近郊)の買収がこの財団資金を母体として実現されていたならば、われわれは大学新敷地の獲得と財団資金元本の極めて有効な活用を同時に果すことができたであろうし、今は亡き古林喜楽先生の播かれた大きい種はより一層実つていたろうと思う。整地して僅か坪二ないし三万円の丘陵地数万坪を、地元民が大学招致のためと悦んで売却を待つてくれたなどということは、今考えも夢のような事実であつた。

最後に一言だけ、古林先生の在りし日のおもかけをしのぶわたくしの思い出を記すことを許されたい。

先生の思想の中には、先生が旧制官立神戸高等商業学校を卒業して入学された京都大学経済学部における川上肇博士の経済学講義の精神が一貫して波打ち、このことが先生の経営学建設において、特にわが国において今日もお支配的である資本主義的企業経営の理論を離れて社会主義的企業経営の理論としての経営学を樹立しようとする献身される糸口となつたことは、先生の学問探究の生涯にとって奇縁であつたと、わたくしは思っている。また先生が大正十年の春、それこそ生涯の友であつた新庄博・野村寅三郎先生とともに旧制神戸高等商業学校予科二部(商業学校出身者に開かれた僅か八十名のコース)に入学され、このお三人の肉身も及ばぬ友情・真情は、古林先生がこの世を去りゆかれる日まで片時も揺ぐことがなかつた。わたくしは、三人の友人がかなえの三本足のようにな不可分に扶け合ひながら六十年近い歳月をあんなに親交された例を、ほかに知らな

い。古林先生が六年の間神戸大学長の座にあられたとき、新庄・野村両先生は全く他人のふりして孤独の古林先生をみつめていられたのは、わたくしにとって却而印象的だった。また、人から聞いた話だが、古林先生が家に帰られてカバンを開けてみると、野村先生の給料袋が入っていて、初めてカバンをとり違えてきたことを覚られたという話も、わたくしにとっては、古林先生の酔余の傑作というよりも、お二人の隔てない心の仕業と思えるのである。また先生が若くして逝かれし父君（牧師）を慕い、そして老いたる母君へのご孝心に、常にわが懐からお母さまのお写真を離されることがなかったことは、人のよく知る所であった。さらに雪しきり降る昭和五二年一月一三日、先生を送る御葬儀の式において、先生の高弟、海道進（神戸大）・浅野敵（和歌山大）両教授が、先生の益する人間愛と峻厳なる学究態度を異口同音に称えつつ、切々たる思いのうちに師とのとわの別れを告げられたこと、そして、最後にみんなで一編に先生の愛唱讃美歌（第四〇四番）を歌ったことは、わたくしの胸に永く消えることはないであろう。

「山路越えて　ひとり行けど

主の手にすがれる　身は安けし

……」

一九七七・四・二

古林先生の思い出

小山賢之助

昭和四年四月、母校神戸高商は商業大学となったのであるが、高商の方は新入生がなくなり、私は草野君と一緒に大学に進学したが心細い水泳部だと思っている時、山田常雄君が大学の方へ入って来た、もともと山田君は平泳の選手であったが、神戸には鍵本、熊野と私と三人居って平泳ではどうにもならなかったので、フリーをやってくれなどといっている時に和歌山高商水泳部から対校試合をやらんかという挑戦を受けた。この挑戦の原動力が古林先生であった。試合は市岡中学のプールで行われたが、神戸は平泳で完勝したが、最後の八百リレーで敗れて、五十六対五十九で逆転負けという結果になった。その後、勝った和高商では、和歌山に帰って祝勝会をやり、古林水泳部長は、月の光さやかな新和歌浦の松林を夜の二時頃迄放歌高吟勝利の美酒に酔いしれたとの情報が神戸私共にも伝えられた。当時の水泳界はロスアンゼルスオリムピックの直前で、勃興期にあり、インターカレッジの対校戦が盛んに行われた時代であったが、学生はとにかく、部長先生の教授が、放歌高吟とは一寸珍らしいこととで、和高商にはいい部長先生が居られるナーア、と感服し羨しがったものであった。

その後神戸の水泳部も少し強くなり、昭和五年、六年とも和歌山

に勝ったのであるが。

たしか、先生は昭和六年には母校に転任せられたが、間もなくドイツに留学せられ、先生とお会いし、飲んだのは戦後のことであった。凌泳会々長として実に愉快な会合を持ったことは、今でも忘れられない。昭和二十八年春私はロンドン駐在員となったが、その十二月、先生が神戸大学学長になられたことをロンドンで知り、偉い人はどこへ行っても偉いものだと感じし、また喜んだものである。

その後私は本店勤務となったが、先生が御上京になった時、或いは三商大が東京で行われる時には、先生を中心に東京凌泳会を開いたのであるが、喜楽（ヨシモト）興業の古林（コリン）亭喜楽（キラク）師匠と、深名されるだけあって、歌い踊り、芸達者なこと全く師匠の独演会で、無芸な私にとっては全く驚異的な存在であった。

昭和四十八年ミュンヘンオリンピックの時私は日本水連から国際審判員として参加したのであったが、先生はかつてミュンヘンの大学に留学されたし、当時先生が学長をしておられた広島商大には、田口選手が居り、金メダルの最優力候補であったから、先生は必ずミュンヘンに来られていると思つて、オリンピック水泳の前後手をつくして先生の宿舎を探したのであるが、とうとうわからなかつた。百米平泳の決勝で田口選手は美事金メダルを獲得し、セレモニーで、プールの周囲を一周したのであるが、その一角、跳び込み台の下にさしかかった時、スタンドの上の方から大きい日の丸の旗を持った老人がプールサイドの方に万才を叫びつつ下りてくるのである。

丁度その時私は役員席に居たのであるが、よくよく見ると、先生ではないか、田口も走り寄つて、観覧席の最下壇で手を伸ばす先生と堅い握手を交わしたのである。ナカナカ先生もやるではないかと思ひ、私もそこへ駆けつけたい衝動に馳られたのであるが、役員席のことであり軽率盲動は出来ないと思つて辛抱して居った次第である。

ミュンヘンから帰つて九月の或る日、私はオリンピックについて講演を頼まれ、霞ヶ関の三井ビルへ行くべく文部省の前を歩いていたら、文部省へ陳情に行かれる古林学長とバッタリ出会つたのである。会うなり開口一番「お前は関西一かも知らんが田口は世界一やで、何故、お前はミュンヘンへ来なかつたのか」と叱られた。

丁度講演の資料として、田口選手のゴールインしている写真のブルーサイドに私の上半身の写っている朝日新聞の夕刊を持っていたので、ミュンヘンへ行つて先生の宿舎を尋ねてみたが、見付からず失礼したとお詫びをして許しを得た、考へて見ると之が先生との出会いの最後であつた。

何とかもう一度お会いして道端ではなく酒でもくみかわしたいと念願したのであったが、之も今となっては不可能となつた事は返えすがえすも残念であつた。

私はこんなわけで、先生から学問を教へてもらったわけではないから、先生とはいふものの凌泳会の先輩後輩という間柄でおつき合ひをいただいたわけだから、先生の学問的な御業績は立派であることには間違いはないが、之に対しては私は不才、理解不足であるけ

れども水泳部の先輩としてこんな立派な先輩はないというのが私の実感である。私が水泳部に入部した時は、水泳部創立後五年位しか経っていなかったわけだから、先輩の数も少く、然かも、その中でも大半の方が若くしておなくなりになったので全く淋しい想いをしているのであるが、頼みの古林先輩が亡くなられて、寂しいという想いがヒシヒシと胸に突き上げてくる。かけがえのない先輩を失ったとでもいうべきであらうか、涙と共に先生の御冥福をお祈りする次第です。

水 泳 部 長

学 1 草 野 嘉 一

小生が水泳部に籍をおいたのは神戸高商の三年間（大正一五年四月から昭和四年三月迄）とそれに続く神戸商大の三年間（昭和四年四月から昭和七年三月迄）で計六年間と云ふことになる。

当初の頃の水泳部長は小川（忠）教授であったが大分お年を召してこられたので——と言っても現在の小生よりずっとお若かった筈であるが——小山君と相談して「もっと若くて元気のいい先生を部長に迎へよう」と言ふことになり北村五良教授を候補とした。問題は「何と言つて小川先生をお断りするかであったが、とにかくシドロモドロで理由にもならない様な理由をつけて申出た処、案外あっさり辞任を承諾して下さり——或は厄介払いが出来てよかつたと喜ば

れたのかも——北村先生に部長をお引受け願つた。当時東京商大水泳部の部長は太田哲三教授で三商大戦が東京で行はれる時は必ずプールに出てこられて優勝杯の授与などをされた。太田教授は当時既に会計学の親戚として会名が高かつたから、吾々はこれが有名な太田先生かと仰ぎ見たものであった。

小生は卒業後海外勤務と東京勤務が多く神戸とは疎遠となり、古林先生が何時から水泳部の部長になられたのか詳にしないが、小生がたまた顔を出す水泳部の会合には必ず古林先生が居られ本当に学生に融け込んで指導に當つておられ、水泳部もよい部長を持つて幸いであると思つた。更に宴席に及んでの即興詩は先生の特技で小生などいつも「あの十分の一でもまねが出来たら苦労はないのだが」と感心していた。学長をされたりして大変御多忙なときでも水泳部のことはいつも気にかけて下さつた様で本当に有難い先生であつたと思ふ。

（一九七七・六・二七）

人 生 は 意 気 で あ る

学 1 山 田 常 雄

先生から聞いた、幾つかの言葉の中で、どうしても忘れることが出来ない言葉が一つある。それはたしか先生が学長に就任されて間もなくの事だつた。京都の凌霄会で先生を御招待したことがあつた。先生は、当日或る国際的な会合が京都の都ホテルで催されそれに出

席されてゐたので、適当な時間に迎へに来てくれといふ事であった。ホテルから連絡があり、会は晩さん会に移ったといふ事だったので、自分がお迎へに行つた。会場では、既にデザートコースに入つて居り、先生は「今家内の踊りの被露があるので、それを済ませて行く」とのこと、私もテーブルについて見物させてもらった。踊りの題は何であつたか忘れたが、小柄な夫人が美しい衣装をつけて舞台一パイに踊られた。中々美事であつた。済んだ時外人達から一斉に盛んな拍子が湧き起つた。そのあとで、先生も余興に、何か歌はれた。

しかし夫人の時ほど拍子は無かつた。そんな事は先生は平氣であつた。ツカツカと私の所へ来て、「さあ、山田君行かう」と、夫人と共に、先生のあとについて会場を出た。そしてその降りのリフトの中で事であつた。先生は突然、「山田君、人生は意氣だね、意氣だよ」と言はれたのである。全く会話との何の脈絡もなく、独言のやうに言はれた。どういふ意味で言はれたのかそのときは判らなかつた。

あとで自分なりに、思ひ合せて見ると、丁度、右の時より一年程以前であろうか、先生の博士号のお祝ひに、友人と先生の御宅にお邪魔した事がある。当時先生が、和歌山大学の学長候補に上つてゐるといふ事は新聞にも出てゐたので、当然その事が話題になつた。しかし先生はあまり気乗りして居られない様子であつた。既にその時には神戸の学長への準備が進んでゐたからであらう。しかし神戸の事は一言も先生の口からはもれなかつた。その後、和歌山の方は

辞退されて、神戸一本に、しぼられたのだ。そのことについての感想をのべられたものと自分は思つてゐる。

先生は「人生意氣に感じる」といふ意氣の人であつた。一生この意氣を以て貫らぬかれたのであつた。

古林喜楽先生を偲んで

学3 宮 本 伯 夫

在学中は勿論のこと、卒業後も公私に亘り種々ご教導を賜つた先生を偲ぶ会が、先生のごよなく愛されたピールで、しかも先生にふさわしい型破りのパーティ形式で、五月二十九日学生会館で開催され、参加するもの五百人余、財界文化人スポーツ界と多彩な人々で、特に元氣のよい教え子の若いサラリーマンや現役の水泳部員を初め多くの部の学生連中も混つて極わめて盛大であつた。演壇には飲み干したジョッキを片手にされた懐かしい先生の黒枠の大きな写真が飾られて今にも「オイ宮本君」とやさしい声で呼び掛けて下さる様な氣がして、今更の様に追慕の情、禁じ得ませんでした。

今はなき先生の追悼の意味で先生と私とのことを思い出すままに二三書いてみましょう。

第一は先生の随筆「教授学長学生」の中で「神戸大学の丘をおりつつ」に書かれてある様に先生の経営労務論の講義に珍らしく出席した私と、矢張り水泳部の岡君とが最前列中央に頭張つて真面目に

ノートしていたが、何しろ講義に出るまで猛練習をしていたので、その疲れで遂に熟睡して仕舞い講義終了の拍手に驚いて目を覚したが後の祭であったこと。(このことは数年前の水泳に関する思い出で書いたので以下省略)

次に昭和二十八年の五月頃先生が上京された序に、当時建設の最中であつた川鉄千葉製鉄所を御案内申上げ、その夜千葉市内の料亭に一度設けた時、先生から目下神戸大学の工学部に電子工学講座を設けたいので、文部省に陳情の波状攻撃をしているが衆議院の文部委員会が承認して呉れそうにないので困っているんだと、つい漏らされたので私は即座に文部委員長の竹尾式先生(千葉県選出)には非常に懇意にして載っているのです、今すぐこれから私が依頼してみましよう、と言って千葉市から二十数キロ離れた成田の奥にお住いのお宅に電話をして、千葉に態々お越しを願ひ古林学長を紹介し、懇談、席上竹尾先生のご理解とご賛同を得ることが出来翌二十九年電子工学部が誕生することが出来たことです。

其の後ご上京の節は度々千葉市に御出でになりお前は母校の大功労者で銅像もんだよとか、大したもんだ何しろ衆院文部委員長を夜中に呼び付けるんだからなあ、と言ってオダテられたのは良いが、お好きなビールが適度に入ると得意の即興ノンキ節が次々と出る、踊り「松づくし」、いとも滑稽な黒田節の踊り其の他が次から次へと出るわ出るわ、千葉の芸者衆も抱腹絶倒して喜ぶので十二時を過ぎても何のその、当時私は千葉製鉄所建設副委員長として毎晩の様

に宴席を持たねばならなかったが生来下戸でその上歌も踊りも出来ない武骨もの、それでも酒席の雰囲気は好きでそのような私を見て「お前は世話のかかる奴じゃなあ、学校出てからも夜の社会学を教えなければならぬ、よく覚えておけ」とご丁寧なご指導を度々受けた。

この思い出にピッタリ合った御写真「何処かの舞台上で鉢巻をしめ扇をかざした先生の得意の踊りの勇姿」がパーティーの会場で展示即売されていたので早速購入して持ち帰り、部屋にかけて毎日眺めています。

又当時学校に先生をお尋ねした時、学長室で昼日中よく来て呉れたとばかりに、早速ビールの栓を抜いて歓待して下さって驚いたこと等つい最近のことのように思われます。

以上思い出すままを失礼とは存じますが書いてご霊前に捧げます。先生もさぞかし天国にてなつかしくうけて下さることと存じます。

合掌

古林先生と私

学5 野村 弘

先生との御附合は四四年となる。水泳に関しては三年間の大学生活を一貫して御世話になったが之は他の方々と全く同じであろう。卒業後は私は海外生活が永かった(一六年)のと東京に住居を定め

た関係で同期生の会合の時とか、先生が上京された時の集りの他はあまり御目に掛る機会が少く、今にして思へば甚だ残念です。思い

出に残るのは私がロンドン勤務時代一九六四年六月二五日に先生がロンドンに来られた時の事である。足掛け三日の短い御滞在につき如何にして先生をおもてなしするか考へた末二五日夜名前は忘れたがロンドン市内にある小さなレストランに御案内した。ここは従業員が全部ビクトリア朝時代のコスチュームを着、英国では珍らしく御客同志が合歌してビールの乾杯するドイツ風な所で先生は非常にその雰囲気が入られた様子で御得意のドイツの歌などもうたはれ他の客も唱和されべろんべろんになる迄騒ぎ之があつた。勤敵な英国人かと思ふ程に遂に看板になる迄頑張りました。

帰国後二、三回御目に掛る機会がありました但其の時は必ず他の人々に「この野村がロンドンで面白い所を案内してくれてとても愉快であつた」と思ひ出話をして下され私も面目をほどこしました。

最後に御目に掛つたのは昨年の四月三日の学5の四〇周年大会の恩師謝恩会の席で例により先生の名調子の歌を御聞したが之が最後になるとは夢にも思はなかつた。長く長く生きて頂きたい人であつた。

茲に謹んで先生の御冥福を祈ります。

古林先生の思い出

学8 大内 義仁

昭和十四年に六甲台を築立ってから長年、国内は勿論、国外でもあまたの人々にお世話になりましたが、古林先生御他界の報に接し、先生こそユニークな御存在であつたとしみじみ感じ入っている次第です。経営学の講義では良き師であり、プールのサイドでは親しみ易い兄貴河童であつた先生、学問を探究される身の学者でありながら、ワレワレ凡庸の徒と同じように、或いはそれ以上に、水に親しみ水泳を愛し、泳ぎ終ればビール片手に軽やかに歌をうたつておられたお姿を想起して、今更乍ら、グツとなつかしさがこみあげてくるのを感じております。謂はば、私共河童族の中では誠に秀れたインテリ河童であり、且つ、天馬空をゆく思いの酒脱居士であられた先生、今や天国で「河童亭」なるビヤホールを開かれて、あの世の河童族と楽しく語り合つておられるのではないのでしょうか。

久々の寄稿で私事に亘りますが、卒業以来国の内外あちこちの地に転動しましたので、凌泳のみなさんには久しく御無沙汰して相済みませんが、この五月より古林先生ゆかりの土地でもあり、且つ、私の生れ故郷でもある広島へ神戸より転居しました。水都ヒロシマは、うまい魚とお酒に恵まれた健康地であり、お立寄りの際に声をかけていただければ幸いです。諸兄の御壮健を祈ります。

彌次喜多旅行

学10 鈴 木 啓 介

一九七二年七月下旬私の家でビールを飲んでる間に意気投合して、田口君を応援に行く話が決った。そして八月二五日から十五日間、バリー、ミュンヘン、ビール（スイスの地名）フランクフルト、ポツダム、ロンドンと旅行した。八月三十日田口君が優勝して古林先生と感激的な握手をかわしたあの写真はテレビで放送された一コマを拡大したものである。

この旅行の目的を果したので建設中のルール大学の見学、スイスのビールへの列車旅行、ロンドンでの輸入されていない会社法の本さがし等を行って十五日間は夢のようにすぎ去った。この間、一つの部屋で寝起きして、朝起きるとまづビールでうがいをして一日中寝るまでビールに終始した。日まことに楽しかった。

学生のために自費でヨーロッパまで応援に来てくれる学長がいるなんて古林先生の他に聞いたことがない。まことに愛情豊かな先生である。

この時先生は七十才であったが健脚にまかせてよく歩かれた。先生の想い出の地を歩いてはピヤホールに立寄って、笑談しそしてまた歩いた。散歩しながらまたビールを飲みながら貴重な先生の体験談をお聞きすることが出来た。

私は愈々学生であったし、先生の講義を一度も聞いたことはなかった。それにもかかわらず水泳部のお蔭で先生に知っていただけで、このような楽しい旅をすることが出来た。また帰途の機上で「おい、もう一度彌次喜多旅行せえへんか」と云って下さった。しかしこれは実現出来ないまま、それからわづか四年半で急逝されてしまった。ここに謹んで先生の御霊と御家族に、主のなぐさめと祝福のあらんことを心からお祈りいたします。

学問と運動と酒の恩師

学11 平 井 洋

私の大学在学中の水泳部長は北村教授で、古林先生は副部長だったと記憶する。水泳に關しての先生の想い出は、残念ながら特にない。むしろ古林ゼミ（工業経営ゼミ）の第一回ゼミナリステンとしての想い出の方が鮮かである。

古林ゼミは先生のお人柄の故か希望者が殺到した。第一回ということもあって、たしか二十数名のゼミ入り希望者があった。ゼミの本旨から言って十名以内に絞るのが常識であり、先生は十名ぐらいのゼミにしたいと申されていた。私は希望者代表として、先生を慕ってゼミに入りたいと言うのだから、人数を制限するのはよくないと先生にねじ込んだ。先生は事情やむなしとして、希望者全員をゼミナリステンとし、かくして当時最大のゼミ軍団が出来上ったので

ある。

後日、先生はよくこのことを人に話され、「平井という男は全く強引な奴だ」と微笑して居られたのを想い出す。

卒論は「日本経済の国家資本主義化」と題して五十枚ほどの論文を先生に提出し、卒業パスをいただいた。結論は「戦時体制の強化、統制経済の国家主導的強化は、好むと好まざるにかかわらず日本を世界大戦に巻き込むであろう」というもので、夏休み明けに提出した論文のとおり、昭和十六年十二月八日に日本は不幸な第二次大戦に突入する破目となり、皮肉にも私はそれから四年半、北支、南方で戦列に参加する運命となったのである。

私の大学時代は、よく泳ぎもしたが、よく本も読んだ。訳があまりいただけない改造社版の「資本論」を、よくわからない処は口惜し泣きしながら読了したものである。

先生は京大時代、河上肇博士の門下生で、「資本論」を原書で読まれたというのがご自慢であった。

ゼミで先生と激論を斗わしたのが私の学生生活のひとつの華であったと回顧している。

工業経営ゼミを終えたにも拘らず、私は船会社に職を得た。学生時代私が学問としての価値を否定した経営学ではあったが、皮肉にも今は経営者のはしくれとして海運業にたづさわっている。しかし学生時代に勉強したマルクス主義体系の学問としての方法論は、いまなお私の思考方法の参考となっている。そして高校・大学での水

泳部生活で培った頭張りズムと、飢餓との戦に終始した南方での競争体験は、その後の私の人間形成への大きな支柱となっている。

私はいま、「人間なんていうのは、どこまで行ったらって同じだから」と言うホンダ・モーターの藤沢副社長のお父さんの遺言を思い出している。その通りで、人間にとって大事なことは、学問でも運動でも生活でも「努力の過程」であり、結果に余りこだわらぬことが肝要と考えている。

人生に於て、私は帝国陸海軍の学機を六回、東京高校、東京大学、と計八回の入試に失敗し、入社試験では興銀をどっぺった。しかし、姫高時代は何番で卒業したとか、成績はどうだったかは全然知らぬままに卒業したし、大学では優がいくつあったかは全く記憶にない。さいきん就職を頼まれた有名校の学生の成績表を見て驚いた。四十九単位中優三十五とある。優の数もさることながら、単位の多いのに一驚した。よくも学問をこんなに切り売りしているものだ。なんだかその学生が可哀そうになってきた。

私たちの時代にも、優の数を増やすことにうき身をやつす学生が居たことは居た。しかし一般には、もっと集中的に学問をしたし、ことにゼミナールは学生生活の生き甲斐の意味をもっていった。そして運動部生活を学問とちゃんと両立させて頑張ってきたものだ。さらに酒もちゃんちゃん呑んだものだ。先生ともビールをよく飲んだ記憶がある。

学問と運動と酒を通じて先生は言葉通りの私の恩師であったと懐

しく想い出している。

寒雷のぎくりと恩師の計のしらせ

洋城

古林喜楽先生の御逝去を悼む

学12 岡 本 忠 男

私と古林先生との思い出

一月十一日古林先生が急逝された。生前の人徳を偲びながら、じつと過去のことを思い出してみました。……なつかしい思い出が走馬燈の絵のように、くるくると頭の中を駆けめぐる……

私は学部十二回生（昭和十七年卒業）です。が、私が入学当時は、先生は助教授で経営労務論を専攻されて、学生に新しい労務管理を指導されていました。水泳部の副部長でしたが、水泳のシーズンになると、一緒に泳ぎながら部員を激励していました。

当時は静かなやさしい先生でした。美声の方は殆どお聞きする機会がありませんでした。

私が二年になった時、水泳部長にられました。三商大戦の時、部長の競泳をしようという事になったが、古林部長は見事優賞され、懇談会でビールを飲みながら、大いに、氣勢をあげられたことが忘れえぬ思い出として今もお頭の中に残っています。

卒業後海軍二年現役として、東京の築地の海軍経理学校に入校し、六ヶ月後海軍主計中尉となり、神戸海軍監督官付として同期で私だ

けが神戸に帰ってきました。一年後比島に転属の際に神戸で結婚したのですが、結婚式に御来席を賜わり、祝辞を述べられました。水泳のことばかりお話されていました。私は先生と水泳、凌泳会、水泳部との深いきずがあるとひしひしと感じました。

戦後再び水泳部をつうじて先生の御人徳に接する機会が得られるようになりました。私は住友本社に入社していたのですが、戦後北九州門司にて数万人の海外引揚本務に従事した為、終了期間が明確でなく、引揚事務を放棄すれば交替者がないので多くの方に迷惑をかけるので、ついに住友本社を退職して、この事務に専念しました。完了後神戸に帰ったのです。

思い出の一つとして、当時六甲台の時計が動かないので、大学当局に修理させるには、歌で聞かせることが、ききめがあるといつて、のんき節の替歌で楽しく歌って居られた先生の御顔が忘れられませんでした。

昭和二十八年に神戸大学学長になられるや多忙の中、時間をさかれてプールに顔を出されたり、月見の宴には出席されていました。

その頃部員が部歌を作ってほしいと希望があったので、先生に作詞をお願い申し上げました。快諾されたのですが、多忙な為なかなか出来上らないので、私が直接先生に御面会して催促したところ、「よろしい、今からエクランに行こう、そこで書く」と申されたので同行しました。ビールを注文されたので、「先生、ビールを飲んで、フラフラになって歌詞が出来ないのでありませんか」と申

しましたら、「いや飲みながら書くと、よい歌が作れる」と言って書きあげられたのが、今の水泳部の部歌でした。私はこの時、先生は大学の教授であるほかに、水泳——ビール——歌、この三つは切り離せないものをつくづく思いました。

幹事長時代、私は先生の水泳への情熱に心をうたれ、水泳部の御世話をさせていただいたのですが、三十九年幹事長になってくれるように要請がありましたので、微力ではありますが引き受けました。

そこで石井義章、岡田昌三幹事と相談して、凌泳会を充実させようということになり、東京の凌泳会の方々の後援をえて、会則と組織づくり、特に各地区に支部役員を選任して協力していただく事になりました。現在「凌泳」に役員紹介として、関東、名古屋、中国、四国、九州、関西支部役員が掲載されています。

夢のプール、私と古林凌泳会長との間で、いつでも話題になったのは、神戸大学に五十米プール、又は一年中泳げる二十五米室内プール建設の実現でした。当時、神戸大学は総合大学として学舎統合に頭を痛めていた時代でもありました。大阪府大、大阪市大をはじめ周辺の各大学は五十米のプールが建設されるとの事だが、神大のプールは老朽化している、是非共この夢を実現したいと語り合ったものだが、結果としては、この願望は達成しなかった。

(この頃は、先生と三の宮のビヤホール、バーにもよく同行しました。どこでも声高らかに歌い飲まれ、或る時は三の宮の元宝塚出身の経営するバーに行き「すみれの花咲く頃」を一緒に歌ったのも今

となつてはなつかしい思い出となりました。)

昭和四十一年三月、先生は停年退官されました。当時先生が御退官されると聞いた時は、もうそんな御年令になられたのかと、いささかびっくりしました。O、Bはいつも先生の御健壯な御姿を拝見しながら、楽しく語り合いさせて貰っていたので壮年古林先生といった感じをもっていただけからです。その後神戸大学名誉教授になられたが、凌泳会の方は会長としてより以上に力を入れていただいた。

そこで前述のプールの問題であるが、今すぐ夢のプールが実現しないなら現在のプールが老朽化し傾斜、水漏れ等全く使用に耐えられないプールをどうするかということになり、古林会長、山田幸雄水泳部長に改修工事の促進をお願いすることになりました。両先生の力で四十二年下半期に三百二十万円で改修着工することになりました。

浄水装置新設 水泳部としては当時コースラインさえ見えない、コイルコーヒーの如き水で泳ぐことは、不衛生極まりないので、この際、浄水装置の設置を当局に強く要望する事にしました。

先づ四十二年石井幹事と共に、神戸大学学生課に浄水装置の設置を強く要望したが当局では、国立大学では浄水装置の前例がなく、各大学でも要望しているが、文部省の方針がこの予算にたいしてはなかなか決まっている状況であるので現状では困難であるという回答でした。

それだからといって、このまま引き下るわけにもゆかず、部員の

為なんとかせねばならない。そこで私は（四十二年福岡県会議員と
なった）某衆議院議員の紹介で直接文部省と交渉することに決意し
て、東京に行きました。文部省としては、この予算は学校体育にも
関係があり、予算も少額であるので配慮するよう努力するとの事
でした。帰途再び学生課をおとすれ、この結果を報告したところ、少
しあわてた様子でしたが、文部省には、神戸大学施設には目下多額
の予算を要求して協力していただいているので浄水装置については
別途配慮しますが、凌泳会も負担して下さいとの事でした。一步前進
したが凌泳会負担問題が起き上ってきました。

浄水装置募金 石井幹事と相談し、古林会長にも事情を申し上げ、
募金趣意書を作成し九月に概算目標百拾万円の募金を開始致しま
した。

結果は凌泳会員百二十名 総額百十二万円、現役員八万円、計
百二十万円に達する事が出来ました。浄水装置建設費八十六万九千
円、大学育友会より十五万円の補助を受けたので、其の他雑費差引
三十三万円の残額が出ました。凌泳会の方々に改めて深く感謝申し
上げます。石井幹事も大変御苦労されました。

四十三年五月二十五日改修プール開き祝賀会と浄水装置寄贈式が
挙行されました。

このほか部員の為風呂場を造ってやるために努力したのも思い出
の一つです。幹事長時代、古林会長、山田水泳部長、石井幹事の協
力があつたとつくづく思っています。

私は幹事長として、古林会長のもとで、今後とも御手伝いさせて
いただき度いと思つていたのですが、三十九年八月父死亡の為、郷
里北九州市門司に帰り、そのまま四十二年には福岡県議会議員とな
ったので、遠距離の為御世話が出来ないので、浄水装置新設を契機
として幹事長辞任を申し出たのですが、今暫くそのままにして幹事
が協力して運営をするからと申され、そのまま数年間名前だけの幹
事長でした。これではいけないと思ひ強く辞任を申し入れ許可させ
ていただいた次第です。

五十一年六月、私の息子（神戸大学経営学部卒業）が結婚するの
で、古林先生に御来席賜わり度く御電話申し上げたところ、御病氣
で入院されているとの事でした。その後御元氣になられたと聞き安
心しておりました。

私が最後に先生にお会いしたのは新幹線、新神戸駅の出入口でし
た。先生はお気づきにならなかったのですが、私は乗車時間が無い
ので御顔を見ただけで、そのまま失礼したのですが、それが永遠の
お別れとなつてしまったのです。新神戸の駅に行く度に、何故あの
時に、一口でも言葉をかわさなかつたのかと、思い続けています。
「岡本君、一年中泳げるプールが神戸大学に実現しないのかなあ、
私の夢は何時実を結ぶのかなあ、日暮れて道遠しの思いである」と
言つておられた先生、水泳に対する永遠の愛着、思い出す度に胸を
しめつけられるようです。

奔放快楽に、文字通りにきらくに凌泳会に接せられ、水泳を愛さ

れた先生、戦前も戦後も日本水泳界発展に貢献され、又水泳部を温かく指導された先生、もうお会いすることは出来ません。

しかし先生が神戸大学に残された数々の功績は燦然として、輝き、伝えられるでしょう。又水泳部を限りなき愛情と情熱、伝統はいつまでも連綿として代々の部員に引きつがれて行くでしょう。先生いつまでも見守って下さい。心から哀悼の意を表し御冥福をお祈りします。

古林先生を偲んで

学22 石井 義章

一月十二日朝、いつもの様に朝食の車につき、何気なく開いた新聞に、古林先生御逝去の記事を見、思はず自分の目を疑いました。

つい三日前、恒例の凌泳会初泳ぎに出席し、幹事の萩原君と先生に新年の御挨拶に行こうと、かるもプールから奥須磨の日赤病院へ直行し、お目にかかって来たばかりですのに……。

その間の経緯については萩原君の追悼報告文に詳しいので割愛させて頂きますが、衰弱されているとは云へ、意識はハッキリしておられましたし、第一あの元気な先生が、俺は水泳で鍛えてあるから風邪一つひかないんだと常々自慢しておられた先生が、こんなに早くおなくなりになるなどは夢にも思っていませんでした。

その日お暇を告げ、病室を出ようとした吾々に、先生は毛布の中

から右手を出し、静かに、ゆっくり二、三度左右に振られました。

その瘦せ細ったお手が、あまりに痛ましく、先生、早く元気になるれて又御一緒に泳ぎましょう、プールサイドで新作の替え歌を聞かせて下さい、その後エクランで、更には三ノ宮迄足を伸してジョッキを傾けましょうと心につぶやき乍ら、ともすると沈みがちになる心に、そんな事はないのだ、きっと又元気になるのだと云いきかせ乍ら病院を出たのでした。そして結局、その日が先生との最後の御対面になってしまいました。

今にして思へば、あの静かに右手を打振られた時、先生はお声には出されなかつたけれど心の中で「バイバイ」と云っておられたのかも知れません。そしてその「バイバイ」は単に吾々二人にはなく、凌泳会全員に対して云はれたものかと思えます。それを直接承る事の出来た吾々二人は無上の光栄であり又、責任を感じる次第です。

さて、先生についての思い出、となると、あまりに沢山あり過ぎて何を書こうかと迷います。

先生の学者としての偉大さは、私如き凡人には所謂、盲が象をなせる様なもので到底その全容を推察する事は出来ませんので、身近に接する事の出来た水泳に関する事で思い出すままに書綴ってみました。と思います。

とにかく先生御自身水泳が本当にお好きであり、この点にかけては凌泳会員の中にも、先生の右に出る者はなかつたのではないかと

思います。御旅行に出られる折には常に鞆の底に水着を忍ばせ、行く先々で泳がれた事は衆知の事実ですが、神戸に居られる時でも、折を見付けてはオリエンタルホテルのプールとか、大学の上に出来た田崎真珠のプールとかで泳いで居られた様で、吾々の知らない様なプール迄、よく御存知でした。又、何時の頃からか、凌泳会で毎日第二土曜日を例会日と定め、かるもの温水プールに集まって泳ぐと云う事にしたのですが、近くに居る吾々が、つい忘れて行かなかつた時でも、先生は行っておられた様で、次にお出会ひした時、先月は俺一人だったと云はれ、申訳ないと思うと共に、先生は本当に泳ぐ事が好きなんだと、つくづく思ったものでした。

又、先生は水泳の普及にも常に関心を寄せられ、嘗て世界を制覇した日本の水泳が、今日の凋落を見たのは、川と海もドロドロになつてしまつて、気軽に水に親しめなくなつてしまつたのが原因だがこの水を元に戻す事は不可能に近い、今となつては、プールをドンドン作り、それも夏場だけの屋外プールではなく、昔日の栄光を取戻すには一年三百六十五日泳げるプールを作らねばと云うのが口癖で、県とか市の上層部にも機会ある毎に吹き込まれていた様です。それだけに先づ、かるものに市営の、又西代に県営の、更には新在家に神戸製鋼の、夫々温水プールが出来た時には吾が事の様に喜んでおられました。

そんな先生が広島商大に学長として在任中ミュンヘンオリンピックで田口選手が十六年振りに水泳で優勝し、先生が思わずプールの

イドに駆け寄り、大日章旗を打振られた事は吾々の記憶に新しい所ですが、誠に天の配剤の妙と感心するばかりです。

更に先生は母校神戸大学に温水プールを作る事を念願とされておりましたが、敷地の問題、資金の問題等、簡単に実現出来る事ではない。それにしても、現在のプールは昭和初期の建設だけに地盤は傾き、タイルは割れ、加えて、周囲の樹木の葉が落ちて腐り、コールドコーヒの様な水の色に加えて、得も云へぬ異臭さえ漂うのを見て、これでは学生の健康管理さえ憂慮されると、卒先して浄水装置建設資金の募金を呼びかけられました。わずかな年会費さえ仲々集まらぬ凌泳会員が、果して募金に応じてくれるだろうかと心配する吾々に対して、「月に一万円を積立てる事の出来る会員が十人は居る、これだけで年に百二十万は集まる、二百万や三百万の募金は問題ではない、俺は今月から一万円づつ積立てるぞ」と宣言され、事実予期以上の金が集まり、昭和四十三年五月、見事に浄水装置は完成しました。これも偏に先生の水泳に対する情熱と、後輩に対する愛情と、それに何とも云へぬあの先生のお人柄によるものと、今は懐しく思い出す次第です。

まだまだこの他、軽妙な賛歌の数々。御自慢の歌、ビールにまつわる楽しい思い出、その他、次から次へと走馬燈の様に思い出されますが、貴重な紙面を冗費するのも心苦しく、この辺で筆をおきます。

先生、本当に色々有難う御座いました。安らかにお休み下さい。

雑 感

新 3 田 淵 五 郎

御通夜、御葬儀には行けず、その週末下神の機会に御影のお宅に弔問。御子息の博氏にだけ御挨拶させて頂きました。

祭壇のお写真は昔のままの御表情で数多い供花に囲まれて、何か我々後輩にまだ言い残されたことがおあり気な……。

あとから萩原幹事の追悼文を読ませて頂き、石井先輩からも電話でお聞きして、御入院の間の艱難辛苦お忍びするに余りあり……。

もう少し早く何か御恩の何分の一かでもお報いすることができなかつたかと悔まれてなりません。

一昨秋だったと思いますが経営学会に先生御上京の折、お茶の水の山の上ホテルで計らずも小生の兄弟も共に会食の機を得たのがお目にかかった最後となりました。ホテルのロビーでも学界の名士の方々と気さくな御歓談ぶり、偉大な先輩を改めて誇りに感じた次第です。

我々3回生が入学した頃は「旧制」と併存し、俗称「タコ足大学」の頃で、六甲台ブルの返還以前には神戸高・松蔭・灘・川崎など下駄をスリ減らして借り歩いた時代です。姫路分校の緑色の水も名物なら、28年返還後の六甲台ブルもきれいとは言えませんでした。水に不自由して山水を引くために広いグラウンドを横切つて土管のた

めの穴掘り作業を現役全員でやったと記憶します。

こうした苦勞も先生の「今に予算取つたるからな」という勵ましがあつたからこそ続いたのでした。その頃の先生の御苦心と理想が実つて漸く名実共に堂々たる総合大学に育つた現状だと存じます。

昭和20年代末期のまだ物資不足ではあつたが心豊かであつた時代に、古林先生の温容と共に泳ぎ学べたあの頃の鮮烈な想い出は同年代の凌泳会員全員の胸に脈打つて居ります。

先生に象徴される凌泳魂——、我々も共有していた情熱——、先生から学び取つた人生觀は不滅です。

ビールづくし

新 8 上 村 久 治

古林先生のご逝去に当たり、ご葬儀にも、追悼ビールパーティにも出席できず、誠に申し訳なく思っております。

古林先生の追悼會がビールパーティ形式で催された如く、先生がビールをこよなく愛された事は、あまねく知られている通りであります。折に愛飲されたドイツのビールが特に好きだった様に思います。つきましては、私の在学中にしばしば伺ひした「先生のビール語録」と私が「最近耳にしたドイツビールの話」等を記してみたいと思ひます。

○ビールに関する古林語録

(その一) 「ドイツでは、ビールはお茶がわりに飲むものだ」

(その二) 「私は研究室の机の下にも、常にビールを置いてある。思索に疲れた折には、おもむろに一杯やれば、気分転換になり、いいアイディアが浮かんで来る。」

(その三) 「ドイツでは、ビールは生活そのものだ。町のビアホールでは老若男女を問わず、飲む程に酔う程に誰からともなく靴のままてテーブルの上に立ち、皆で肩を組み、足を踏み鳴らして、声高く唱うのだ」

○ドイツのビールについて

私は昨年八月に短日時ではありましたが、欧州数ヶ国を旅しましたが、その途上でハンブルグ、フランクフルト、マンハイム、ハイデルベルグ等を訪れ至る所でドイツビールを満喫しながら、「これが古林先生のお好きなドイツビールなのだ」と思ったものですが、その味は、日本のものより、かなり淡泊である様に感じました。

ドイツ滞在中に、ドイツビールについて次の様な話を聞きました。

「二三年前に、俳優の三船敏郎さんが、フランクフルト(？地名は記憶さだかならず)に『レストラン・ミフネ』を作ることになり、日本料理と日本のビールを看板商品とするつもりだった。

(日本のビールとして選ばれたAビールは、これにより『ビール

の本場、ドイツでも飲まれている。』として日本で宣伝するはずだったが……)」

しかし、ドイツの法律によるビールの定義はまことに厳密で、その製法・成分等が、法に定める一定の規格に合わぬものは、ビールとして認めないばかりか、それとまぎらわしい飲物は麻薬並みに厳しく輸入制限し、ドイツ製以外のビールの販売は、不可能に近い。許されるものは僅かにノルウェー産のもの位だ。

レストラン・ミフネの開店に合わせてドイツに陸揚されていた件のビールは、通関検査の折に禁輸入品であるとして、税関より積み戻し又は廃棄を命ぜられ、今更積みすわけにもゆかず、あえなく廃棄処分になってしまった。

その結果、レストラン・ミフネは目出たく開店したものの、当初予定とは異なり、今や、日本料理とドイツ製ビールを売っている。」由であった。

これは、自国製ビールを保護するドイツの国策だとは思いますが「等しくビールと云っても、色々あらあな」という事の表われ方が、あまりにも厳密で、これをドイツ的と云えば、これ程ドイツ的なものも少ないではないでしょうか。

その意味では、日本製Bビールの「ミュンヘン・○○○、ミルウォーキー」なるコマーシャルは、外国品崇拜思想の強い日本人にとっては、ビッタリの実に上手い表現だとは思いますが、ドイツ人に云わせれば「チョット違うのではありませんか」という

ところでしよう。

古林先生の追悼に当り、「ビールづくし」を記してみました。お暇な方は、本文中に「ビール」なる言葉が何回出て来るか勘定してみてください。

台風下での三商大戦

新10 萩原 武

先生が逝かれて、あわただしく時が過ぎ、既に夏である。夏、プール、水泳、凌泳会、すべて先生を欠いては考えられなかった。

神大プールと縁ができて以来の私の夏には寄ることなく先生が存在した。

それがこの夏はすべて、思い出の中でしか先生に御会いする事ができなくなってしまった。とても悲しく残念でならない。

もう十年も昔の事になるが、三商大戦が六甲台プールで開催された時、折り悪しく台風の本襲と重なった事があった。成り行きを心配しながら定刻に少し遅れてプールに駆けつけた私の目にしたものは、強風吹きすさぶ中三校の学生を前に激励の言葉を述べておられる先生の姿であった。

天候柄、OBの姿は見えず、神戸まで遠征して来て台風に遭遇した東京、大阪の両校選手、当番校としての面目と責任をなんとか果さねばと気を使う神戸の現役諸君、彼等にとってただひとり悪天候

の中を定刻前に駆けつけて下さった先生がどれ程心強く感じられた事だろうか、そして先生の激励の言葉をどんな気持ちで聞かれた事だろうか。

私自身その時覚えた限りない感動が、今もありありと心によみがえる。

限りなく学生を愛され、水泳をこよなく愛された先生の姿が今もそこにある。

先生とはプールを通じてしか接する機会がなかったが、御夫妻に仲人になっていただいて妻も小供達も、その御人柄に接することができ、私も家族の心の中にいつまでもそれぞれのおもかげで活きつづけて下さることだろう。私の心の中の先生は永遠に私と共にあり、常に私を導いて下さる事であろう。

ちりてのち おもかげにたつ

ぼたんかな 蕪村

古林先生追悼

新10 米田 啓裕

私が神戸大学に入学した時は古林先生は、神戸大学の学長をしておられました。新入生の私たちは、大学の先生やましてや学長の先生ははるか遠くの存在として見ていたのです。

一年生の頃は、姫路の学舎にいたのですが五月ごろ、大学祭か何

かで六甲台にやってきて、古林学長先生と親しく話すことの機会があったのでした。たぶん、水泳部ということの中でのことだったと思います。入学して始めて、大学の先生と親しく話せたり、まして学長の先生と話せたりして、自分も大学生になったのだなということや、何かもつたないような気さえしていたようです。その時が古林先生にお出会う最初であったように思います。

私は、学部の関係で、直接先生の学問に触れたり、講義を聞く機会はありませんでした。もっぱら、水泳部の活動、プール、コンバなどで、先生に触れさせていただきました。大学の先生のイメージとはちがって、人間味あふれ、大学に背をむけるような不そんな態度でいた私は、大学の先生を改めて見なおさずにはおれませんでした。

卒業して、私は兵庫県の北の方の小さな町の小さな小学校の教師となり、十年余りして凌泳会総会に出席したことがあります。神戸製鋼プールかで行なわれた総会であったと思います。古林先生も来ておられました。

あなたの地方の問題を、新聞で見たこともあり、心配していました。なにかと大変でしょうが、がんばってください。

とはげましていただきました。あの十年前と少しもお変りないような先生のご様子でしたが、これが最後の先生との出会いとなりました。

先生がいつもだいにされていた「泳ぐこと」を、私は将来の日

本を背負う子どもたちに、ほんのわずかずつではありますが、伝えていきたいと思っています。

古林先生追悼ピヤパーティ

学22 石井義章

凌泳会総会の開かれた五月二十九日午後一時より、古林先生追悼のピヤパーティが、六甲台学生会館に於て開催されました。

この企画は、生前ピールをこよなく愛された古林先生が、六甲台キャンパスで大ピヤパーティをやるうではないかと云っておられたのを、果されぬまま永眠された為、先生の御遺志を継いで、先生のゼミの会「喜楽会」が中心となり、先生にゆかりのあった、水泳部或は応援団に呼びかけ、先生の追悼会として、しめっぱい思出話より、ピールで乾杯、愉快にやろうとこの日の開催に漕ぎつけたものです。凌泳会からは井上与志男君（新18）が実行委員として、数度の打合せに出席してくれました。

午前中の総会を終えた凌泳会員、OB・現役総数約五十名、定刻一時に入場。会場には正面段上にベレー帽をかぶりジョッキを片手に、にこやかに微笑まれる先生の大写真を飾り、周囲には寿司、おでん、そば、串かつ等の屋台が取囲み、更にピールは大きなジョッキで飲み放題、何でも、このピールは、先生の生前の御愛顧に報いて、サントリートアサヒピールが、無料提供とか、吾が井上史朗君

(新18)もサントリーの担当員としてキリキリ舞いの大忙し。

先づ、先生の京大時代の友人、砂野仁・川崎重工相談役のお話を皮切りに、各界の方々より次々と思出話、先生の交友の広さを偲ばせるものがありました。中でも、ミュンヘンの金メダリスト田口選手の「先生の泳ぎは、水泳技術としては60点、何とか合格点と云った所だが、その水泳を愛される心、又泳ぎを楽しまれる姿には、非常に教えられるものがあった。今後自分も先生の心境に迄、水泳を昇華させたい」との話が印象的でした。

続いて第二部演芸の部に入り、最初は応援団吹奏楽部のプラスバンド演奏、可愛いお嬢さんのバントワラーのリードで、力強いマーチ数曲の後、古林先生作詞になる応援団歌の披露、続いて、団員によるエールの絶叫、神大にもこんな応援団があったのかと驚いた次第、しかし、服装は普通の学生服で、例の引ずる様なガクランとかを着てなかった事で一種の安堵感を覚える。

次は、先生の奥さんの日本舞踊、さすが名取の名手、自分で振り付けられた「黒田節」と「岸壁の母」の二曲を見事に舞われ、とてもお年とは思はれないお元氣な姿に吾々も一安心致しました。

続いて、喜楽会の合唱の後、いよいよ吾が水泳部の出番。かねてこの事あるを聞いていたので、何をやろうかと色々考へたが、古いOBから現役迄一緒にやれるものとなると思いつかない。前日になつて萩原君が、先生に作ってもらった水泳部歌があるからあれをやろうと云って来た。毎号「凌泳」に掲載されているのは知っている

が、一度も歌った事がない。しかし簡単そうなので、今夜にでも覚えて、総会とパーティーの間に練習すれば何とかなるだろうと引受けたが、改めて楽譜を見ると何ともメチャクチャな譜。何年間も転載している内に、印刷屋のミスで、あちらが抜けこちらが変り、してしまつたらしい。その夜娘や息子総動員して、原作者の意図を損わぬ様、想像力を駆使して復元、何とか歌へる様に準備したが、午前の総会が長引いて、練習出来ず、残念乍ら、本邦初演の折角のチャンス逃してしまつた。尚、楽譜は本年度凌泳に歌へるものを載せますから、是非一度歌ってみて下さい。

さて、そうこうしている内にも出番は刻々近付いて来る、思案投げ首の所、岡村君(新?)がいつも先生が乾盃の時、歌っておられた「Bin Prostin」でいこうと提案、それそれと衆議一決、「次は水泳部凌泳会」のアナウンスで、吾々OB、現役総勢約五十名、手に手にジョッキを持って舞台上に上る。本日の各グループの中では最大勢力。先づ、小山会長より挨拶とミュンヘンの思出等のお話あり、続いて、発案者の岡村君の音頭でBin Prostin Bin Prostin...と大合唱、最後に全員でジョッキを乾盃、パーティーの雰囲気は最高調に達し、今にも先生が「俺にもやらせろ」と出て来られる様な感じ、しかし、その先生は段上の写真の中で、静かにジョッキを翳しておられるのみ。先生が居られれば、この会ももっと盛り上り、愉快に、楽しく、何時果てるともなく続く物をと、今、幽明境を異にした現実を一入淋しく感じた次第です。

この度、全員による「商神」の大合唱で、幕を閉じ、暮れなずむ六甲を背に、三々五々、山を下りました。

凌雪クラブ報告文

新11 平 岡 昭 朗

今年もまた、二月二十六日(土)より、神鍋の名色、糸乗殿氏方に集合しました。前日の二十五日夜から、姫路の山口氏(新5)、萩原氏(新10)が入り、例年にならない積雪たっぷりの名色グレンデで一時間でも多く滑ろうと張り切っておられました。何分、お二人は御仕事の方がお忙しく、今シーズンは幾日も滑っておられないそうです。小生は二十六日の昼頃に入り、午後は山口氏、萩原氏と一緒に滑りました。両氏は朝から頑張っておられ、リフト券は一日券を買われ、もうすでに二十回近くリフトに乗られたそうです。澄みきった青空に、たっぷりの積雪、雪質は温暖の為そう上等ではありませんが、グレンデは人が少なく広々としており申し分ありません。堪能するほど滑れます。三時頃、山口氏が「もう疲れた。先に宿屋へ帰るわ。」と言われ、第三グレンデを下りられました。萩原氏と私は五時頃まで滑り、第三グレンデ、第二グレンデを下り第一グレンデに来てみますと、宿屋に帰っている筈の山口氏が額に汗をぶるぶるかいて居られるではありませんか。「はて？」と思ひ横を見ま

すと名譽会員関口先生が居られました。「おい/途中でつかまってしばらくされてるんや。」と山口さん。関口先生の指導はきびしく、基本をみっちりこまれます。リフトにあまり乗られず、一カ所で下っては上り、上がっては下りの連続です。山口氏も相当お疲れのことでしよう。関口先生は六十何才の年輩の方です。姫路地区の高校の体育教師を停年で辞められ今は私神港にお勤めされております。この名色に民宿を始めるよう奨められた方で、スキー歴は古く、私達がこの凌雪クラブを発足する前から私達の御指導を願っております。

夜になりました、石井氏(学22)、米田氏(新10)、現役の平石君、後藤君が次々と到着され、例会が始まりました。昨年同様、山口氏持参のタレでカニスキです。カニのおかわりおかわりでザル四・五はいは食べました。美味たるものこの上なしです。そして現役諸君が加わってくれたことも非常にうれしく思います。会の席で萩原氏から「古林先生の御逝去を悼む」という原稿が出来ましたと報告がなされて、一同拝読致しました。石井氏がその労苦をいたわれましてから、萩原氏とともに、古林先生の最後の御病床のことを色々と詳しくお話されました。一同は夜遅くまで古林先生の思い出を語り合い、しみじみと先生を偲びました。今はただ、先生の御冥福を心からお祈りするばかりであります。

翌日は朝早く山口氏、米田氏が帰られ、昼には萩原氏が所用で帰られました。石井氏、小生は関口先生に一日つきっきりで指導を受

け、又一段と上達したと満足しました。現役の二人は若さに物をい
わせ、第三グレンデの急斜面をぼんぼん飛ばしていました。足前も
相当なものです。五時に下山し、帰りは石井氏の車です。石井氏の
車には無線が積まれてあり、「CQ、CQ、こちらは只今、神鍋を
後にして神戸へ帰るところです。今、車は江原附近にさしかかり和
田山へ向かっているところですが、八鹿附近の交通の混み具合はど
うでしょうか？」と無線で連絡をとり、ウラ道をスイスイと走り、
思ったより早く帰ることが出来ました。

今回は現役二名の新たな参加があり、また古林先生を偲ぶことが
出来まして有意義な例会となりました。来年も二月末の土曜、日曜
日になると思いますので、御都合をつけていただき御参加下さいま
すようお願い致します。

会員からの御便り

と悔やまれてなりません。盛会を祈ります。

○作田 耕三 (高22)

体調が思はしくないので、このごろは、どの会にも遠慮させてもらっています。皆様に宜しく。

○溝口 卓郎 (高18)

最早老令で動きも鈍くなって参りました。諸君の御活躍を祈る。

○北条 貞夫 (高25)

退社しましたので向後の御便りは上記(名簿参照)自宅へお願いします。

○木村 芳雄 (高20)

水泳部の先輩で大正12年卒の榊原零一、山村馨、14年の古林先生、鈴木不覆雄、15年同期の高田寿三、三輪喜一郎の諸兄が既に不帰の客となり、全く淋しいことです。私はまだ元気に仕事をしていますが、いっお呼びがあるかとハラハラして暮らしています。昭和5年から続けているゴルフの精で何とか大病もせずに過ごせているのだと喜んでいます。

○小山賢之助 (学1)

29日(5月)早朝東京を発って新幹線で午後の古林先生の会に出ます。総会には遅れますが、一寸でも顔を出すつもりです。

○三井栄三郎 (高19)

此の頃はすっかり岡に上ったカッパになってしまつて毎日、年忘れの為のランニングをやって居ります。御蔭で今のところ頑健です。独特の健康法として、毎朝起きがけに七一八合の生水を飲んでいきます。ガンを防ぐと云はれて実行しています。古林君の病気の事を知っていたら、是非一度すすめてみたかった

○草野 嘉一 (学1)

会社或に書類を送って頂きましたが、小生最近会社へは時々しか顔を出しませんので、入手が遅れ御返事も大変おそくなつてしまいました。今後は上記(名簿参照)の自宅宛に送って頂きたいと思ひます。何卒宜しく。

○宮本 伯夫 (学3)

川鉄コンテイナーKKの社長をしてゐるので(伊丹市所在)

臨時会社の寮（所在地・TELは名簿参照）に一ヶ月の内半分は居ります。凌泳会総会及び古林先生追悼会に出席致します。又、追悼文を是非書きたいので宜しくお願い致します。特に小生古林先生には関係深いので少し締切りにおくれるかも知れませんが是非お願い致します。

○野村 弘（学5）

昨年から毎日が日曜の生活をして居ます。元気に好きなゴルフを楽しんで居ります。29日はアメリカに居る長男が帰ってくるので出席できず残念です。皆様に宜敷く御伝へ下さい。

○高橋 徹（学7）

拜啓、初夏の候ともなり大分水にもお慣れになった事と思えます。小生は二年前から腎臓を悪くして四回も入院をしすっかりコンディションを悪くしてしまいました。本年の正月にも第四回目の入院をし、三月末退院をしましたが、まだ会社に出る事を禁じられ自宅で療養をしております。そのような次第で古林学長のご逝去も入院中の為、何も出来ず失礼致しました。ご逝去のご様子を書かれた記事をお送りいただきましてありがとうございます。厚くお礼申し上げます。本シーズンのご活躍をせつにお祈り申し上げます。敬具

○太田 正元（学7）

昨年六月、三井金属鉱業を退任致し、関係会社の三洋金属（株）及び三興金属工業、両社の社長をして居ります。第二の人生ですが、中小企業の御多分に洩れず多忙を極めて居ります。七凌会の伊藤君とは月一回会合を持っています。

○大内 義仁（学8）

総会の御案内並びに行事御連絡いただき有難う。用件に追われて御無沙汰ばかりしていますが悪しからず、御諒承の程願います。都合により上記（名簿参照）に転居しましたので、29日の総会には出席出来ませんが小生の生まれ故郷であるここヒロシマの地で、私も好きなビールで古林先生を偲びたいと思えます。御出席の諸兄によりしくお伝え下さい。以上御連絡まで。

○尾原 芳行（学8）

三月をもって定年退職しました。今後は家内の扶養家族としてのんびりしたいと存じます。

○山川 初雄（学8）

日本電装（株）を退社後はすっかり水泳とは縁が切れ、もっぱらテニスを楽しんでいる。土・日曜日は天気限りコートに出るお蔭で元気に毎日を過ごすことが出来る近況です。

○中村 市治 (学9)

五月二十九日のパーティは全国の凌泳会員がつどる絶好のチャンスです。是非御世話下さい。

○山口 宗樹 (学10)

元気で大日本塗料に勤務して居ります。皆様にお会い出来ず残念に思います。宜しくお伝え下さい。凌泳会の発展と水泳部の活躍を祈ります。幹事の皆様、御世話様です。

○前田 寿 (学11)

甚だ残念ながら、毎月下旬は東京にて仕事をしており出席できる見込みがございません。御参加の皆様によりしくお伝え下さい。

○上田 信三 (学12)

会社の方下記(名簿参照)に移転しました。

○上田 宇一 (学13)

五月二十九日は出席させて載きたいのですが、どうしても行けない用事がありますので、悪しからず。会費は別便にて郵送いたします。シーズンインの折柄皆さん頑張ってください。

○萩野 茂希 (学13)

在学生諸兄の御健斗を祈ります。凌泳会会員の皆様によりしく。

○井川 俊夫 (学15)

今はなき古林喜楽先生の冥福を祈る。部員の皆様今年も多めに頑張りの戦果を挙げられんことを期待する。

○山内 利男 (学15)

最近インドよりも日本に居る方が多くなりました。

○三宅 林 (学16)

石井様、色々御世話になっています。雑事に追われおつき合いも出来ず申し訳なく思っています。東京へ単身赴任してよ約三年になり東京―神戸をシャトルしています。御出席の皆さんに呉々もよろしく。

○山越 重義 (学17)

御承知の如く、繊維業界は大変悪い状況で、その総師をやっている小生は、現在右往左往しています。残念ながら今回も欠席します。皆様によりしく。

○岡 床一郎 (学17)

永らく住所も連絡せず失礼致しました。小生昨年七月末、三井銀行を特別退職し現在下記(名簿参照)の会社に勤務しておりますので今後共よろしく願います。

○大西 繁 (学20)

幹事には何時も御苦勞様です。近くに居りながら、古林先生の追悼会にも出席せず、心苦しく思っています。せめて会場の足しにもと思ひ送金させていただきます。小生もそろそろ健康に留意すべき年かとも思ひ機会を見つけて泳ぎにも行きたいと思ひますので、その節は宜しく。草々

○鈴木 富夫 (学20)

古林先生のビールPARTYに出る予定して居ります。何かの都合で出席出来なくならない限り凌泳の方にも出席します。

○石井 義章 (学22)

ゴルフ練習場に商売替して早や11年。一時のブームはどこへやら。サッパリ暇になってしまいました。相変わらず細々やっております。今年古林先生の御逝去と悲しい年になりましたが、先生の御遺志を体し、水泳部並に凌泳会発展の為、一層の御協力をお願い致します。

○山本 幸雄 (学22)

昨年暮に、神戸市東灘区(以下は名簿参照)に転居しました。勤務先は変わらず富士ゼロックス(株)大阪支社です。相変わらず貧乏ひまなしでウロウロしております。久しぶりの凌泳会出席をたのしみにしております。

○今井 政一 (専1)

建設機械運営工事係に替りました。御連絡致します。皆様に宜敷く。

○関山 道雄 (新1)

元気ですが水にかかるのは年に一・二度程度で、それも本当に「つかる」だけになりました。

○小原 祥男 (新2)

兼松江商東京本社勤務となり、東京チョンガーですが、連絡先は上記住所(名簿参照)へお願いします。

○堂本 直正 (新3)

四月には四国在の先輩を歴訪いたしました。(学9)中村市治氏(愛媛県今治市在)、(学14)湯山正三氏(香川県高松市在)、不況にもまげずささやかな企業なさやかな出先機関に

てなんとかがんばっております。毎々勝手をしておりますが、
会の今年の隆昌と、部の健闘を祈ります。

○橋本 力 (新3)

四月一日付をもちまして県立御影高校へ転動いたしました。
五年ぶりで、また水泳部の面倒を見て全国高校へ生徒を送りた
いと思っております。

○松田 司朗 (新5)

先日、四月カナダダロッキー山中のバンクーにて水泳をしまし
た。プールの窓に雪を頂いた四〇〇〇m級の山がそそり立つ景
色に見とれていました。よろしく。

○石本 茂樹 (新6)

住所、上記(名簿参照)の通り変わりました。

○岡村 司 (新7)

広島より三月二八日転勤で西宮に参りました。又、よろしく
お願いします。

○小郷 謙 (新8)

五二年七月以後、大協石油(本出向中)を退社しますので、

今後は住所宛に送付願います。昨年九月、改姓致しました宜し
く。(旧姓太田)

○上村 久治 (新8)

近年は泳ぐ機会も少なくなりました。昨年は海水浴二日と一
ツ橋での三商戦の折に少々泳いだけでした。三商大戦の折には
小山・山口両大先輩にお目にかかれうれしく思いました。

○野田 浩志 (新9)

川崎重工業よりカリフォルニア勤務になって居ります。住所
下記の通り。(名簿参照)：代筆。

○柳本 正雄 (新10)

日頃は御無沙汰致しておりますが皆様御活躍の御様子何より
でございます。今後共、御指導御鞭撻の程よろしくお願い申し
上げます。初夏の候益々ご清栄の所大変に存じ上げます。いつ
もお世話頂きますして誠に有りがとうございます。現役部員の皆
様の御活躍をお祈り致します。

○萩原 武 (新10)

昨年来、後藤君、平石君等の現役諸君にはいろいろ御苦労を
おかけし、申し訳なく思っています。凌泳発行まで今一苦勞で

すが、どうかよろしくお願い申し上げます。

○米田 啓介 (新10)

都合をつけることができず申し訳ありません。六甲台プールにもひさしぶりに寄せてもらいたいと思っております。日々元気でがんばっております。

○平岡 昭明 (新11)

謹啓 陽春の好季節となり皆様には益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。さて私こと、このたび県立相生高等学校勤務を命ぜられ過日着任いたしました。かえりみますれば昭和四十年四月県立相生産業工等学校勤務を命ぜられ以来、十二年にわたり公私共に格別のご指導ご厚情を賜わり今日ありましたことは、これ一重に皆様のご厚志あってこそと心から厚くお礼を申し上げます。

なにぶんにも浅学非才のものでございますが、懸命にはげみたいと存じますので旧に倍してご指導ご鞭撻をいただきますようひとえにお願い申し上げます。

末筆ながら皆様のご多幸をお祈りいたし、お礼旁々ご挨拶申し上げます。

古林先生の追悼ビアパーティ出席予定でしたが急用ができませんでした。又愛泳会総会も欠席致し申し訳ありません。

○藤岡 治男 (新11)

長らく失礼ばかりしておりますので、本年は是非出席させていたいただきたいと思えます。

○林 荘八郎 (新11)

荘八郎は現在ブラジルにおりますので、留守中の連絡は上記(名簿参照)の住所にお願いいたします。なお別便にて会費をお送りいたします。：代筆

○鈴木 正弥 (新12)

陽春の候、皆様お元気にお過ごしのことと存じお慶び申し上げます。さて、このたび調布市在の社宅を出て、下記(名簿参照)のところに移転しました。緑の多い田舎ですが、お近くにおいでの際は是非お立寄り下さい。敬具

多忙な毎日です。運動不足で危険信号が灯りそうなので、夏にはでき得る限り泳ごうと思っています。愛泳会事務局の御骨折りがとうございます。今シーズンの水泳部の御活躍お祈り申し上げます。

○滝沢 章三 (新12)

古林先生の三千人ビアパーティの案内状をも頂きましたが、何分遠隔地在在のため申し訳ありませんが欠席させていただきます。

○丸山 豊也 (新13)

古林先生の90日忌のビアパーティには出席致しますが総会は十時からのので一寸無理です。

○手嶋 忠之 (新14)

近くに温水プールが出来ましたので、毎日曜日には泳ぎに行っております。凌泳会総会には出席できませんが月見の宴には今年こそ出席させて頂こうと思っております。皆様の御活躍をお祈り致しております。

○木下 雅浩 (新14)

仕事多忙。子供3.2.1.才年子3人。丸紅水泳部元主将も今や仲々泳ぐ機会なく。本年は現役復帰を目指したい。

○阿部 洋三 (新15)

会社の職員組合の執行委員として二年間過ごしました。技術屋よりも適性があるのではないだろうかとも思っています。水泳の方は、小山先輩も入っておられるYMCAでやっています。昨年は百メートルバタで一分九秒八と時計が間違っていないければ自己最高を出しました。現在でも一発泳げばなんとか一分十二秒そこそこは出そうな感じですよ。

○鈴木 俊彦 (新17)

水らく御無沙汰致しております。現役部員の顔も全く知りませんので、一度行ってみようと思っております。五月二十九日、楽しみにしております。

総会に出席できなくて申し訳ありませんでした。一度練習を見せてもらいに行きたく思っております。

○木村多加緒 (新18)

勤務先社名が、三洋電機住宅設備部に変更しています。名簿変更お願いします。当社土曜日が休みなので、できればプールまで行きたいのですが、土曜日練習しているかどうか確認できる方の電話番号を教えてください。

○大橋 進 (新19)

養護学級(精薄児)を担当しております。昨年は入級児全員プールに入れ、水遊びを好きにさせました。また、二人の児童をつれて、臨海にも行きました。今年はなんとか一人でも泳げるようにしたいと思います。

○佐敷 定雄 (新22)

友人結婚式の為、二十八日東京に行ってくるので、出席できないと思う。先輩諸兄によりしく。今年こそ頑張ってください。

○長谷川 健 (新22)

拝啓 初夏の候ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。さて私儀 この度城東支店勤務を命ぜられ、この程無事着任いたしました。東大阪支店在動中は公私ともに格別のご厚情を賜わり誠にありがたく厚くお礼申し上げます。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。先ずは略儀ながら書中をもってお礼かたがたご挨拶申し上げます。敬具

○家本 博一 (新22)

二十九日は東京出張の予定ですので、失礼いたします。

○正井 康子 (新22)

勝手ながら、または失礼させていただきます。現在失業中であり、つましく暮らしております。男子も女子もよく練習して、次々と神大記録を更新して下さい。

○北川 敏行 (新24)

明治生命の寮で毎日曜ぶらぶらしている。会社では水泳部で一応幹事を務めている。人数が少なく活動は月に二回位の割合で練習をしている。温水プールを使用しているので六甲台のあの冷たさがなつかしく思い出される。今年の神戸大学水泳部の活躍を期待する。

○山口 叔子 (新24)

拝啓 永らく御無沙汰致して居りますが、皆様にはお変わりなくお過ごしで御座居ましようか。私方お蔭様で家族皆んな至極元気で暮して居ります。他事乍御休心下さいませ。尚私宅此の度左記(名簿参照)住所へ移転致しましたので取敢ずお知らせ申し上げます。附近へ御越しの節は是非一度御立寄り下さいます様御待ち致して居ります。今後共宜しくお願い致します。

皆様お元気ででしょうか？いよいよシーズン入りですね。御活躍をお祈りしています。又、応援にうかがいます。この度、勤務先も変わりましたので、加えてお知らせ致します。(名簿参照)

○丸末 一之 (新25)

毎日死ぬ思いで銀行へ行っています。気疲れが多くて、本当にしんどい毎日です。少々運動不足で、体調がおもわしくない上に、あいかわらず酒・マージャンはやっているのです、かなり生活がみだれています。それだけに思いっきり泳いでストレスを発散したい欲求にかられています。

○佐藤 弘之 (新25)

現在合宿に参加しておりますが、実験等のため、練習はあまりできません。みんなよくがんばっているようです。

○小林 正文 (新25)

現役諸君お元気ですか。湘南での工場実習に入ってまだ一
程にしかありませんが、毎日残業・麻雀、その他でしごかれて
います。工場実習は五月二十六日まで、五月三十日から六月末
まで本社(大阪)で再研修の後、正式配属となります。五月二
十七日にそちらへ移動するので、凌泳総会には出席できると思
います。つゝの話はまたその時にでも楽しみにして置いて下さい。

○中西 康之 (新25)

只今、寮より出勤しておりますので、住所を記します。(名
簿参照)

○浜西美智子 (新25)

週に二十時間働いて、給料は人並みにもらっています。自由
な時間が多いのは良いのですが、若干暇を持て余しています。

現役部員寄稿

我が愛する水泳部への提言

主将 平 石 康

「スポーツは、参加することに意義がある。」などと、バカげたことを言った人がいるが、俺は、あくまで、スポーツは勝つことに意義があると信じている。勝つということは、勿論、他者に対してであるが、己に対してでもある。

最近、特に大学において、スポーツの同好会が乱立し、楽しむためのスポーツなどと、ホザいているが、決してスポーツは娯楽なんかではない。スポーツによって体験される価値は、遊びのように虚構のものではない。あの勝利の栄光の瞬間は、永遠なのである。ゆえに、勝利の栄光に達するまで、厳しいトレーニングが前提であるし、競技の場面でのストレスは、必要不可欠のものだ。

大学のクラブに、スポーツを楽しむためにやって来た者は、それは場違いというものである。そんなヤツらは、そこらの、できてはまたすぐ消えるアブクのような同好会で、戯れておればよいのだ。人間関係が優先なんて言うやつもいるが、それは、厳しいトレーニングや、また緊迫したゲームの中から、自然と芽ばえてくるもので

あって、当初から、ワキアイアイとしたムードに憧れるのも、誤りであると考える。

故に、ここでのリーダーシップとは、半独裁的なものであるべきで、スポーツ集団に、あまりに民主的・教育的な概念を入れようとするのは、無益であって、部員が自発的に、権威に服従してこそ、そのスポーツ集団は強いものになる。コーチやキャプテンたるものは、部員とある程度の心理的距離を保ち、部員から尊敬され、信頼されるべきであるが、好かれ、支持されようという欲求を、持たない者であると思っている。

ところで、話は変わって、自分自身について述べるが、もう7年も水泳を、やっている、自然と自分だけで記録の限界をこしらえてしまっていることを、痛感する。ここで、思い浮かぶのは、市川亀久弥氏の「あらゆる時代を通じて、人間が人間として生まれてきたことの存在理由というものは、単にスポーツ問題だけに限らず、彼らがそれぞれ生きていく時点で、どれだけの記録更新をなしたか、あるいは、どれだけ創造的な労働をなしたかによって、究極的には決められるものである。」という言葉である。つまり、100mを49秒で泳ごうが、2分で泳ごうが、現在の発達した交通機関の世界では、なんの価値にもならない。むしろ、いかに長時間、持続して泳ぎ続けられるかという方が、実利的価値がある。しかし、この世のスイマーたちは、この50秒の壁を、越えるか越えないかに対して、渾身の努力を注ぎ込んでいる。すなわち、ここで問題になるの

は、スポーツマンの真の栄光とは、実現した記録の絶対値にあるのではなく、その記録をその時点において創造した人間、意思力と、古い記録を新しい記録に更新した創造的行動の中にあるといえる。もしそうでないとしたら、10年前の記録を樹立したチャンピオンたちは、今日何ほどの意味をなさない、履き捨てられた古いぞうりのような存在になってしまうからだ、彼は書いています。

故に、俺たちは、なぜ泳ぐのかというと、あの自己のベストを更新した時の感激の一瞬を求めて、泳ぐのだといっても過言ではない。我が愛する水泳部員たちよ、自己の無限の可能性を信じて、チャレンジしようではないか。

ガンバレ、神大水泳部!!

水泳コーチ・クリニク・レポート

四年 酒井正人

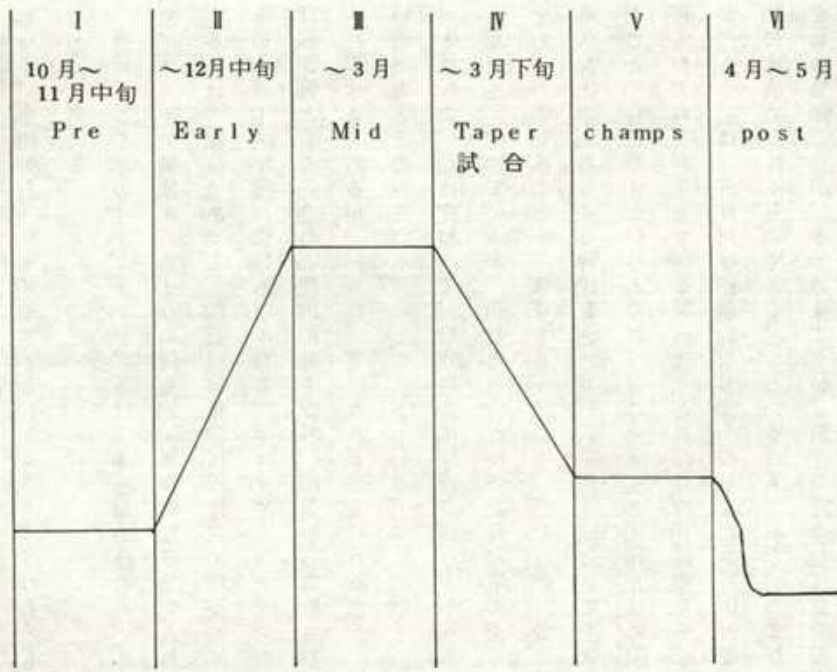
さる四月二十五日に、ビーターデラランドコーチのひきいる南カリフォルニア大学の、水泳チームを迎え、大阪の美津濃スポーツ、八階ホールにて、水泳コーチクリニクが開かれた。残念ながら、ジョン・ネーバーを始めとする選手たちは、明日にひかえる、親善試合のため顔を出さなかった。

神大水泳部では、平石と私の二名が参加した。

次に、ビーターデラランド氏のクリニクに関するレポートを記す。

一、水泳シーズンの区分

まず断っておくが、アメリカの場合、新学期が九月から始まるので、それにあわせて、シーズンの区分を行っている点に注意してほしい。シーズンは左図のように大きくわけて六区になる。



(25mプール使用)

Pre

一週五日間 一日につき一時間半

三〇分、筋肉トレーニング(クエイト)

三〇分、柔軟・体力(サーキット、特に間接・足首・肩・ひざ)

三〇分、技術トレーニング

ストローク(アームストローク・呼吸)

キック

ロングの者はこのシーズンの半分は朝もトレーニングをする。
始め二千から六千メートルぐらいまでもっていく。

Early

午前、六千五百メートル

午後、一時間半 陸トレ

クエイト 運動

水泳(三千→六千→八千メートル)

ロングの者クエイトでの体力トレーニングは十一月中旬くらいでやめておく。(短距離泳者に比べ筋力が弱い)
なお、この二つのシーズンではなるべく四種目泳ぐようにする。

Mid

一週六日間 一日二回のトレーニング、コンビティションも

含む(毎週一回)

短距離泳者 一日一万メートル

長距離泳者 一日一万六千メートル

Taper

一万から徐々に二千くらいにおとす。長距離泳者は一万六千から三千ないしは四千くらいにおとす。

Champs

NCAA・NAAUなどの試合がある。

なお、夏期は五〇メートルプールを使用、二種類のプールを使うことで選手の興味・情熱が持続する。年間十一ヶ月の練習である。

二、選手の心理

これは選手にとって、非常に重要である。筋肉の問題でなく、精神上の問題がある。コーチの心理学的アドバイスにより、選手がより意欲的になる。コーチや、指導的立場にある者はいつも選手を、やる気のある状態にたもつことが必要である。具体的に言うと、大きなレースで心理的に安心させてやる。自分に自信をもたせるよう努力する。チームに対し自分は十分貢献していると思わせる。などである。

(一)ミーティング

大きく分けて、全体ミーティングと個人的ミーティングに分けられる。

ビーターデラランドコーチは、このミーティングを、ベップト

イクというふうに呼んでいる。このベップトークは、常に充実させた練習生活を維持させるために、欠くことのできないものである。内容は、選手が常に意欲的になるようなものを選ぶ。

○内容的分類

一、肯定的ベップトーク：「君達はうまいんだ」など、自信をもたせるようにする。

二、否定的ベップトーク：選手が怠けた場合に行う。過去における好ましくない実績を上げ、もつとまじめにやれば、タイムも上がるということを言い聞かす。

三、比較しながらのベップトーク：他校の選手などの実績をあげ、意欲をださせる。

○ベップトークのタイミング

一、長期間の見方（一週間に二回ぐらい）

一ノ三年間続け、長い目で見た目標について話す。（君はこんなタイムで泳げば、オリンピックにもでられる。）

二、短期間の見方

一日ノ一週間ぐらい先の目標について話す。

ベップトークについては以上であるが、全体的に注意すべきことは、言い過ぎること、言いたりないことのバランスが難しいことである。

〔〕競争相手になるスイマーをこわがらせる。

すべてのスイマーは、チャンピオンと泳がねばならないということで、チャンピオンは、相手に威圧感を与えることができる。この威圧感の要素というものを身につけることで、精神的にリラックスすることが出来る。

以上で、今回のコーチクリニクレポートを終わる。

限界への挑戦

村 田 邦 夫

「もう、だめだ」と泳ぐたびにわかるのです。

水をキャッチしても弱々しいストロークで、タイムはどんどん落ちるのみです。肉体的にも、精神的にももう限界だと思えます。特に気力がなくなってきたようです。

今年の春合宿に、私は、つくづく体力的なおとろえを感じました。今まで、いくら陸トレをしていなくても、あんなことはなかったのですから。あの時にやめておけば、本当に良かったでしょう。今は泳ぐたびに、特に試合の時などは、みんなに迷惑をかけてかなしくなるのです。

しかし、どんなに「落ち目」になっても、それに耐えるのも社会勉強だと思えばこそ、やってきたのです。私は弱すぎるのですね。

いつもだれかの支えがいます。しかし、私が逆境になるとすぐ

にはなれていくのは、それだけ私になにかが欠けているのだと思います。女性についても良い勉強ができました。

私のクラブ観は、簡單明瞭です。クラブ員となる資格は、試合にでて即戦力になれる者のみとその地位を得れるのであるということだったのです。水泳部などの運動部にあつては、やはり、タイム、試合が頭からはなれては、それは、同好会になつてしまうからです。私も自分をそうすべく、猛練習をやってきました。必死で、私のクラブにおける存在価値をアピールしていったのでしよう。そんな私でしたから、今の自分は、なんの価値もないと思つてます。それどころか、他の「これから」の人々にマイナスの影響を与えているみたいです。

けれども、水泳部というクラブを通じて、今まで、本当にいろいろな経験ができました。社会の縮図といつても過言でない。

水泳部は、まさに、いろいろな人間の集まりでその人間を毎日、違った角度から観察して私は自分なりに勉強しました。

第二のスポーツは何がいいだろうか、これが私の今の考えるべきことなのです。

もうしんどいのです。戦場で刀一本でかろうじて立っている武士のような気がします。少々センチメンタルな文になってきましたが、あと六日間がんばります。

—— 関西国公立戦を目前にして ——

スキーは楽し

法 28 土 井 祐 二

去年の冬 後藤さんからさかんにスキーに行こうと勧誘があつた。しかし私の考えは昔から金のない者怠け者はスキーに行くべからずというものだったので金がない暇がないと逃げの一手さすがの後藤さんもあきらめたかみえた。だいたい私の冬の過し方はストイプがカッカツと燃える部屋の中のコタツの中でみかんをむいてもちを食べ熊のようにせつせと脂肪を貯めてやがて春を迎えると決めていた。だから寒さにも負けず長い板をかついで満員電車に乗る人々の心は理解できない。後藤さんの執念深い勧誘もふり切りほつと安心してやがて春休みも近づく頃又も後藤さんの勧誘が始まった。この前「金がないのでアルバイトをしますので暇がない」と言つたのが失敗であつた。彼はその言葉をしっかりと覚えていたのだつた。

「土井 金は貯つたやろ スキー行こ」と目をギラギラさせて言い寄つて来るのだつた。自分で自らを隊長に任じ勝手に行く人の名前を書いてはり切つている後藤さんの姿を見てもし行かなければ何か恐い事が起きるようなそんな予感がしてとうとう行くという返事をしてしまった。しかしこの裏には村上君が行くという心強さがあつた。後になつて村上君がスキーの経験者という事を聞いた時はスキー場で一人笑ひ者になつている自分を想像してゾツとした。

さて 出発の日が来た。水泳部の中で集った人は自称隊長の後藤

さん、そして平石さん、佐藤さん、小林さん、一回生では生協でも安く手に入れたと力説するスキー用品で体を装った木戸君そして骨折した友達の話をしてくれた慈幸君、一回生唯一のスキーの経験者みんなの注目の村上君そして常に骨折の恐怖にさいなまれている私と計8名が体育会のツアーにもぐり込んだ。夜行列車座れないのではという心配が先に立ちドアがあくや席をとる事の速いこと。そしてアカフカのグリーン車のシートとは大違いの固い石のようなシートで眠れぬ夜を過ぎねばならなかった。横には村上向いは慈幸に木戸、くつ下の臭いブンブン全く色気のない旅である。寝不足の赤い目をこすり戸符の駅へと降りた。「白い」それが第一印象だった。雪の経験といってもせいぜい足のひざぐらゐまで積った事があったような気がするだけで自分の身長よりも高く積った雪を肉眼で見るのは生まれて初めて、口を大きく開けて息をすると眠気も吹き飛んでしまいそうだ。

民宿へ着くや講習が始まるまでさっそくひとすべりと貸靴に貸スキーを身につけてさっそくとスキー場へと行く。

慈幸と私は村上先生に懸命に教えを乞うのであるが彼はなかなか教えようとしなない。「全然しらんよ、好きなように滑ったら」という彼の言葉に「無為自然これがスキーの境地なり」という意をくみ取りさすが名人と感心していると後藤さんが上の方から滑り降りてサッと横向きに止まった。そして平石さんも降りて来た。まさに月

世界に人類が到達するのと同じぐらい私が上に行くのも困難な事だろうとため息をついた。

スキーを八の字にして登ると必ず自分のスキーを踏んでボテッとこける。キックターンをすればどう間違ったのか両足とも内側を向き危うく骨折寸前までと初日はさんざんであった。初体験というのはどうも甘い響きを感じさせる言葉だが私にとってはさんざんであった。

初日の講習が終わり宿屋に帰りやつとふとんで寝れると喜んだのもつかの間慈幸のいびきと村上のうなり声と素晴らしいBGに恵れて、またも不眠の一夜を過ごす。

さて次の日、私と村上と慈幸は3人とも班がいっしょ、胸には50番台のゼッケンをつけグレンデにたくさんの穴をつくりまくった。ゼッケンは番号の小さいもの程うまく50番などをつけているのは全くの初心者だから自動車で初心者マークをつけているのと同じで凶々しくふるまえるので助かった。講習も進むにつれやがて村上先生が村上さん、村上さんが村上になって彼の化の皮もはがれた頃リフトのつて上へ行く事になってしまった。

リフトからの眺めは天国の蓮の池から地獄を見る気分であった。やがてリフトが終点に着きパッとリフトをけって飛び出したは良かったがその坂を下りて右へ曲るはずなのにそのまま真直ぐいってしまい雪の中へドスッ。背後を後からリフトで運ばれて来たスキーヤーがサーッと通り過ぎる。顔をふせながら班員の所へ行く。コッ

チが「ボーゲンでスピードを殺しながら行くのですよ。」と見本を示してスーッと滑って行く。後から班員がポテッポテッとコーチの描いたシュプールに穴をあけてころけていく。私は一度こけるとズズーと寝ころんだまま滑るのでほとんど立ったまま滑るという事がなく体中雪まみれにしていた。我が班のコーチの信念というのは「スキーは根性やで」であったので我が班員は新雪の積った中とても急な斜面を滑らされた。八甲田山とまではいかないまでもその斜面を降りるまで何度天を仰いだ事か。

少し勤くと新雪に突っ込む。スキーの上の雪を払いのけるのに一苦労も二苦労もしてやっと動けるようになり少しすべるとまた新雪に突っ込む。慈幸はあきらめて寝ころんだまま下へ滑り出すし村上はスキーを突っ込んだまま動けないし私ももちろん悪戦苦闘しかしその斜面を滑り終える（ほとんど滑らなかつたのだが）と班員の目はさすがに違って見えた。それから後はほとんど全員がみじめなボーゲンスタイルにもかかわらず神風タクシーにも負けず劣らずスピードを出して滑れるようになった。さあそれからはスキーが楽しくて楽しくてリフトに乗っている間も人の滑るのを見て笑う余裕もできてきた。

後日水泳のコーチとして幼児を教えている時この経験を生かそうと「お前ら根性でここまで来てみ」とヘルパーもつけずに泳がしたがほとんどの子供がすぐに泣きそうな顔をするか泣き出してしまいやはり「巨人の星」で育った世代と「マジンガーZ」で育った世代

とは違うなあと思った。

話は横道にそれたが私個人の事ばかり書いたので同行した人々の事についても書いておく。

まず後藤さん。さすがにスキースキーとうるさく言うだけあって私から見れば雲の上の人であったが、滑り終わって一日の疲れをいやそうと風呂に入ったら風呂の中で一人バタ足をしているバカがいた。どうせ水泳部の者やろと思ったが眼の近い私には見えない。一体誰かと近づけば何と後藤さんその人であった。アー恥かしい。

平石さんはキャブテンらしく水泳部でつくったムカデの先頭に立ち懸命にリードするのだが誰かが足を引っぱって必ず失敗した。そこで「水泳部は団結力がないの丸出しやないか」と嘆いておられた。しかしもしこのムカデのなかに女性がいたらさぞかし強いムカデになったのところがうかなと私は今思っている。

小林さんは一人でツアーの女性の注目を得て「小林さん」「小林さん」という声を聞いて私などは頭の下がる思いであった。スキーも経験者らしく上手であった。

佐藤さんは全く驚き桃の木で水泳やソフトボールでの華麗なプレーを見ているだけに佐藤さんがこけるシーンを見てもなかなか信じることができなかった。しかしさすがに飲み込みは早いようだ。

慈幸君は私と同じく最初はスキーなど目もくれない一人であったがどういう心境の変化かスキーに同行する事となり、最初はビクビクして私と「スキー場はみんなが滑るんやからなあ、技術は中

途半端やのにスピードを出す奴は全くけしからん」と二人で言っていたのに、真先にスピード狂になり人の迷惑かえりみずボーゲンでビュンビュン飛ばす神風スキーヤーになってしまった。

さていよいよ注目の村上先生について書く事にする。最初は経験者というふれこみであった。我が班が集合点呼をするに必ず一人足りない人物がいつの頃からかできるようになった。上を見ると一人の青年が少し立ち上るとドテッ又少し立つとドデッそこで戸狩のスキー場にこだまする村上コール「村上がんばれ」や々と我々の所に来た時は白一色に染ったみじめな中年男となっていた。しかしスキー場での屈辱に甘んじる彼ではなかった。夜、ミーティングやコンパになると息を吹き返したミイラ男のように節々と歌い始めるのであった。「みんなアグネス好き」彼が絶叫すると「好き」と返す大観衆やがて彼はあの独特の腰ふりをつけて歌うのであった。

もう少しでハッスルボーイの木戸君を忘れるところであった。彼だけ一人別の班に入れられて孤軍奮闘していたようだ。ある日「こらっスピード出したらええもんとちゃうんやぞ」と怒られている奴がいた。誰やと見れば木戸君、しかしフアイトの分だけ上達も早くシテムクリスチャニアまでいつてしまった。

最初あんなにいやがっていたスキーも今は冬が早く来ないかと待ちわびる程になってしまった。しかしスキーはお金がかかるそのためにもとせつせと貯金をする毎日である。

後日 自分の滑っている写真を見て驚いた。すごいヘッピリ腰で

ある。あまり写真には期待しない方がいいですよ。

レポート

「競技としての水泳について」

清水万里

教官名 水泳部の三賢人(実は……)

月ノ土曜 泳限目

字 番 P二八二九九

水泳はあくまでも自己の記録との戦いであり一つのコースで泳ぐのは自分一人だけである。誰も足をひっぱる者もいなければ手をひいてくれる者もない。いわゆる個人競技なのだ。だからと言ってすべてを自分勝手にしてよいものだろうか、それならばなにも水泳部などでみんないっしょに練習する必要はないはずだ。

一人の選手がレースに望む時実際に泳ぐのは一人であったとしてもその精神的な支えには毎日同じプールで、隣りのコースで並んで泳ぐ仲間の応援が大きく位置しているはずだ。ともに練習することによって通じ合える仲間の応援。

水泳競技にはリレーもあれば総合得点による団体優勝もある。そういう点では水泳は明らかに個人のものではなく、チーム全体の実力を問われる。それではリレーメンバー以外の者、また得点にかか

わりのない者には、勝手な行動が許されてよいのか？別に水泳に限ったことではなくすべてのスポーツにおいて言えることだが、レースであれ練習であれそれに参加している者はたえず自分の最大限の能力に挑戦しそのぎりぎりのところであらばっているはずである。

記録の差はあれみんなが自分なりにがんばっているはずでその苦しさの中で同じ苦勞と努力をする者どうしの信頼や心のつながりができているはずだ。その仲間とのはげまし合いや競争心があるからあって苦しい練習にもとびこんでいけるのだと思う。

ところがその中の一人が途中でくじけてしまったとしたらどうだろう。一見それはその人個人の挫折であって他の人には何のかわりもないように見えるが、いままでいっしょにやってきた仲間がいないということは残りの者にとっては自分の中でも何か欠けてしまったように思うにちがいない。

このように見ると水泳は決して個人だけの競技ではないのである。だからどんな場合でも水泳部というチームに所属する以上部員は常に自己のベストを尽くしていることが、チームを維持していくうえでの絶対条件となるはずである。

少なくとも一たんプールに入った時には各自はそのベストをつくして練習にうちこむようにしたいものだ。

レポート提出にあたって

先生は、はたして可を下さることであろうか。出席状況及び出席内容がきわめて不良なる我が身ゆえに単位がもらえないの

ではなからうかとしごく心配なのだ

関西ボロリーグ神京戦観戦

一 女 子 部 員

6月26日(日)梅雨のさなかになぜかこの日は晴れていたのデス。第二回戦 京大VS神大、神大は同点ながらおしくもMFの數に於て2-1で負けてしまったのでありました。でもわたくしの見たかんじでは、あれで同点にもちこめたのがむしろ幸運であったといえる気がするのです。ほとんど練習していない本校にくらべ京大は、さすがにボロリーグの練習をつんできただけあって、バス、ワイクローテーションなど見るべきものがありました。神大のプレイで光っていたのはやはり慈幸君の第一クォーターでの二度の退水と、酒井さんの第四クォーターでのノーマークのシュートミスであったかと思えます。

水球という競技は、いかに水面下で相手の水パンをひっぱるかによって勝負がきまるものであるのですが今回のゲームでは、片手にボール片手でバランスを保ちつつかつ、ねがえり体制でアタックにきた相手のあごにフックをくらわすという妙技を何回となく見せつけられ、水球とはバスケットとサッカーをたして2でわつたものなのだという認識をあらたにしたのであります。これはやはり水の中だからこそできるのですね。また本月初出場の杉山君が2点も

入れるという見せばもあり、ブルサイドは大いに沸いたのであり
ました。ノーマークでゴール前まで突っこんでいったときには、必
ず後をふりむいで、味方がくるまで待っているという。

最後に、今回の体験をもとに次回の対戦ではきつと京大チームを
うちやぶって下さいませ。

一回生入部記

上 田 剛 弘

僕は小さい時から運動は大のがてで、中学校に入った時もクラ
ブは文化クラブにと思っていたし、事実半分なりかけていたのです
が、何故か、にてもにつかぬ水泳部に入ってしまったのです。そし
て僕の人生は大きく変わってしまったのです。(ちよつと大げさか
な：？)

そんな訳で、本格的に泳ぎ始めたのが、中学からそして高校はブ
ールがなかったので、まようことなく文化クラブに所属しましたけ
ど、やっぱり文化クラブと運動クラブでは、部の雰囲気からその他
もろもろすべて運動クラブの方がいいんですね。そこで大学に入る
と再びまよわず水泳部に入ったんです。それに高校三年間のブラン
クのおかげで、ハガネのよ だった体が、マッシュマロのようなボテ
ボテに変わっていたので、これをなんとかしなくてはと(今、入学

時より6kg減りました)気軽に入部したのですけど、ところがどっ
こい中学時代二〇〇〇m未満くらいしか泳いでなかったのが五〇〇
m、合宿では九〇〇〇mでしよう、ここに大きな誤算があったので
す!!(信じれない)それに先輩も速いばかりで、僕のでる幕な
ど(………)といたいのですが一年生の宿命とも言うべき千五百m
にだされるのです)一五〇〇mにはがい思い出がありますので少
し書きます。

今からざつと六年前、僕が中一で水泳を本格的にやり始めた頃で
す。我が播州地方の花とも言える東播水泳大会があったのです。僕
はフリーで四〇〇mをやつと泳ぐくらいでしたから関係ないと思っ
ていたら試合の2日前になって先輩の一人が耳をいためて一五〇〇
mに欠員ができたのです。そこで我が西脇東中はいつものドン欲さ
で絶対欠員はつくらないという理由で、僕に死刑の宣告とも言える
「上田、お前一五〇〇m替わりにでろ!!」と言ったのです。この時
の驚きショック、一晚眠れませんでしたよ、それでも仕方なく出場
したのです。確か僕は7コースだったと思います。そして6コース
には忘れもしない、あのYさん(その年、県で一五〇〇m優勝した人)
が泳いだのです。僕はそんなこと知らないし、誰も僕におしえてく
れなかったのです。だから「よし、こいつに連いていこう」とい
う冗談みたいなことを真剣に考えていたんです。けれど、いざ泳ぎ
始めるとそんなことは、ころつと忘れてしまつて、ただMyベースを
守つてトトロと泳いでいたんです。

そして： 僕が八〇〇mくらい泳いだところで、隣のコースの

やつが止まってプールから上っているんです。これはびっくりキケンしたと思ひ込んで、7人泳いでいたから一人キケンで僕が自動的に6位だとうい甘い考えをもって泳ぎ終えたんです。僕より一人まだ遅いやつがいた（これだけは、今もって信じられません）ので「やった!! 5位だから2点取った」と思って先輩に言う。「あはかお前は6位じゃ」

「何故ですか、一人キケンしたはずでしょう」（一瞬先輩沈黙）

「誰が、キケンした？」

「6コースのやつ、キケンしたんでしょう？」

この時先輩はやつと僕の思いがちに気がついて、同情した目つきで「いや、あいつはYゆうて県で優勝するくらいなのやつなんや、お前が八〇〇mくらい泳いでる時にもう一五〇〇m泳いでしもとったんや」

これを聞いた時のショック、もう水泳はやめようと固く決心したはずだったのに……

こんな経験もう二度としたいと思っていたのに、今度一五〇〇mに出なくちゃいけないようになってしまつて、またショックを受けそうでも今度はがんばるつもりです。「七〇〇m以内にトップとの差を縮めよう」という、目標ができましたから。

久保田 純 生

僕が水泳部に入ろうと思ひ立った動機は、大したことはない。高校時代、少し水泳をやったことがあったのと、他に魅力を感じるクラブが少なかったためです。

短かくって長かった浪人生活が終り、何だかんだとあわただしく4月1ヶ月間も過ぎてしまつて、プールの訪れたのは5月の連休が終つてからのことでした。で、早速（?ノ）入部した訳なのですが、泳ぎだして感じたことは、その水の冷たいことノ 高校時代も5月には泳いでいたので水が冷たいことぐらい知っていたはずなのですが： 一日目は、ただただプールサイドでふるえてました。（もつとも、もう5月も終る今日になつても、寒いといつて練習している先輩を後目にまっ先に風呂に飛び込む有様ですが）

今日、記録会で一〇〇mを泳いだところ、何と1分30秒近くもかかってしまいました。1分10秒（ベスト）とまではいいませんが、何とか早く1分10秒台にもどりたと思つております。

先輩も非常にいい方ばかりですし（?ノ）女性の方もいらつしやいますし（僕の中学、高校は男子校だったので）、楽しくて、なかなか良いクラブだと思ひます（ただ、教養の食堂に貼つてあったポスターの絵程の女性はいらつしやらない様ですが……）。

6月に入ると強化練習に入りますが、何とかアゴを出すことなく、ノルマを消化する様頭張つていこうと思つているしだいです。

私が大学に入学してからはや三ヶ月が過ぎようとしている。思えば入学当初は、水泳からはきっぱりと足を洗ったつもりであったので、もはや三ヶ月後の今、こうして「凌泳」の原稿を書いているなどとは想像もできなかったのだ。

しかし、私はなぜまたプールの泥沼に足をつっこんでしまったのか？ 答えは簡単。成りゆき上、ずるずると……ということである。

まあ、プールだけでも見に行ってみようと思っただのが、そもそも、まぢがいのもとであり、ずるずると入部する気にさせられてしまった。(つまり、別に、特に水泳部でなければならぬ理由はなかった) しかし、まあ考えてみれば、プールを見に行こうと思っただけということは、やはり水泳に未練があったのかもしれないから、これでよかったのかもしれない。

そして、それからタイムがまったくのびずに、もうだめだと思ひ、なぜにみんなあんなに元気に若々しく泳いでいられるのかとうらやみ、別に泳がなければならぬ理由は何もないと急にあらはしくなり、まあ、いろいろありつつ、もう六月の終り。月日のたつのは早いもの、今年の水泳シーズンはあと二ヶ月(たった二ヶ月/と言うべきか？ はたまた、まだ二ヶ月も/と言うべきか？)まだ、いろいろと気がくじけることも多いだろう。でも、あと二ヶ月は、ほんとに泳ぎたいなあ、悔いが残らぬように。動機がなんであれ、きっかけがどうであれ、私は水泳を選んだの、だから水泳部に自分の意

志で入部したのだから、自分でそう決定したのだから。(とは思うのだけれど、すぐ気がくじけてしまっただめなのです) みなさん私をあたたかく見守ってあげましょう！

「新入部員自由ノート」より

親愛なる神大水泳部の皆さん 初めまして。僕は中学・高校と、ほとんど水泳には縁がなかったので、これから迎えるシーズンに、少なからざる心配の感をもっておりますが経験者に負けないように(意気込みだけでも)がんばろうと思っておりますのでよろしくお願ひいたします。

四月二十一日 巖 谷 記

五月に入って僕の身辺もようやく落ち着いてきたこの頃です。クラスの友達も何人かでき家庭教師の口もみつかり、講義もだいぶ抜けるようになり何だかけだるくなります。僕は高三の時、農学部に行くつもりだったので理系のクラスにいましたが、夏休みに入る頃からだんだん志望が変わり、教師、特に小学校の先生は楽そうだし給料もいらしいので文系に変えて、本番で社会に足を引っ張られて浪人生活へ入ったのでした。とまあこんな調子で今年神大に入学できたのですが、いざ入ってみると、教育学部の女子の多いことに改めてびっくりし、それと同時に教師という職業の重さがじ

わいわとわかり、何だかいやになってきたのですが、今さらどうするわけにもいかず、ただ一生懸命やるだけです。僕という人間は悩める人であり、今までに友情・恋愛・SEX・親・神とさまざまな問題にぶつかってはひとりモンモンと考えたり悩んだり疲れたり、ええかげんしんどくなってきたのです。そこで僕は水泳部を選んだのでした。泳いでいると考える余裕などないし、全身の力を以って水の抵抗とたたかう、少しキザな言い方ですがそこから忍耐が生まれ、それが僕自身を少しでも成長させると考えたからです。こんなえらそうな事を言っても僕は今までにまじめに練習に出たでしょうか。これからもまじめに練習に励むでしょうか。ああ何と僕は情けない男でしょう。それにしても神大というところはしんどい所です。やたらと坂が多いし学部があちこちにちらばっているし、まあ腰位はきたえられて結婚してから役には立つてでしょうが、腰をきたえるには階段を上るとき二段ずつのぼるといいそうです。大分話が変な方向にそれてきたし書くこともなくなりましたので止めます。

追：この前麻雀をやっている四暗刻になって僕は非常に興奮しました。

五月二日 森 鼻 記

一週間近く、机の上に置きわすれていました。あせって書きます。水泳部に入った動機は、単純で、他に入部できそうなクラブがなかったからなのです。かといって、軟弱クラブという意味ではないのですが、一番苦しいけど個人競技だから休みたければいくらでも楽

できるといふところに魅力を感じたのです。その自由さにかに打ち勝つか、精神修養にも、体力作りにも最高のスポーツだと思ふ。実際は寒さに負けて、かなり手を抜いている感じですが、理想（目標）にかなうよう少しでも努力していくつもりです。しかし入部したおかげで五月病とやらにもならず、充実した大学生活がおくれるような気がします。記録の方は長い目でみて、さしあたって毎日の練習参加を目標にします。今の新入部員数が減らないよう、みんな頑張ろうではありませんか。

五月九日 芝 記

先週の金曜日から、かぜをひいています。シンドく考えてみれば、小学校のときから、ろくにかぜもひかなかったのでそれがたまって今出てるのかも。

水泳部に入った理由は、体力・精神力をつけるためです。

五月二十七日 土 井 記

はじめまして（でもないけれど）、これからマネージャーをやりたいと思います。どうぞよろしくね。

名前はもうご存じでしょうけれど上羽正子と申します。昭和33年12月22日生まれで18才です。高校の時も水泳部にはいっていて、一年の時だけ泳いで（足が神経痛になったので、）あとは、マネージャー補佐をしていました。適当に練習のお邪魔をして、そろそろ相手にされなくなりそうになると、ジュースとかお菓子を持っていっ

てなんとか命をつないできたの。三年間クラブを通していろいろあったけれど、卒業してみると、やっぱり続けてよかったなあと思います。だから大学でもこんな楽しい思いができたらと水泳部に入ることに決めました。決心するのにずいぶん時間がかかって中途半端な時期に入部するのはとてもはずかしいことなのに、皆さんとっても親切に下さるし、楽しそうな雰囲気なので本当にうれしい。それから、皆さん「上羽さん」って呼んで下さるけど高校の時はクラブの人たちに「バタン」とか「バツタン」って呼ばれていました。大好きなあだ名なのでそう呼んで下さい。お気に入らない。名前が正子だから「マア」って呼ぶ人とか「バアちゃん」と呼ぶ人もあります。(ひどいでしょ?)でも「バタン」と呼んでくれると気嫌がよくなるんですよ。(またまた)それから、時には、泳ぎの練習もしたいと思います。フリーとバックをかつよく泳ぎたいなあ、と考えていますのでどうぞ教えて下さい。

本当に何もできないけれど一生懸命皆さんのお手伝いをしたいと思いますのでどうぞよろしくお願いします。

七月八日 上羽記

合宿記

(B班)

先発メンバー 後藤 チェ・中尾 マリ・橋爪

第一日目 10:00 合宿所集合 天気はわれわれの前途を予告する

かのごとく、どんよりと曇り、小雨まで降ってくる。ふとんをはこびながら去年も雨だったなあと思います。米年も雨だろうなあ。午後練はいささか緊張したムードの中で何ごともなく練習が終わり、みんなの声にはまだ元気があつたみたい。ミーティングは各チームの反省と恐怖の人事移動であった。第一の犠牲者は中尾君。Aへ強制送還。(この時よりわれらがヒーロー、酒井さんの二代目という芝君がCより加わる。のち、われわれの驚威になろうとは、つゆしらず…)そして、わが班の目標が決定、いつの日かチーフをAへ……

第二日目 練習量ビーク

元気がくじけてくる……まだ二日目ではないか。D班の軽やかな笑い声がうらやましい。それにしてもA班へ行った中尾君の身が案じられる。

追跡レポート① 彼もなかなか役者やお。言葉少なに顔

もおおぎめうつむくばかり。時々B班に投げかけられるまなざしが痛々しい。

ミーティングでは、第二の犠牲者選考会。必死の抵抗むなしくあわれや、一人のかよわき実は一歩たくましい乙女が血まつりに……一日契約でトレードされた。ひきかえに中尾氏はまんまとB班に復帰あいなりし。

第三日目

練習量は一時軽減しかし身心ともに限界状況。例外、だれとはいわんが一人記録をのばすものあり。いとあやし。キャプテンの話では、明日またふえるとか（性格があらわれるなあ）おぞましきことなり。

追跡レポート② B班で中尾氏は昨日の成果も十分に、さすがA班帰りとされる泳ぎで明るい表情。彼もなかなかの役者なのダー。となりのマリちゃんはひたすらあざむきの笑いでA班のしごきにたえておりました。

ミーティングで大幅な人事移動。周到な計画のもとにわれらがチーフ後藤先輩はめでたくもAへ昇格。マリちゃんは、B班へ奇跡のカムバックそしてまたまた中尾氏はBへいつのまにか遠征（彼は短距離なのにムムッチ）それからCからたくさんの有志をえてBは大世帯となりし。チーフはフミさんになりBも安泰です。

第四日目

身体的にも精神的にもピークとなり、おぞましい一日であつたが何故かBには明るい声がただよう。フミさんのも

とに「早く早く（速く速くではないのであしからず）一刻も早く終わろう」というスローガンのもとに、みんな一致団結、みせものにはなりたくないのです。チェさんと館谷君、芝君と純子のたくましいデットヒートというか、どろ沼の競争がくりひろげられた。いかに力をぬいて速く泳ぐかということばかり考えていた。その間マリちゃん一人前方10mをバックで進行（Aにいくと、みんな余裕の泳ぎになるのです）

追跡レポート③ 後藤先輩はさすがというか十分Aについて

ておきやしたのでございます。本人もなかなかの余裕で明日もAに残留。

それから、夕食のふりかけがおいしかったねえ。

第五日目 なんととっても今日はまともな練習は午前だけで午後からはバート練習。パンザイノフォームきょう正は、なかなかよかったのです。しかし一べん自分の泳いでいる姿をみたいわ。又、最後にみんなで四〇〇mロングをいってチェさんとフミさん、マリちゃん純子で八分レースをしたのです。その結果賞品のアイスクリームにありつけたのは純子でした。（マリちゃんいわく、普段一番にたりよったりのタイムでおよいでるものネ、グサーノ）みんな練習するの仲々たのしいものです。個々の時なんかこれぞ合宿という感じ。

ミーティングのときみんな終わったという解放感とビールのせいで、いつも真面目な方も「字がみえへん」とさげんでいるしまつ。そのあと楽しいほんとうは恐怖のコンバ練習。

一年生はレスリング中継。初めはえんぎで途中から本気というのか、なかなか真剣味をおびていました。

二年生は、かわゆくきれいにまとめて替えうたとオバケのQ1たろー。

三・四年生は、スーパージェッターのかえうた。はじめは何をいつているのかわからなかつたけれど、くり返しきいてるうちに純情なワタシメにもいみがわかつてしまったのダ。

とにかく、つらいことも、もちろん楽しいことも後になればみんな楽しい思い出となったのです。

(D班 キャンデーイズ)

最初のメンバー 池上、坂井、松木、みの谷、森鼻、久保田、土井、

陳

一日め：班別メニューに大いに満足、元氣よく合宿に突入。D班から男子を抹殺する計画をたて、ついに一名達成(クシャ、クシャ、クシャ)。我々の中から代わりのチーフが選ばれ先輩気分ひたる。

二日め：しんどいにもかかわらず何故か笑いが絶えず和気あいあいしかし他の班からにらまれる。

三日め：午前、思いがけなく佐トー氏登場(ギョエー)何故か笑いが絶える。我々のチーフの命は一日で終わった。おまけにレベティションでみんなの声援(?)を受ける。午後、D班の星平野氏登場(グブ)メガホンを持ち、水泳のコーチになりきる。我々を人間扱いせずメニューを勝手に変える。(我々は虫か!!)その夜男子二名を抹殺。残すは二名のみ、これはなかなかしぶとそう(ム、ム、ム)

四日め：男子二名欠席のため我々キャンデーズの天下。しかし午前塩浜氏登場(ヒエー)プログレスで恐怖のマシを行かされる。(ハブ、ハブ、ハブ)予想外のできごと、もう体力の限界だ!! 午後より平野氏一人フット満々で登場。このへんで平野氏に対するドロドロとした感情が我々の心に現れはじめる。それを知ってか知らずか平野氏始終、笑顔で指導。

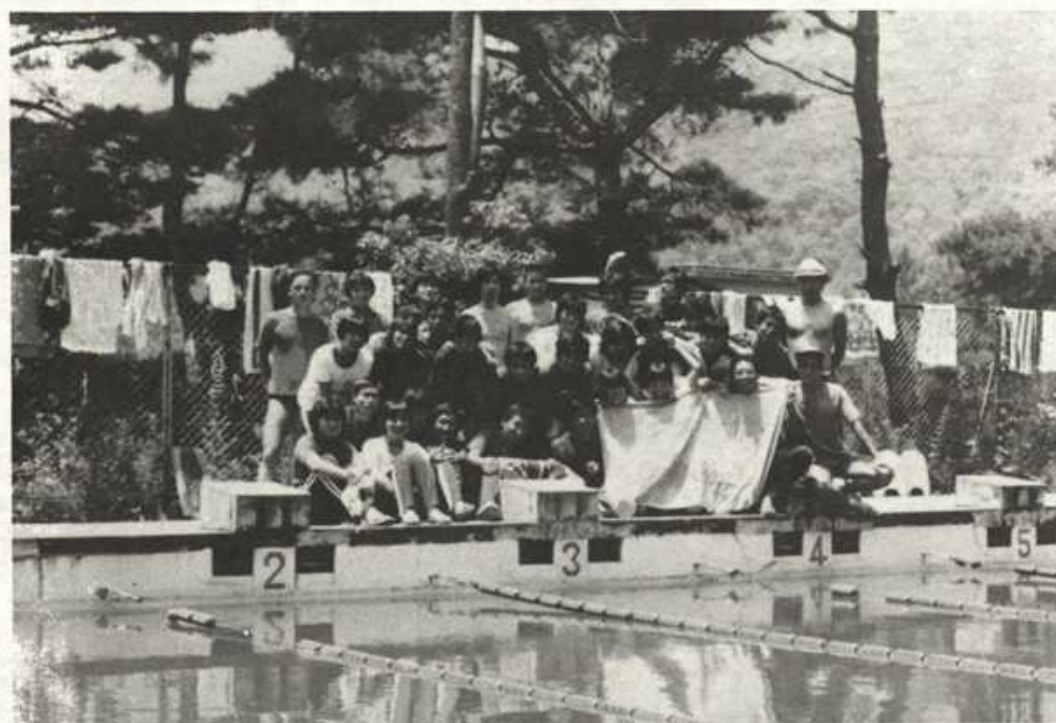
五日め：なんととっても恐怖の個メ。

バタフライで波のまにまをさまよい、バックで足がけいれんし、ブレでまたもみんなの声援(?)を受け、フリーで疲れはて死にかける(合掌)

今までの練習で、気分的に一番つらかった。明日のリレーでも笑いの的になるのは目に見えている。さてどうなることやら……

D班生き残りメンバー：池上、坂井、松木、みの谷、陳

昭和52年度第一次合宿は過去の経験を生かし、最も能率的に行なえる様にと、A～Eまでの5つの班に分けた。A、B、Cには1日に7千5百mから9千m泳ぐことが課せられ、Dは俗に言う初級者コースで6千m前後、Eはロングメンで1万m近くのメニューが立てられた、各グループに、チーフ1名が置かれ、彼(あるいは彼女)の指示によって、次々とその日のメニューがこなされていった。時間まで細かに計算された計画書は、幹部連が驚くほど正確に遂行されたのである。



現役部員一同

平清井 伊木有中 佐村 亀
野水上 藤下本尾 藤田 井

山松芝森糞慈 栗酒油阿
本木 鼻谷幸 野井谷部

坂陳池土上杉館橋高平後
井 上井田山谷爪木石藤

S
52
年
7
月
第
一
次
合
宿

昭和 51 年度 戦績

『京阪神三大学戦』 6月13日 於 同志社大プール(L)

○ 400 M. R.

(酒井・平石・慈幸・村田) 5-05-0 3位

○ 800 Free

丸末一之 11-34-2 4位

平野輝雄 14-27-4 8位

油谷隆司 16-23-0 9位

○ 100 Free

村田邦夫 1-03-6 2位

伊藤良一 1-11-0 5位

井上央 1-34-0 9位

○ 200 Back

酒井正人 2-52-5 4位

伊藤弘之 3-08-4 5位

木下修一 3-19-6 7位

○ 400 Free

丸末一之 5-24-5 2位

村田邦夫 5-40-8 4位

○ 200 Fly

慈幸弘樹 3-19-2 5位

塩浜英二 3-38-0 6位

○ 200 Breast

平石康 3-01-6 3位

慈幸弘樹 3-04-0 4位

小林正文 3-12-5 7位

○ 800 Relay

(丸末・酒井・平石・村田) 10-36-8 3位

総合

1位	京都大学	93点
2位	大阪大学	64点
3位	神戸大学	50点

注

M. R. (Medley Relay)

I. M. (Individual Medley)

Free (Free - style)

Breast (Breast - stroke)

Back (Back - stroke)

Fly (Butter - fly)

プール名右に記した(L)は長水路を、

(S)は短水路を示す。

『兵庫県国公立大学戦』 6月20日 於 神戸商科大プール(S)

o 800 Free

丸末一之 11-07-0 1位
土井祐二 13-56-6 5位

o 200 I.M.

慈幸弘樹 2-42-0 1位
(神大新)
佐藤弘之 2-55-2 3位

o 200 Breast

平石康 2-52-9 1位
後藤信人 3-08-2 4位

o 200 Fly

慈幸弘樹 3-11-1 1位
塩浜英二 3-14-2 2位

o 200 Back

酒井正人 2-43-9 1位
木戸功 3-09-9 3位

o 200 Free

村田邦夫 2-28-3 2位
伊藤良一 2-48-0 6位

o 400 Free

丸末一之 5-13-4 1位
平野輝雄 6-29-7 6位

o 100 Breast

平石康 1-18-9 1位
小林正文 1-25-1 4位

o 100 Fly

佐藤弘之 1-20-8 2位
塩浜英二 1-23-3 4位

o 100 Back

酒井正人 1-17-0 1位
木戸功 1-22-6 2位

o 100 Free

村田邦夫 1-03-5 1位
伊藤良一 1-10-9 5位

o 400 M.R.

(酒井・平石・慈幸・村田) 4-59-8 1位

o 400 Relay

(丸末・慈幸・酒井・村田) 4-19-9 2位
(神大新)

o 800 Relay

(平石・慈幸・村田・丸末) 9-53-7 1位
(神大新)

総合

優勝 神戸大学
2位 神戸商船大学
3位 神戸商科大学

『兵庫県学生選手権大会』 7月4日 於 神戸商船大プール(S)

〔男子〕但し、決勝記録のみ

- 200 I.M.
 - 慈幸弘樹 2-35-4 失格
 - 佐藤弘之 2-50-7 5位
- 200 Free
 - 村田邦夫 2-21-2 4位
(大会新)
- 100 Back
 - 酒井正人 1-15-7 4位
 - 木戸功 1-22-8 6位
- 100 Breast
 - 平石康 1-18-5 2位
 - 小林正文 1-25-6 6位
- 100 Fly
 - 塩浜英二 1-22-6 6位
- 100 Free
 - 村田邦夫 1-02-9 3位
 - 伊藤良一 1-08-6 7位
- 200 Back
 - 酒井正人 2-44-0 4位
 - 木戸功 3-07-6 6位
- 200 Breast
 - 平石康 2-53-3 2位
 - 後藤信人 3-05-2 7位
- 400 Free
 - 丸末一之 5-06-8 3位
(神大新)
 - 平野輝雄 6-30-2 6位
- 200 Fly
 - 慈幸弘樹 3-02-5 4位
 - 塩浜英二 3-19-6 7位
- 800 Free
 - 丸末一之 10-39-7 2位
(大会新及び神大新)
 - 土井祐二 13-01-6 7位

- 400 M.R.
 - (酒井・平石・塩浜・村田) 4-57-7 3位
- 800 Relay
 - (丸末・酒井・慈幸・村田) 9-48-3 3位
(神大新)

総合		
1位	甲南大学	94点
2位	関西学院大学	64点
3位	神戸大学	51点
以下略		

〔女子〕但し、全てOpen Race

- 200 I.M.
 - 竹島信子 3-17-5 3位
 - 清水万里 3-28-0 4位
- 200 Free
 - 有本智恵 2-56-9 1位
 - 山本純子 3-22-3
 - 池上英子 5-40-8
- 100 Back
 - 竹島信子 1-28-5 2位
 - 浜西美智子 1-32-4 3位
- 100 Free
 - 清水万里 1-18-9 3位
 - 栗野正子 1-28-3 5位
 - 坂井久子 2-09-4 6位
- 400 M.R.
 - (浜西・竹島・有本・清水) 6-01-3 2位
- 400 Relay
 - (清水・浜西・竹島・有本) 5-12-2 2位

『関西国公立大学戦(男子)』 7月17・18日 於 京都大プール(L)

○ 400 I.M.

慈幸弘樹 5-58-1 3位
(神大新)

○ 800 Free

丸末一之 10-49-5 5位
土井祐二 13-12-0
平野輝雄 14-10-3

○ 100 Breast

平石康 1-20-6 6位
後藤信人 1-25-0
小林正文 1-25-6

○ 100 Fly

塩浜英二 1-25-9
油谷隆司 1-51-6

○ 200 Free

村田邦夫 2-25-9 6位
伊藤良一 2-37-4
中尾稔 2-58-8

○ 100 Back

酒井正人 1-15-6 4位
木戸功 1-22-0

○ 200 I.M.

慈幸弘樹 2-38-6 3位
佐藤弘之 3-01-5

○ 200 Breast

平石康 2-54-7 4位
後藤信人 3-10-4
木下修一 3-20-1

○ 400 Free

丸末一之 5-16-6 5位
土井祐二 6-18-0
平野輝雄 6-36-6

○ 200 Fly

塩浜英二 3-26-1
油谷隆司 4-07-6

○ 200 Back

酒井正人 2-42-2 3位
木戸功 3-05-4

○ 100 Free

村田邦夫 1-03-0 6位
伊藤良一 1-09-7
中尾稔 1-14-1

○ 400 M.R.

(酒井・平石・慈幸・村田) 4-58-4 5位

○ 400 Relay

(慈幸・伊藤・村田・丸末) 4-21-3 7位

○ 800 Relay

(慈幸・酒井・丸末・村田) 9-57-8 5位

総合

1位 京都大学 110点
2位 大阪府立大学 82点
3位 大阪大学 67点
4位 奈良教育大学 48点
5位 神戸大学 29点
6位 京都工芸繊維大学 24点
以下略

『関西国公立大学戦(女子)』 7月17・18日 於 京都大プール(L)

o 50 Free

清水万里 35-0 4位

栗野正子 36-8 5位

o 200 I.M.

竹島信子 3-19-4 3位

o 100 Breast

内田里佳 2-13-7 6位

o 100 Fly

有本智恵 1-31-2 1位

清水万里 1-42-3 2位

o 100 Back

竹島信子 1-31-6 2位

浜西美智子 1-33-5 4位

o 200 Breast

山田玲子 3-34-2 3位

内田里佳 5-02-0 7位

o 50 Fly

栗野正子 47-4 2位

o 50 Back

浜西美智子 41-8 2位

o 100 Free

有本智恵 1-19-5 3位

山本純子 1-28-6 5位

o 200 M.R.

(浜西・竹島・有本・清水) 2-40-0 2位

o 200 Relay

(竹島・清水・浜西・有本) 2-17-9 1位
(大会新)

総合

1位 大阪教育大学 69点

2位 神戸大学 62点

3位 京都教育大学 46点

4位 奈良教育大学 35点

5位 京都大学 16点

6位 奈良女子大学 8点

以下略

『第57回対市大戦』 7月25日 於 市大プール(L)

〔競泳の部〕

〔水球の部〕

○400 M. R.

(酒井・平石・慈幸・村田) 4-58-5 1位

○800 Free

丸末一之 11-15-6 1位
土井祐二 13-30-6 5位
平野輝雄 14-20-7 6位

○200 Breast

平石康 2-59-8 1位
小林正文 3-07-0 2位
後藤信人 3-09-6 4位

○200 I. M

慈幸弘樹 2-43-1 1位
平石康 2-52-1 2位
佐藤弘之 2-54-7 3位

○100 Free

村田邦夫 1-04-5 1位
伊藤良一 1-09-1 4位
中尾稔 1-13-8 5位

○400 Free

丸末一之 5-28-0 1位
土井祐二 6-29-7 5位
平野輝雄 6-34-8 6位

○200 Fly

村田邦夫 2-55-7 1位
塩浜英二 3-22-8 3位
慈幸弘樹 失格

○200 Back

酒井正人 2-45-0 1位
佐藤弘之 3-10-7 2位
木戸功 3-15-6 3位

○800 Relay

(丸末・慈幸・酒井・村田) 10-18-5 1位

Member

1. 後藤 信人
2. 佐藤 弘之
3. 小林 正文
4. 伊藤 良一
5. 塩浜 英二
6. 丸末 一之 ②
7. 酒井 正人 ③
8. 平石 康 ②

Score

神大	Q	市大
0	I	1
1	II	2
4	III	1
2	IV	0
7	計	4

○内の数字は得点を表わす。

競泳の部 完全優勝

水球の部 優勝

総合優勝

『旧三商大水上競技大会』 8月1日 於 一橋大プール(L)

〔競泳の部〕

- 400M.R.
 (酒井・平石・慈幸・村田) 4-53-0 1位
- 800 Free
 丸末一之 11-02-8 2位
 土井祐二 13-26-8 6位
- 200 Breast
 平石 康 2-55-4 1位
 後藤 信人 3-06-3 3位
- 200 I.M.
 慈幸弘樹 2-40-8 1位
 平石 康 2-53-9 4位
- 100 Free
 村田邦夫 1-02-6 1位
 伊藤良一 1-09-3 4位
- 400 Free
 丸末一之 5-24-3 1位
 慈幸弘樹 5-51-3 5位
- 200 Fly
 村田邦夫 3-01-2 3位
 塩浜英二 3-21-7 5位
- 200 Back
 酒井正人 2-45-0 2位
 佐藤弘之 3-07-6 4位
- 800 Relay
 (丸末・平石・慈幸・村田) 9-57-6 1位

〔水球の部〕

- | | |
|------------|------------|
| 神市戦 | 神橋戦 |
| Member | Member |
| 1. 後藤 信人 | 1. 後藤 信人 |
| 2. 佐藤 弘之 | 2. 佐藤 弘之 |
| 3. 小林 正文 | 3. 小林 正文 |
| 4. 伊藤 良一 | 4. 伊藤 良一 |
| 5. 塩浜 英二 | 5. 塩浜 英二 |
| 6. 丸末 一之 ④ | 6. 丸末 一之 |
| 7. 酒井 正人 ① | 7. 酒井 正人 ② |
| 8. 平石 康 ③ | 8. 平石 康 ① |
| 9. 平野 輝雄 | |

Score

神大	Q	市大
3	I	2
2	II	1
4	III	1
4	IV	1
13	計	5

Score

神大	Q	一橋
1	I	4
1	II	5
0	III	4
1	IV	4
3	計	17

水球順位

- 1位 一橋大学 2勝0敗
 2位 神戸大学 1勝1敗
 3位 大阪市立大学 0勝2敗

競泳順位

- 優勝 神戸大学 74点
 2位 一橋大学 70点
 3位 大阪市立大学 40点

総合

- 1位 神戸大学
 1位 一橋大学
 3位 大阪市立大学

『関西学生選手権水上競技大会』 8月15・16日 於大阪府立大プール(L)

○ 400 M. R.

酒井・平石・慈幸・村田 4-48-66 2位

○ 800 Free

丸末一之 11-18-07 6位

○ 100 Breast

慈幸弘樹 1-18-30 2位

平石康 1-19-82 3位

○ 100 Fly

佐藤弘之 1-26-66

油谷隆司 1-43-11

○ 200 Free

村田邦夫 2-21-05 3位

井上央 3-45-10

○ 100 Back

酒井正人 1-16-14 5位

木戸功 1-23-45

○ 200 I. M.

慈幸弘樹 2-40-19 1位

佐藤弘之 2-57-90

○ 200 Breast

平石康 2-55-95 3位

後藤信人 3-05-88 5位

○ 400 Free

丸末一之 5-20-79 6位

木下修一 6-29-06

○ 200 Back

酒井正人 2-44-83 4位

木戸功 3-06-79

○ 100 Free

村田邦夫 1-01-93 3位

永田安徳 1-18-58

○ 800 Relay

(丸末・慈幸・平石・村田) 10-11-12 6位

— 2部総合 —

1位 甲南大学 64点

2位 奈良教育大学 54点

3位 関西学院大学 54点

4位 神戸大学 43点

5位 京都工芸繊維大学 28点

6位 滋賀大学 21点

以下略

甲南・奈教・関学は1部昇格

1部より、府大・京大・阪大が2部陥落

『関西女子学生選手権水上競技大会』 8月15・16日 於大阪府立大プール(L)

o 100 Breast

山田 玲子 1-38-46

谷村 幸子 2-11-40

内田 里佳 2-16-40

o 100 Fly

有本 智恵 1-33-66

栗野 正子 2-13-73

o 200 Free

清水 万里 3-10-17

山本 純子 3-21-23

o 100 Back

浜西 美智子 1-37-08

o 200 I.M.

高木 史子 3-27-30

o 200 Breast

山田 玲子 3-33-00

谷村 幸子 4-47-90

内田 里佳 4-50-20

o 100 Free

有本 智恵 1-18-40

清水 万里 1-21-51

栗野 正子 1-26-12

o 400 I.M.

高木 史子 7-32-2

o 400 M.R

(浜西・山田・有本・清水) 6-10-05 5位

o 200 Relay

(浜西・清水・栗野・有本) 2-20-83 5位

o 400 Relay

(浜西・清水・高木・有本) 5-22-37 4位

総 合

1位 天理大学 166点

2位 大阪体育大学 75点

3位 武庫川女子大学 27点

4位 大阪教育大学 18点

5位 成蹊女子短期大学 10点

6位 神戸大学 7点

以下略

『近畿地区国立大学体育大会(男子)』 8月24・25日 於大阪教育大プール(S)

o 200 Relay

慈幸・丸末・村田・木戸 1-55-0 6位
(神大新)

o 200 I.M.

慈幸弘樹 2-34-4 1位
(大会新及び神大新)
井上央 4-14-9

o 200 Breast

平石康 2-46-1 2位
後藤信人 2-58-7
村上正之 3-49-0

o 800 Free

丸末一之 10-49-2 4位
木下修一 12-59-4
土井祐二 13-01-2

o 200 Fly

塩浜英二 3-15-2
油谷隆司 3-54-6

o 200 Free

村田邦夫 2-17-5 5位
中尾稔 2-47-1
永田安德 3-02-9

o 200 Back

酒井正人 2-39-4 3位
木戸功 失格

o 400 I.M.

慈幸弘樹 5-47-8 2位
土井祐二 7-29-2

o 100 Fly

塩浜英二 1-22-0
油谷隆司 1-36-2

o 400 Free

丸末一之 5-01-5 3位
(神大新)
平野輝雄 6-22-8
阿部誠次 6-54-6

o 100 Breast

平石康 1-17-5 3位
後藤信人 1-22-6
永田安德 1-35-1

o 100 Back

酒井正人 1-14-4 3位
木戸功 1-19-9

o 100 Free

村田邦夫 1-00-7 3位
(大会新)
中尾稔 1-09-1
井上央 1-24-6

o 800 Relay

(丸末・伊藤・慈幸・村田) 9-33-0 3位
(神大新)

o 400 M.R.

(酒井・平石・慈幸・村田) 4-45-7 3位
(神大新)

総合

1位	大阪大学	77点
2位	奈良教育大学	65点
3位	京都大学	51点
4位	神戸大学	51点
5位	京都工芸繊維大学	37点
6位	滋賀大学	25点
以下略		

『近畿地区国立大学体育大会(女子)』8月24・25日 於大阪教育大プール(S)

o 200 Relay

(浜西・清水・高木・有本) 2-16-3 2位

o 100 Free

有本 智恵 1-17-2 3位

清水 万里 1-19-2 5位

山本 純子 1-27-4

o 200 I.M.

高木 史子 3-18-2 4位

o 50 Back

浜西 美智子 41-3 2位
(大会新)

池上 英子 1-16-9

o 100 Fly

有本 智恵 1-28-2 1位

高木 史子 1-37-8 3位

o 50 Free

清水 万里 35-1 3位

栗野 正子 37-9 4位

坂井 久子 52-7

o 100 Breast

山田 玲子 1-32-5 3位

谷村 幸子 2-05-8

o 100 Back

浜西 美智子 1-31-8 4位

o 50 Fly

栗野 正子 47-2 4位

山本 純子 47-3 5位

o 200 Breast

山田 玲子 3-20-3 1位

o 200 M.R.

(浜西・山田・有本・清水) 2-31-3 2位
(大会新)

o 400 Relay

(有本・清水・高木・浜西) 5-21-6 2位
(大会新)

総 合

1位 大阪教育大学 78点

2位 神戸大学 69点

3位 京都教育大学 30点

4位 京都大学 17点

5位 奈良教育大学 16点

6位 大阪大学 13点

以下略

現役部員ベスト記録一覧

男子

1977年7月11日現在

種目	氏名	学年	100m	200m	400m	800m
自由型	村田邦夫	4	1-00-7•	2-17-5•	5-12-2•	
"	木下修一	4			6-03-0	
"	平野輝雄	4	1-15-4	2-58-0	6-17-0	14-26-0
"	阿部誠次	4	1-24-4	3-21-6	6-54-6	
"	井上央	4	1-17-6	3-01-6	6-43-5	
"	大林良和	4	1-04-0•	2-23-1•	5-08-9•	10-48-4•
"	木戸功	2	1-04-4•			
"	慈幸弘樹	2	1-04-0•	2-25-9•	5-21-0•	
"	土井祐二	2	1-19-0	2-52-0	6-01-6	12-48-8
"	中尾稔	2	1-08-4	2-36-9	5-50-6	
"	永田安徳	2	1-18-6	3-02-6	6-57-2	10-46-1•
"	杉山和弘	2	1-00-2•		5-07-5•	
"	上田剛弘	1	1-08-4	2-29-5•	5-27-6	11-46-5
"	亀井尚之	1	1-11-5		5-57-2	12-56-1
"	土井和幸	1	1-23-1			
"	久保田純生	1	1-17-0			
"	養谷祐司	1	1-36-7			
"	陳伯志	M1				
平泳	平石康	4	1-17-5•	2-45-1•		
"	後藤信人	4	1-19-7•	2-55-0•		
"	慈幸弘樹	2	1-16-0•	2-56-2•		
"	村上正之	2	1-46-1	3-46-1		
"	芝暢彦	1	1-27-0	3-19-2		
"	森鼻隆夫	1	1-32-2	3-30-0		
"	木下修一	4		3-03-9		
蝶泳	村田邦夫	4	1-13-2•	2-52-5•		
"	塩浜英二	4	1-21-0	3-11-0		
"	慈幸弘樹	2	1-11-1•			
"	油谷隆司	2	1-30-6	3-47-9		
"	杉山和弘	2	1-09-6			

種目	氏名	学年	100 m	200 m	400 m	800 m
背泳	酒井正人	4	1-12-5*	2-35-2*		
"	慈幸弘樹	2		2-57-7*		
"	木戸功	2	1-19-9	3-01-6		
"	杉山和弘	2	1-09-6*			
"	館谷彰司	2	1-35-2	3-27-1		
個混泳	平石康	4		2-39-0*	5-56-2*	
"	木下修一	4		2-58-7		
"	酒井正人	4		2-41-9*	6-06-0*	
"	慈幸弘樹	2		2-34-4*	5-44-2*	

※ ・印は10傑に入っている記録を示す

女子

種目	氏名	学年	50 m	100 m	200 m	400 m
自由型	高木史子	4		1-20-3		
"	栗野正子	4	36-0	1-30-6	3-34-0	7-18-8
"	有本智恵	3	33-4	1-15-3	2-53-8	
"	清水万里	2	33-8	1-16-2	3-10-7	6-18-0
"	山本純子	2	37-6	1-25-8	3-21-2	7-00-4
"	坂井久子	2	46-5	1-43-8		8-25-4
"	池上英子	2	59-0	1-57-2		8-36-2
"	橋爪啓子	1	40-0	1-29-3	3-22-3	7-04-8
平泳	橋爪啓子	1		1-56-6		
蝶泳	有本智恵	3	36-1	1-31-2	3-28-2	
"	清水万里	2		1-42-3		
背泳	清水万里	2	43-0	1-33-2	3-11-3	
"	松木克江	2	50-0	1-52-6	4-09-7	
"	上羽正子	1				
個混泳	高木史子	4			3-16-6	7-09-8
"	清水万里	2			3-12-0	

歴代 10 傑表

昭和 52 年 7 月 31 日現在

一
〇
〇
m
自由
型

1.	浜川広海	学22	58-8	S.26
2.	杉山和弘	新28	1-00-2	S.52
3.	村田邦夫	新26	1-00-7	S.51
4.	丸末一之	新25	1-02-8	S.51
5.	佐敷一定雄	新22	1-03-1	S.47
6.	中西康之	新25	1-03-7	S.50
7.	平石良和	新26	1-03-8	S.52
8.	大藤幸弘	新28	1-04-0	S.52
8.	慈幸弘	新28	1-04-0	S.52
10.	木戸功	新28	1-04-4	S.52

二
〇
〇
m
自由
型

1.	浜川広海	学22	2-09-0	S.26
2.	村田邦夫	新26	2-17-5	S.51
3.	丸末一之	新25	2-19-9	S.51
4.	佐敷一定雄	新22	2-23-0	S.48
5.	大藤良和	新26	2-23-1	S.52
6.	木村多加緒	新18	2-24-0	S.43
7.	中西康之	新25	2-25-0	S.49
8.	慈幸弘	新28	2-25-9	S.52
9.	玉置明	新18	2-27-4	S.43
10.	上田剛弘	新29	2-29-5	S.52

四
〇
〇
m
自由
型

1.	丸末一之	新25	5-01-5	S.51
2.	杉山和弘	新28	5-07-0	S.52
3.	大藤良和	新26	5-08-9	S.49
4.	村田邦夫	新26	5-12-2	S.51
5.	玉置明	新18	5-14-7	S.43
6.	高岡保宏	新10	5-18-1	S.34
7.	慈幸弘	新28	5-21-0	S.51
8.	中西康之	新25	5-21-5	S.48
9.	平石良和	新26	5-22-2	S.52
10.	浅間啓介	新10	5-22-8	S.36

八〇〇m自由型

1.	丸末一之	新25	10-36-3	S. 51
2.	杉山和弘	新28	10-46-1	S. 52
3.	大林良和	新26	10-48-4	S. 49
4.	玉置明	新18	11-00-4	S. 43
5.	木村多加緒	新18	11-04-1	S. 42
6.	浅間啓介	新10	11-12-2	S. 36
7.	高岡保宏	新10	11-20-1	S. 34
8.	佐敷定雄	新22	11-20-4	S. 48
9.	中西康之	新25	11-24-0	S. 48
10.	天野孝司	新24	11-27-2	S. 47

一〇〇m平泳

1.	鈴木俊彦	新17	1-14-3	S. 42
2.	慈幸弘樹	新28	1-16-0	S. 52
3.	平石康	新26	1-17-5	S. 51
4.	菊田修三	新18	1-19-0	S. 44
5.	後藤信人	新26	1-19-7	S. 52
6.	佐藤弘之	新25	1-20-8	S. 51
7.	安茂弘	新11	1-22-6	S. 38
8.	栗原稔		1-22-8	S. 40
8.	渡辺義治	新23	1-22-8	S. 47
8.	小林正文	新25	1-22-8	S. 51

二〇〇m平泳

1.	平石康	新26	2-45-1	S. 52
2.	鈴木俊彦	新17	2-45-5	S. 43
3.	後藤信人	新26	2-55-0	S. 52
4.	小山賢之助	学 1	2-55-5	S. 4
4.	阿部洋三	新15	2-55-5	S. 39
6.	菊田修三	新18	2-55-6	S. 44
7.	慈幸弘樹	新28	2-56-2	S. 51
8.	小林正文	新25	2-59-3	S. 51
9.	岩切博	新19	2-59-9	S. 45
10.	大崎		3-00-2	S. 39

一〇〇m背泳

1.	杉山和弘	新28	1-09-6	S. 52
2.	田淵五郎	新3	1-11-8	S. 27
3.	酒井正人	新26	1-12-5	S. 51
4.	木村多加緒	新18	1-12-7	S. 43
5.	井上隆史	新10	1-14-0	S. 36
6.	玉木喜代明	新19	1-14-6	S. 44
7.	岡村司	新7	1-16-0	S. 33
8.	印南修三	新22	1-16-7	S. 46
9.	岡見晴児	新6	1-17-0	S. 31
10.	部坂克夫		1-17-2	S. 12

二〇〇m背泳

1.	木村多加緒	新18	2-34-8	S. 43
2.	酒井正人	新26	2-35-2	S. 52
3.	玉木喜代明	新19	2-44-3	S. 44
4.	印南修三	新22	2-47-7	S. 46
5.	瓜生誠二郎	新23	2-49-4	S. 47
6.	木下雅浩	新14	2-52-2	S. 44
7.	福田大武		2-53-8	S. 44
8.	佐藤弘之	新25	2-56-8	S. 48
9.	慈幸弘樹	新28	2-57-7	S. 51
10.	杉山和弘	新28	2-58-6	S. 52

一〇〇m蝶泳

1.	佐敷定雄	新22	1-05-2	S. 46
2.	大橋進	新19	1-09-1	S. 44
3.	杉山和弘	新28	1-09-7	S. 52
4.	阿部洋三	新15	1-10-0	S. 41
5.	由佐禎男	新15	1-11-0	S. 41
6.	慈幸弘樹	新28	1-11-1	S. 51
7.	村田邦夫	新26	1-13-2	S. 52
8.	佐藤弘之	新25	1-13-7	S. 49
9.	熊岡禎二	新17	1-15-9	S. 44
10.	上田敏彦	新24	1-16-4	S. 50

二〇〇m 蝶泳

1.	佐敷定雄	新22	2-34-5	S. 48
2.	阿部洋三	新15	2-40-1	S. 41
3.	大橋進	新19	2-48-1	S. 45
4.	菱田徹	新18	2-51-6	S. 44
5.	村田邦夫	新26	2-52-5	S. 51
6.	藤森一男	新23	2-53-1	S. 49
7.	安部弘之	新25	2-56-1	S. 38
8.	佐藤英幸	新12	2-57-2	S. 49
9.	武政幸	新12	2-59-5	S. 38
10.	慈幸弘樹	新28	3-00-9	S. 52

二〇〇m 個混泳

1.	慈幸弘樹	新28	2-34-4	S. 51
2.	平石康	新26	2-39-0	S. 52
3.	酒井正人	新26	2-41-9	S. 52
4.	鈴木俊彦	新17	2-44-1	S. 42
5.	小越信昭	新14	2-44-5	S. 38
6.	佐敷定雄	新22	2-45-6	S. 48
7.	佐藤弘之	新25	2-46-8	S. 48
8.	丸末一之	新25	2-47-5	S. 50
9.	木村多加緒	新18	2-48-6	S. 43
10.	藤森一男	新23	2-50-0	S. 47

四〇〇m 個混泳

1.	慈幸弘樹	新28	5-44-2	S. 51
2.	平石康	新26	5-56-2	S. 51
3.	木村多加緒	新18	5-58-2	S. 43
4.	鈴木俊彦	新17	5-59-4	S. 42
5.	酒井正人	新26	6-06-0	S. 52
6.	佐藤弘之	新25	6-15-4	S. 48
7.	沢内孝夫		6-15-8	S. 42
8.	熊岡禎二	新17	6-23-5	S. 44
9.	岩切末博	新19	6-24-2	S. 45
10.	丸末一之	新25	6-25-0	S. 49

四〇〇m混継泳

1.	酒井・平石・慈幸・杉山	4-42-4	S. 52
2.	酒井・平石・杉山・村田	4-43-9	S. 52
3.	酒井・後藤・村田・杉山	4-44-7	S. 52
4.	酒井・平石・慈幸・村田	4-45-7	S. 51
5.	木村・鈴木・大橋・以西	4-48-5	S. 43

二〇〇m継泳

1.	慈幸・丸末・村田・木戸	1-55-0	S. 51
2.	丸末・佐藤・伊藤・中西	1-57-3	S. 50
3.	佐藤・大林・中西・丸末	1-57-4	S. 49
4.		1-58-4	S. 27
5.		1-59-2	S. 6
5.		1-59-2	S. 14

四〇〇m継泳

1.	杉山・慈幸・平石・村田	4-13-1	S. 52
2.	丸末・慈幸・酒井・村田	4-19-9	S. 51
3.	慈幸・伊藤・村田・丸末	4-21-3	S. 51
4.	以西・玉置・熊岡・木村	4-32-2	S. 43
5.	中西・藤森・佐藤・佐敷	4-33-3	S. 48

八〇〇m継泳

1.	丸末・伊藤・慈幸・村田	9-33-0	S. 51
2.	大林・慈幸・平石・杉山	9-36-2	S. 52
3.	慈幸・酒井・村田・杉山	9-44-9	S. 52
4.	丸末・酒井・慈幸・村田	9-48-3	S. 51
5.	平石・慈幸・村田・丸末	9-53-7	S. 51

昭和五十一年度凌泳会総会報告

学22 石 井 義 章

日時 昭和五十一年五月二十九日(日)

場所 六甲台 教官食堂

出席者 山田幸男(水泳部長) 小山賢之助(学1) 山田常雄(1)

宮本伯夫(3) 中村市治(9) 鈴木啓介(10) 岡本忠男

(12) 石井義章(22) 山本幸雄(22) 中井三郎(22) 松田

司朗(新5) 岡村司(7) 萩原武(10) 高岡保宏(10) 藤

岡治男(11) 小越信昭(14) 玉置明(18) 井上与志男(18)

井上史朗(18) 長谷川健(22) 藤森一男(23) 田湖耕(24)

佐藤弘之(25) 伊藤良一(25) 以上二十四名

水泳部員 二十二名

新緑匂う六甲台に於て、五十一年度凌泳会総会を開催致しました。

この日は午後一時から古林先生の追悼ピヤパーテイも予定されて居

る為、全国各地から続々とOBが集まって来られました。一番乗は

豊橋の鈴木先輩(10)で、何でも内臓の精密検査中とかで、前日は

何も食べておられないのに、この朝ブランド二杯ひっかけて、一

番の新幹線でかけつけられたとか、その上、開会迄には時間がある

からと、早速プールに飛び込み一泳ぎ、全く恐れ入った次第です。又、

卒業以来二十数年振りだと、阪急六甲駅から、過ぎし青春の日々を
思い起しながら、歩いて登って来られた先輩もありました。その昔、
米軍キャンプだった六甲ハイッは大学本部・農学部等の学舎が立並
び、又アメリカンスクール跡には日本住宅公団のマンションが林立
し、それにも増して、曾ては六甲山麓の緑陰に囲れた学舎が、今で
は、はるか上迄宅地造成され、すっかり住宅に取囲まれてしまった
姿には、転々、今昔の感を深くされた様でした。

さて、十時過ぎ、総会開会、議事に先立ち古林先生の御冥福を祈
って一分間の黙禱を捧げた後、山田副会長を議長とし、石井幹事長
を司会進行係として、議案審議に入りました。以下逐条御報告致し
ます。

一、昭和五十一年度一般経過報告

五月十六日(日) 凌泳会総会 於神戸製鋼健保プール

九月十五日(水) 月見の宴 六甲台プール

十月 特別会員、多田徳雄先生御逝去、御長女広田

様方(広島県)に於て、享年87才

(五十二年)

一月九日(日) 初泳ぎ会、かるもプール

一月十一日 凌泳会会長 古林喜楽先生御逝去、詳細につ

いては報告済の為省略。

水泳部員の活動については別掲戦績表参照願います。

二、昭和五十一年度決算報告

別掲決算報告書の通り

◎古林先生御逝去に伴う臨時出費は、全国大会基金より一時立替、五十二年で戻れる事としました。

◎会員総数約二六〇名に対し納入者数一二四名（四八％）、通信可能者数二一〇名（八一％）はあまりにも低率である。納入率を上げる努力及び工夫をしなければならない。（この件予算の項で論議）。

三、昭和五十二年予算案

別掲予算表参照

◎総会案内状にも記載しました通り、古林先生御逝去に伴う諸費用の戻入の為。又先生の追悼特集「凌泳」の発行の為。通常会費二、五〇〇円に加えて臨時会費一、五〇〇円を徴収させて頂く事となりました。尚、これでも不足が予想されるので臨時会費を二、五〇〇円とし、合計五、〇〇〇円にしてはとの意もありましたが、納入率を上げれば、カバー出来ると思はれるので、その方の努力をする事で、本年度会費は原案の通り四、〇〇〇と決りました。

◎納入率の向上につき、総会の席上熱心に御討議頂き、更に追悼パーティ終了後、席を変えて論議継続、内容以下列記致します。
①通信可能者数二一〇名（八一％）は名簿の整備をすればもっと

上る筈だ、旧制及び、六甲三学部については、凌霜会名簿を参照すれば、大部分判明する。又、それ以外の学部についても、夫々同窓会名簿がある筈なので、正確な名簿を作る事。

(ロ)昔は現役部員が、シーズンオフに或は、遠征の途次OBを訪問し、集金すると共に部の現況を報告する等、コミュニケーションを計っていたが、昨今の様に交通費が上り、一方、会費が相対的に低額となって来ると、足代にも足らなくなり、訪問集金が、出来なくなって来ると、已むを得ないかと思はれる。

(イ)その為、勢い、郵便振替等を利用する事となるが、それには事務処理を確実に行う事。半年もたつて、受取書を送って来る様では、OBとしても、出したか、出さなかったか忘れてしまう。

(ニ)先づ、納入期限を定める事、今後五月末を納期限（本年は六月末）と明記して、送金依頼を出す。

(ホ)一方、各地方に支部組織があるのだからこれを活用し、納期限が過ぎれば、可及的速やかに、支部単位の会員名簿を作りこれに、会費納入の消込みをして、各支部幹事に送る事、支部幹事は、折を見て未納者に送金を促す。

(ハ)次年度「凌泳」発行の折、会費納入者の名及び金額を一覧表にして掲載する。

(ニ)会費年額二、五〇〇円は今日の貨幣価値から見ても、低く過ぎると思はれるので、五、〇〇〇円位に引上げてもよいのではない。但し、高令者は、次第に馴みも薄くなり、中には負担に感

じる方もあるかもしれないので、七〇才位を目処に、金額に差をつけては如何（この件、今後の検討課題として保留）。

伊現在、会員全体の交流の媒体として、「凌泳」は唯一の物であるが、それには少々お粗末すぎないか、OBの投稿を集め、紙質、活字を改良し、せめて雑誌「凌霜」程度に出来ないものか。費用はかかると思うが、OBも関心に向けてくれるのであろうし、延いては会費の納入率の向上にも繋がる事にならう。

四、昭和五十二年度行事予定

別掲予定表の通り。尚、今年は六甲台プールでの行事予定が多数ありますので各位の応援、御助力をよろしくお願い申し上げます。

五、役員改選

別記の通り本年度役員選出されました。

◎会長につきましては、小山先輩より、東京在住の為、その任が果せないからとの御意向もありましたが、関西に山田副会長が居られる事でもあり、御都合悪い場合は、副会長に代行頂くこと云う事で、会長引受を承認頂きました。

◎副会長につきましては山田先輩に御留任頂きました。会則には二名とありますが、その趣旨は、関東、関西に各一名と云う事であり、今回、関東に会長、関西に副会長が居られる事になり

ましたので、副会長の補充をせず、一名空席のままとなりました。

◎監事御就任頂ける方がなく、本年も空席となりました。

◎幹事長 石井義章 留任

◎幹事 鈴木正弥君、東京転勤の為辞任、後任補充せず。萩原武、玉置明の両君留任。

◎会計担当幹事 前田和秀君転勤に伴い辞任、後任補充せず。

長谷川健君に本年もお願いする事になりました。

凌泳編集幹事 提荘祐君 留任

◎支部幹事

関東支部の内、林荘八郎君が海外勤務の為辞任（補充せず）名古屋支部を中部支部と呼称変更。

その他は変更なく留任をお願いする事となりました。

尚、支部幹事の方々には、前述の通り、会費未納者のチェック等をお願いする事になりますが、宜敷くお願い申し上げます。

六、その他

◎現役水泳部員自己紹介、本年度新入部員十名、部員現在数三十四名

◎平石主将より、競技は参加する事に意義があるのではなく、勝つ事に意義がある。本年は、全国国公立戦に団体出場出来る様、部員一丸となって頑張る旨、力強い発言あり。

◎近年女子部員の増加が目立つ。水泳普及の上から喜ばしい事ではあるが、風紀上の問題等、苟も神大水泳部として恥ずかしくない様、自覚とプライドを持って行動して欲しい。又、部の組織、運営上、問題がある様なら、女子部の独立等検討する必要があるかもしれない。

多数の会員の出席を得て、多くの貴重な御意見、御助言を頂き会を代表して厚く御礼申し上げます。今後とも当会の発展と水泳部の活躍のために御助力を頂きます様、御願い致しまして結びとします。

昭和 5 1 年度決算報告

○ 凌 泳 会

収 入

凌泳会会費	3 0 8,5 0 0 円
寄 付 金	8 4,0 0 0
	3 9 2,5 0 0

※納入者総数 1 2 4 名

支 出

「凌泳」発行費	1 0 2,0 0 0 円
会合費(總會・月見)	3 2,1 3 0
通 信 費	5 9,3 4 0
交 通 費	2 3,0 9 0
航空部援助	4,5 0 0
基金積立	2 0,0 0 0
水泳部援助	1 5 1,4 4 0
	3 9 2,5 0 0

○ 全国凌泳会基金

収 入

昭和50年度繰越金	8 0,0 0 0 円
昭和51年度積立金	2 0,0 0 0
東京支部分担金	1 0,0 0 0
	1 1 0,0 0 0

支 出(故古林先生関係)

御 見 舞	3 0,0 0 0 円
御香典・御供花料	2 0,0 0 0
報告書印刷代	2 0,0 0 0
報告書郵送代	1 4,0 0 0
次年度繰越金	2 6,0 0 0
	1 1 0,0 0 0

○ 水 泳 部

収 入

昭和50年度繰越金	2 2 3,7 0 円
部員アルバイト	5 3,9 0 0
凌泳会援助	1 5 1,4 4 0
部員負担	5 7 8,7 5 0
育友会援助	5 2,0 0 0
ユニホーム部員負担	7 0,0 0 0
	9 2 8,4 6 0

支 出

水連登録費 (団体5000, 個人36,000)	4 1,0 0 0 円
試合・練習費	6 4,5 7 0
交通・通信費	8,0 6 0
設備・消耗費	3 4,3 0 0
燃 料 費	6,6 4 0
衛 生 費	1 8,5 5 0
合 宿 費	4 7 5,7 7 4
会 合 費	1 8 0,8 1 6
ユニホーム費	7 4,0 0 0
雑 費	4,3 3 0
次年度繰越金	1 6,4 2 0
	9 2 8,4 6 0

昭和52年度予算

○ 凌 泳 会

収 入

凌泳会通常会費	3 2 5, 0 0 0 円
本年度臨時会費	1 9 5, 0 0 0
寄 付 金	8 0, 0 0 0
	6 0 0, 0 0 0

支 出

「凌泳」発行費	2 0 0, 0 0 0 円
会 合 費	3 0, 0 0 0
通 信 費	7 5, 0 0 0
交 通 費	2 5, 0 0 0
基 金 積 立	2 0, 0 0 0
基 金 返 済	7 4, 0 0 0
水泳部援助	1 7 6, 0 0 0
	6 0 0, 0 0 0

○ 全国凌泳会基金

収 入

昭和51年度繰越金	2 6, 0 0 0 円
返 済 金	7 4, 0 0 0
昭和52年度積立金	2 0, 0 0 0
	1 2 0, 0 0 0

○ 水 泳 部

収 入

昭和51年度繰越金	1 6, 4 2 0 円
部員アルバイト	7 0, 0 0 0
凌泳会援助	1 7 6, 0 0 0
育友会援助	6 0, 0 0 0
部 員 負 担	7 6 0, 0 0 0
	1, 0 8 2, 4 2 0

支 出

水連登録費	3 0, 0 0 0 円
試合・練習費	3 5, 0 0 0
交通・通信費	1 0, 0 0 0
設備・消耗費	7 0, 0 0 0
燃 料 費	1 0, 0 0 0
会 合 費	1 8 0, 0 0 0
合宿費(春)	3 7 8, 0 0 0
合宿費(夏)	3 6 0, 0 0 0
雑 費	9, 4 2 0
	1, 0 8 2, 4 2 0

昭和52年度行事

- | | |
|------------------|---------------------|
| ○4/7(木)~4/10(日) | 春季合宿(和歌山県湯浅、広川温泉) |
| ○4/30(土) | 新入生歓迎コンパ(五毛会館) |
| ○5/29(日) | 凌泳会総会(六甲台教官食堂) |
| ○6/5(日) | 県春季水球大会(市立須磨高校) |
| ○6/19(日) | 京阪神三大学戦(京都大学) |
| ○6/26(日) | 関西ポロリーグ戦(大阪市立大学) |
| ○7/3(日) | 兵庫県学生選手権(甲南高校) |
| ○7/4(月)~7/9(土) | 夏季第一次合宿(六甲台) |
| ○7/16(土)・7/17(日) | 関西国公立戦(大阪府立大学) |
| ○7/22(金) | 水球神京戦(六甲台) |
| ○7/24(日) | 対市大戦(六甲台) |
| ○7/27(水)~7/29(金) | 夏季第二次合宿(六甲台) |
| ○7/31(日) | 旧三商大戦(六甲台) |
| ○8/6(土)・8/7(日) | 全国国公立戦(京都大学) |
| ○8/12(金)・8/13(土) | 関西学生選手権(くずは五月公園プール) |
| ○8/28(日)・8/29(月) | 近畿地区国立大学体育大会(六甲台) |
| ○9/4(日) | 京阪神三大学J戦(大阪大学) |
| ○9/6(火) | 関西ポロリーグJ戦(大阪市立大学) |
| ○9/15(木) | 月見の宴 |

凌 泳 会 会 則

第一章 総 則

第一条(名 称)

本会は凌泳会と称する。

第二条(事務所)

本会は事務所を神戸市灘区六甲台町神戸大学に置くこととし、宛名は同大学学生課気付「凌泳会」とする。

第三条(目的)

本会は会員相互の連絡と親睦を図ると共に、神戸大学水泳部の発展に寄与することを目的とする。

第四条(事業)

本会は前条の目的を達成する為に左記の事業を行なう。

一、会誌「凌泳」の発行

二、会員相互の連絡

三、定例総会及び各種の親睦会合

四、神戸大学水泳部発展の為の指導及び援助

五、その他、本会の目的を達成するに必要な事項

本会則の制定及び変更は総会の決議によって行なう。

第五条(会則の改廃)

第二章 会 員

第六条(会 員)

本会の会員を分けて正会員、特別会員、及び在学会員とする。

第七条(正会員)

正会員とは、次のものを云う。

国立神戸高等商業学校 国立神戸商業大学 神戸経済大学 神戸大学

以上の諸学校に於て在学中水泳部に所属したものの。

第八条(特別会員)

特別会員とは次のものを云う。

第九条（在学会員）

一、前条の諸学校で水泳部々長及び副部長であった者及び現在ある者。
二、その他、総会の決議によって推薦した者。

在学会員とは次のものを云う。

現在、神戸大学々生で水泳部に所属する者。

第十条（会費）

正会員は会費として年額二、五〇〇円を当会へ納入する。

第三章 役員

第十一条（役員）

本会には左記の役員を置く。

会長 一名

副会長 二名

監事 若干名

幹事長 一名

本部幹事 若干名

支部幹事 若干名

第十二条（改選）

役員の改選は総会の決議によって行なう。

第十三条（任期）

役員任期は一年とし再選を妨げない。

第十四条（会長）

会長は本会を代表し且つ統轄する。

第十五条（副会長）

副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代行する。

第十六条（監事）

監事は本会の会務及び会計を監査する。

第十七条（幹事長及び本部幹事）

幹事長及び本部幹事は会長、副会長を補佐し総括的会務の執行に当る。

第十八条（支部幹事）

支部幹事は各支部の事務を執行すると共に、本部の諸活動に協力する。

第四章 総 会

第十九条（招 集）

第二十条（時 期）

第二十一条（議 決）

総会は少くとも二週間以前に会議の目的を明らかにした通知を以って会長がこれを招集をする。

総会は毎年五月に開催するものとし、臨時総会は必要に応じて招集する。

総会の決議は出席正会員の過半数をもって決する。

但し、当該議事につき書面をもってあらかじめ意思を表示したものは出席とみなす。

第五章 会 計

第二十二条（経 理）

第二十三条（決 算）

第二十四条（期 間）

本会の経理は、会費、寄附金及びその収入によって賄う。

本会の収支決算については、会計の監査を経た上、春季総会に於て報告しその承認を受ける。

本会の会計年度は、毎年四月一日より三月三十一日までとする。

第六章 雑 則

第二十五条

本会則は、昭和五十年五月十七日より発効する。

凌 泳 会 役 員 名 簿

会 長	小 山 賢之助(学1)	
副 会 長	山 田 常雄(学1)	他一名空席
監 事	空 席	
幹 事 長	石 井 義 章(学22)	
幹 事	萩 原 武(新10)	玉 置 明(新18)
會計担当幹事	長 谷 川 健(新22)	
凌泳編集幹事	堤 莊 祐(新12)	
支 部 幹 事		
〔関東〕	小 山 賢之助(学1)	森 芳 夫(学10)
	浜 川 広 海(学22)	永 野 一 彦(新8)
	鈴 木 啓 介(学10)	
〔中部〕	古 川 富貴男(学13)	
〔中国〕	中 村 市 治(学9)	
〔四国〕	印 藤 勝 美(学13)	
〔九州〕		
〔関西〕		
京都	柳 本 正 雄(新10)	
大阪	玉 置 明(新18)	井 上 与志男(新18)
姫路	山 口 仁 郎(新5)	
		山 口 宗 樹(学10)

凌泳会々員名簿

物故會員

三輪喜一郎	古林喜次郎	繁益繁次郎	鈴木不覆雄	山下虎藏	山村零一	榑原聖一	中村幸一	岡本曾一	野田茂	加納房穂	小笠原徳雄	多田正太郎	藤井
20	19	19	19	18	17	17	17	17	16	16	15	高特	特

和泉真弘	栄昌二	片山四郎	小西熊雄	鍵本芳雄	太田清	川西武雄	阪本豊一	東光武三	田川亮一	浅野猛	中村毅	大谷親之輔	高田寿三
7	6	5	3	2	26	26	22	22	22	21	21	20	高20

今井彰	中島功	伊藤藤一郎	前田礼之	池田敷治	山口八郎	稻垣慶三	柏木上幸	井上正悟	恩地正夫	部坂克夫	新原拓郎	松木秀勇	村上造
3	1	17	14	13	12	11	11	11	10	10	9	8	7

神戸商業大学校歌 商 神

1. 商神彩なす翹をあげて
靈杖遙に東を指せば
靈しき果実は雲間を漏りて
秋津島根に落つとぞ見えし
所はここぞ菊水かおる
湊河原の近きほとりに
かく伝わりし天のさとしも
人はさとらで幾年か経ぬ
2. 神の息吹のこもりて成りし
靈果いかで地に朽つべき
豊栄のぼる朝日のかげに
八州の外の潮風吹きて
いつしか催す気運に乗じ
わが学校ぞ世に生まれたる
眠る 商界夢さますべき
使命は天の授けし所
3. 此処摩耶の山六甲の峰
連り亘る山ぶところに
数の若鷹はぐくまれ居て
静かにうかぶ雲の行きかい
朝妙なる琴のひびきは
敏馬の浜に松を吹く風
夕やさしき舞の姿は
茅渚の浦曲に白帆行く影
4. 希望に満てる春の潮の
寄せてはかえす清き渚や
熱誠もゆる夏の盛りを
いたわる風の葎合の里
須磨や明石をかけて照るらん
月には物のあわれをぞ知る
冬は凜たる後に嵐
奔馬空行く勢示す
5. 天れ山水の秀麗の気は
偉人傑士を起たしむとかや
天の使命を胸に収めて
清き自然に抱かれながら
筋骨鍛え智徳を研く
切磋琢磨の三年の春秋
養い得たるうつ物の意気
抱負を語れや干余のおのこ
6. 金歌無欠の三千余年
かがやく光は劍の誉
心はおなじ大和男子の
我等は牙 を執って起ちなん
日出ずる旗を高くかざして
日入らぬ国と手を携えて
目ざす平和の戦の場に
匂う御国の花ぞ咲かせむ
7. 雄飛の時ぞとねぐら離れて
野に立出ずる蒼涼幾羽
爪も研ぎぬ力も足りぬ
尋にも余るつばさを張れば
枝の百鳥皆おそれ伏す
扶揺万里の風を起して
おのが向々東に西に
雲に突き入る勢見るや

神戸商業大学校歌 商 神

しょうしん あやなす つばさをあげて
 れいじゅう はるかに ひがしをさせば
 くしき このみは くもまをもりて
 あきつー しまねに おつとぞ みえしと
 こーろは ここぞきくすいか おるみ
 っなどが わらのちかきほとりに
 かくつたわりしあめのさとしも
 ひとはさとらでいくとせかへぬ

水 泳 部 歌

作詩 古林 喜楽

作曲 山田 貴彦



1. ま やろっこりに いたかれて ここむこがおかの
 2. フリー プレスト バタフライ バックリレーに
 3. ああなつかしの すい えいぶ ろっこうだいの -



みず きよし ちぬのうらわを みおろしてしぶ
 ボロまでも むうえいけんじの いきたかしいざ
 プールべに つきみのえんで - およぎやめくる



き(しぶきを)をあー げ る け ん だー ん じ
 や(いざや-)きそ わ ん う で をーぶし
 な(くるなつ)つまっ - て い き りー た つ

一、摩耶六甲に抱かれて

ここ六甲ヶ丘の水清し

茅渚の浦曲を見下して

しぶきをあげる健男子

二、フリー プレスト バタフライ

バック リレーにボロまでも

凌泳健児の意気高し

いざや鼓わん腕を撫し

三、ああ懐しの水泳部

六甲台のプール辺に

月見の宴で泳ぎ止め

来る夏待っていきり立つ

宇宙を股に

神戸大学応援歌

作詩 古林 喜楽

作曲 竹内 平吉

勇壮に元気よく

ま や ろ っ こ う に い た か れ て
 み ど り の そ の に は な ふ り か っ る
 こ こ お か の 一 べ の わ こ う ど が
 も ゆ る お も い を む ね に ひ め
 ま な ぶ や ゆ う ひ の と き を き し

三

燃ゆる紅葉たそがれて
 宵聞せまる山路を踏めば
 真理に挑む若鷹が
 ネオンの海を見おろして
 いよ決意をかたむ哉

四

身にしみわたる峯おろし
 冬来りなば春近し
 果立つ晴れの日時せまる
 翼ひろげて悠然と
 宇宙を股に羽ばたかん

一

摩耶六甲に抱かれて
 緑の園に花ふりかかる
 ここ丘の上の若人が
 燃ゆる思いを胸に秘め
 学ぶや雄飛の時を期し

二

ヒマラヤ杉を背に受けて
 茅渚の浦ゆ紀伊の山
 右手に四国上淡路島
 左手にうかぶ金剛山
 大らかにぞ抱負わく

栄光は常にわれらに

神戸大学応援歌

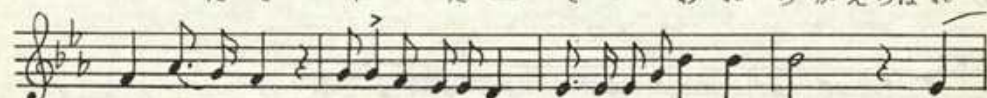
作詞 敷島富四雄

作曲 黒田 浩一

編曲 土橋 康宏



たて や た - て われらがえらばれ



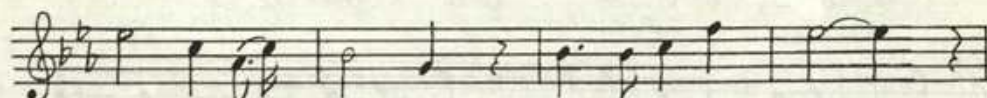
しせんし ほこりのたかき ほまれにかけて た



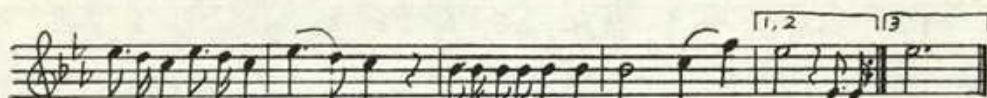
だ めざす しゅうりのかむり



ふるえいざ ふる - え ちからのかぎり かがやかんえい



こりはつ - ね に われら - に -



こりべこりべこりべ われらがこりべだいが - く ゆけ

三

三

一

聞けや聞け
われらが選ばれし戦士
青春の若き血潮たぎらせ
相和するからどきの歌
振るえいざ振るえ意気いや高く
輝かん栄光は常にわれらに
神戸 神戸 神戸
われらが 神戸大学

征けや征け
われらが選ばれし戦士
若人の大い誇を秘めて
胸深く制覇の誓
振るえいざ振るえ雄々しく強く
輝かん栄光は常にわれらに
神戸 神戸 神戸
われらが 神戸大学

起てや起て
われらが選ばれし戦士
母校の高き登にかけて
ただ目指す勝利の栄冠
振るえいざ振るえ力の限り
輝かん栄光は常にわれらに
神戸 神戸 神戸
われらが 神戸大学